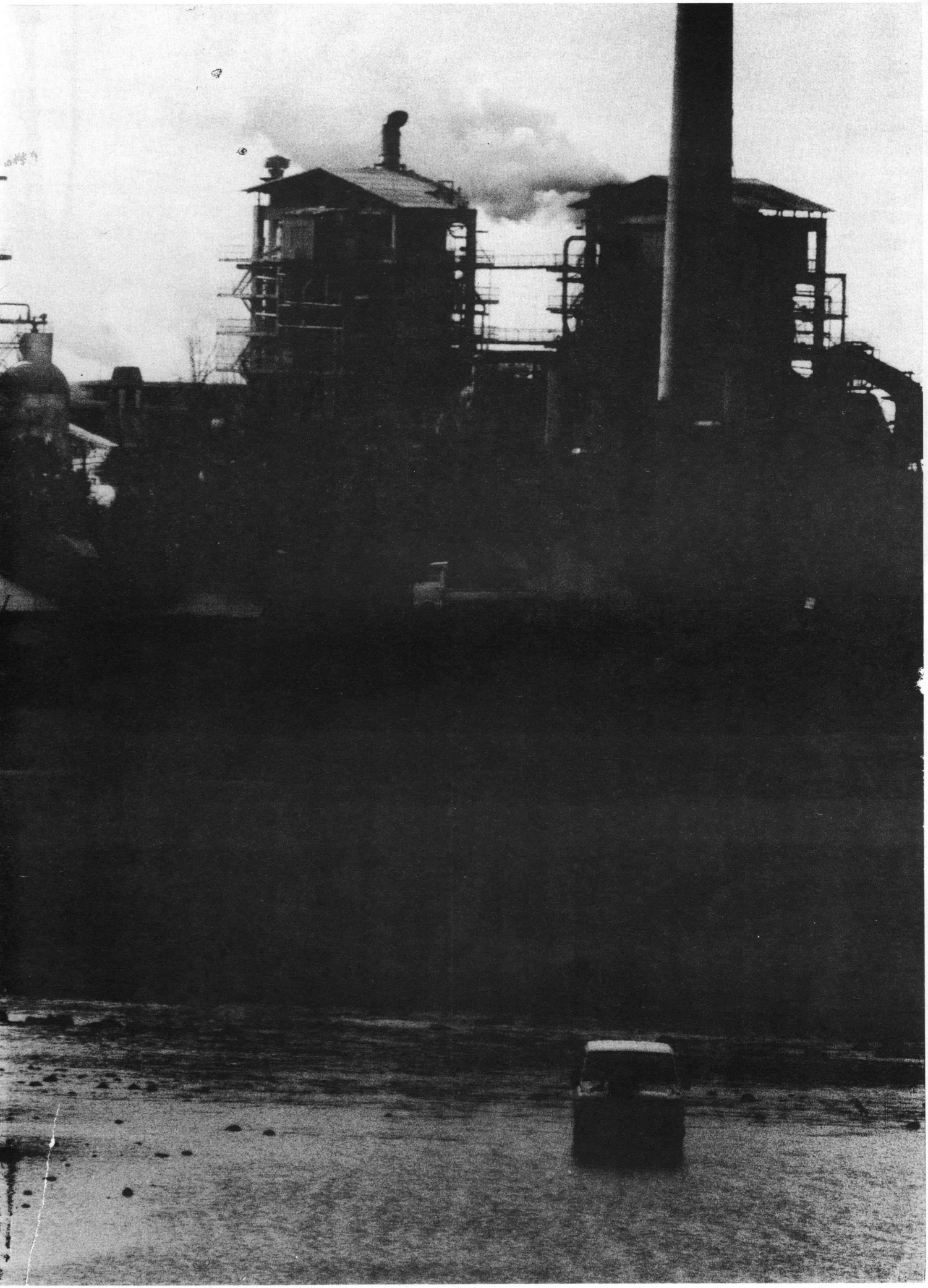
十三年のあゆみ

矢田・庄内川をきれいにする会

庄内川の源流「夕立山」にて

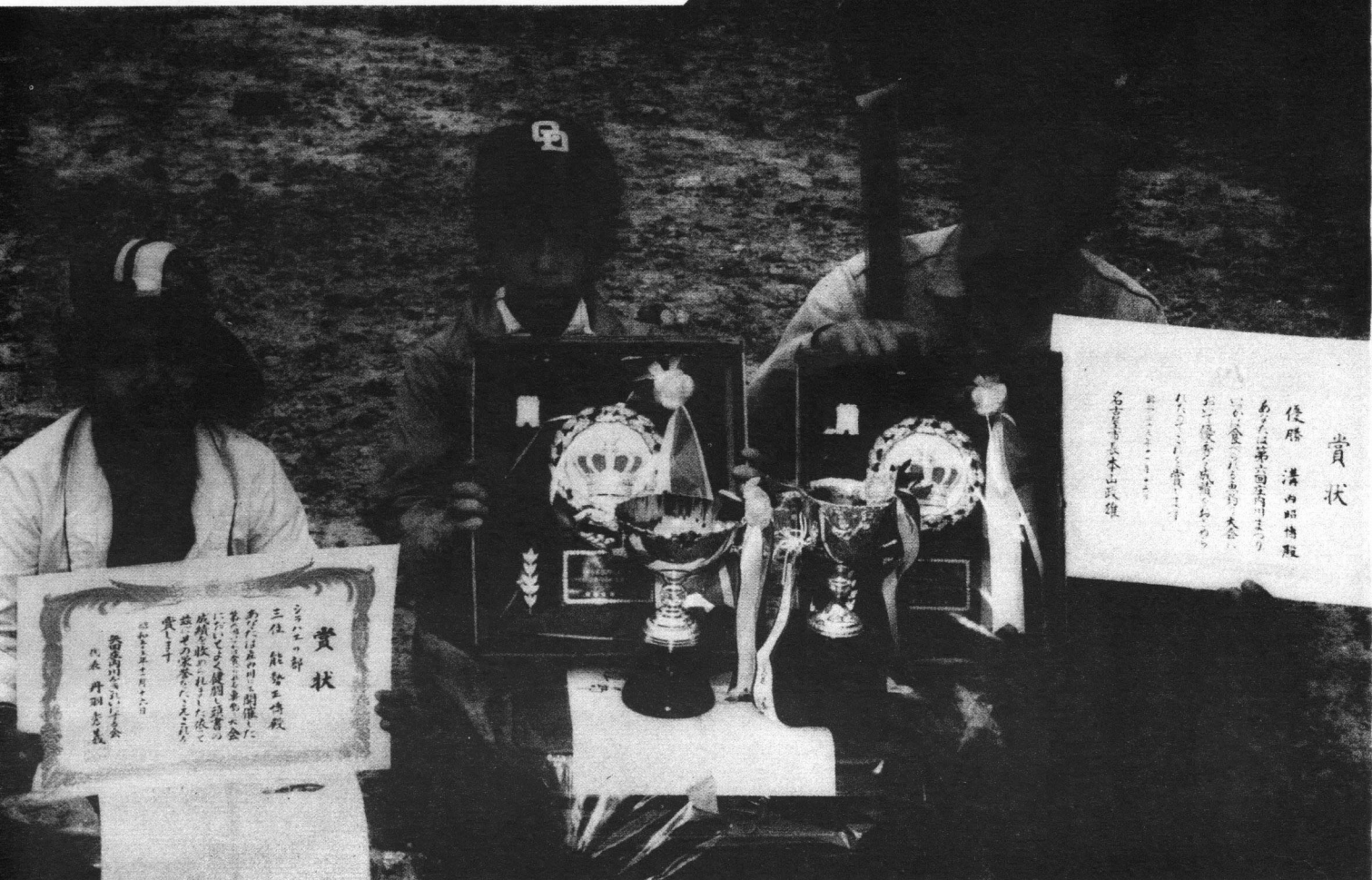
さらに下って土岐川へ

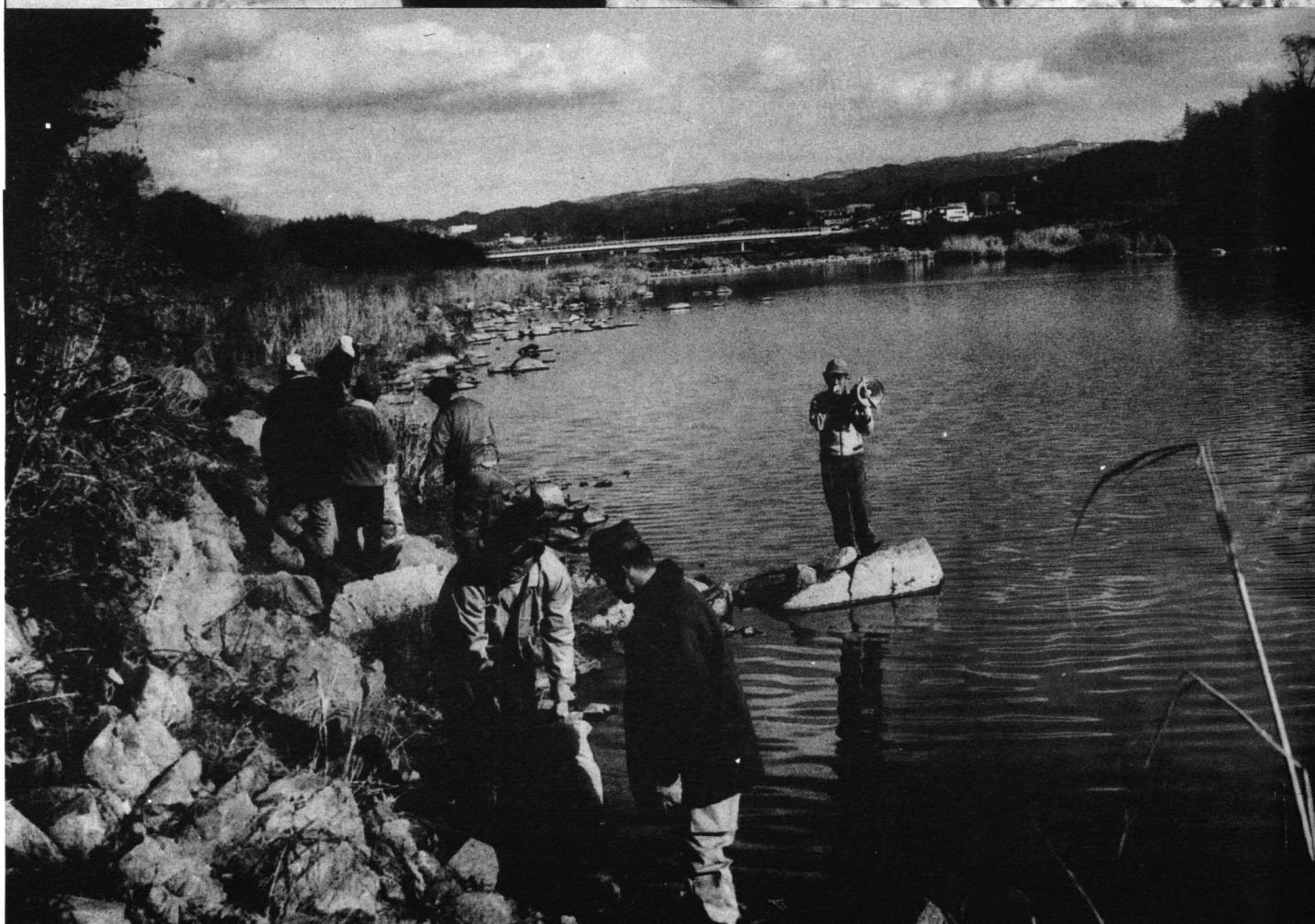


庄内川より望む王子製紙春日井工場

（上）水分橋にて　　（下）庄内橋

釣り大会





「矢田・庄内川をきれいにする会」内、清渓流釣りクラブ「山彦会」

はじめに

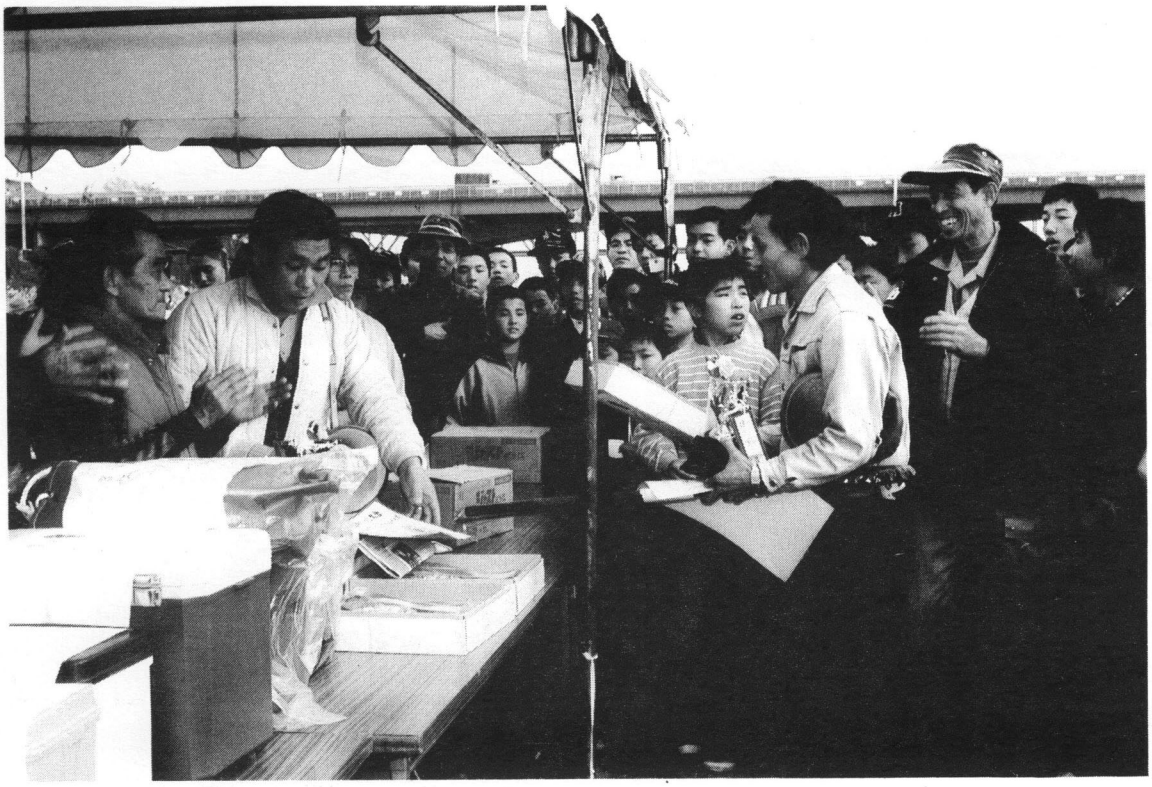
『会十三年のあゆみ』出版にあたり、私たちの世代に汚した水と社会を『川の汚れは心の汚れ』をシンボルに、「次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会づくり」をめざし、生活環境や政党支持の違いをのりこえ、次代への責任と愛情豊かな人々とともに『明るく、楽しく、美しく』をモットーに運動をすすめてまいり、不十分ながらアユの住む庄内川再現ができ、社会にいささかの清涼剤となりました。

十三年の歳月は、河川浄化の視点も徐々に変わり、被害者意識にたっていた住民は家庭排水が加害者になり、産業廃液は今日に至っても多くの問題点を見逃せません。

出版を契機に、苦楽を共にした宮田照由君に後事を託し、困難な長い道のりを勇気をもって歩む若者へ、私に寄せられたご好意以上に激励と協力を各界各位に心からお願いいたします。

「矢田・庄内川をきれいにする会」名誉会長

丹羽秀義



目次

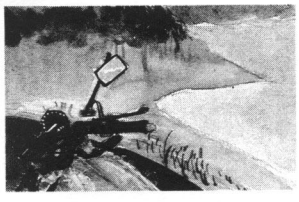
●グラビア① …… 1
はじめに
「矢田・庄内川をきれいにする会」名誉会長 …… 丹羽秀義 …… 6

あいさつ

行政と一体となって …… 本山政雄 …… 8
13年によせて …… 名古屋女子大学 …… 廣　正義 …… 9
魚の坊やと私 …… 日本福祉大学教授 …… 土方康男 …… 10
たべてみた庄内川の魚 …… 衆議院議員 …… 田中美智子 …… 11
さらに息の長い活動を
住民に親しまれる名古屋港を考える会　会長 …… 中田　実 …… 12
稚鮎放流１３０キログラム　土岐川漁業協同組合 …… 土屋保一 …… 13
川の中の懲りない面々
東京新聞＝中日新聞東京本社　社会部 …… 飯室勝彦 …… 14
より快適な環境の街―名古屋の創造をめざして
名古屋市公害対策局長 …… 大山邦雄 …… 15
13年の歩みの出版にあたって
名古屋市職員労働組合　委員長 …… 山岸光夫 …… 16
私と―「矢田・庄内川をきれいにする会」の人々との出会い
住民に親しまれる名古屋港を考える会　事務局長 …… 大石正司 …… 16
庄内川、河川環境に思う―とりもどそう、清流とふれあいのある庄内川
建設省庄内川工事事務所 …… 藤本　保 …… 21
かけがえのない森林 …… 全林野名古屋地本 …… 中野英次 …… 24
写真集『矢田・庄内川点描』 …… 山本光春 …… 26
詩『矢田・庄内川を廻って』　新日本歌人協会幹事 …… 田中　収 …… 32
１３周年によせて　北医療生活協同組合　理事長 …… 徳田　秋 …… 34
私たちは水を必要としています
合成洗剤問題を考える市民連絡会　会長 …… 神岡浪子 …… 34
自然環境を守ろう！
王子公害をなくす「住民の会」春日井支部代表 …… 小原政春 …… 36
自然に対する人間からの接し方
中部の環境を考える会 …… 野呂　汎 …… 37
庄内川河口―藤前干潟の渡り鳥
名古屋港の干潟を守る連絡会　議長 …… 辻　淳夫 …… 40
『庄内川あれこれ……洪水と新川』
「大蛇の話」「大水のこと」「新川開削とその影響」
歴史教育者協議会　会員 …… 半谷弘男 …… 44

「矢田・庄内川をきれいにする会」とともに　（会員のみなさん）

ガキ大将76才の生涯
「矢田・庄内川をきれいにする会」名誉会長 …… 丹羽秀義 …… 49
生前、会に没頭する夫を顧みて …… 小川くに …… 62
夫の口ぐせ、私の口ぐせ …… 宮田明美 …… 64
女性から見た「会」 …… 丹羽あや子・近藤正子 …… 72
迷惑をかけることは、ほんとにいかん …… 村山孝夫 …… 76
矢田川とともに８０年 …… 竹内久雄 …… 82
この辺は葦がいっぱいだった …… 宮田　巌 …… 84
釣りクラブ『山彦会』 …… 鈴木敏・能勢美良 …… 88
『座談会』 …… 宮田照由・村山孝夫・宮田明美・高橋正昭
川上郁郎・埜嵜秀也・丹羽年彌・水野達彦・山崎勝一・三宅隆夫 …… 92
名古屋の淡水生物 …… 名古屋公害研究所水質部 …… 村上哲生 …… 102
川をもっときれいに …… 愛知公害調査の会 …… 今井寿穂 …… 107
13年の実績をふまえて
「矢田・庄内川をきれいにする会」会長 …… 宮田照由 …… 110



●まんが『矢田・庄内川をきれいにする会
あゆみ13年』 …… 三宅みき子 …… 116
●歌『川の歌』『庄内川よ』 …… 124
●グラビア …… 128
●「矢田・庄内川を
きれいにする会」の歴史 …… 129
●釣り大会の歴史 …… 143
編集後記
「矢田・庄内川をきれいにする会」事務局長
三宅隆夫 …… 145

■五つのとりくみ■

①名古屋市の一般会計予算の１パーセントを、堀川をはじめ、河川他の浄化のために …… 25
②鮎の楽園 …… 79
③堀川浄化 …… 86
④ホタルの里づくり …… 125
⑤水のリサイクル …… 144

題字　石川雅宥
写真　山本光春・柘植俊介
中日新聞社(P128・P129) ほか
カット　三宅みき子
水彩画　伊藤　章

行政と一体となって

本山　政雄

このたび、「矢田・庄内川をきれいにする会」が発足されて、はや十三年を迎えるとおうかがいし、これまでの数々の地道なご活躍に敬意を表しますとともに、心からお祝いを申しあげます。

私も、市長として十二年間にわたって携わってまいりましたが、ひとくちに町づくり、環境の整備と申しましても、そこに住むみなさまのご理解とご協力が得られなければできるものではないことは痛感いたしたところでございます。

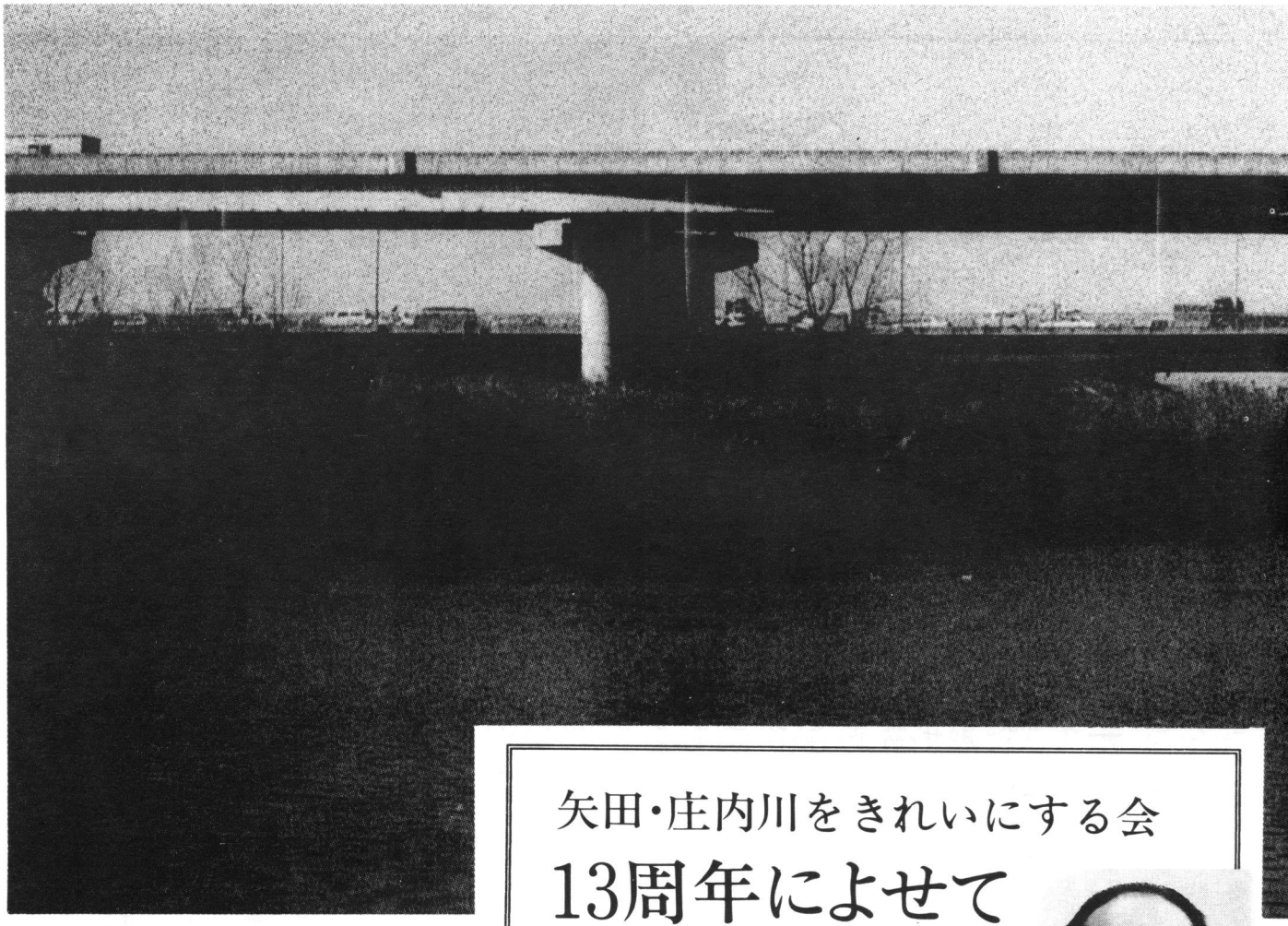
こうした中で、会のみなさまには、さらに一歩進んで自発的に「庄内川を汚すすべての汚染源をなくし、きれいで快適な生活環境をとりもどし、次代へ引き継ぐこと」を目的に、昭和四十九年、「会」を発足され河川の浄化にとりくんでこられたわけでございます。

「会」のみなさまのご活躍をここに数えあげればきりがないわけですが、十三周年を迎えられた今日では、庄内川はずいぶんきれいになり、昨年夏の魚釣り大会において、焼いた魚をほおばっている楽しそうな子どもたちの様子が大きく報道されていたことを印象深く記憶しております。

私は、こうした運動が、絶えず行政と一体となってすすめられてきたことに、大きな関心をもっていたわけでございます。

冒頭に述べましたとおり、行政施策は、これを受けとめられる住民のみなさまの、ご理解と積極的な参加・協力なくしてはできるものではありません。

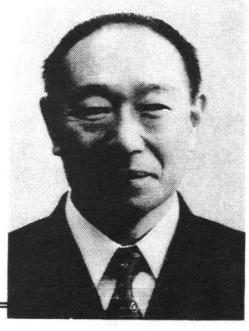
私は、「きれいにする会」のみなさまの実績こそ、まさに、市民参加の町づくりの模範であると理解しており、今後ますますのご活躍、ご発展を期待しまして私のお祝いの言葉といたします。



矢田・庄内川をきれいにする会

13周年によせて

名古屋女子大学　廣　正義



『川の汚れは心の汚れ』を合言葉に、白濁の庄内川を昔の清流によみがえらせ、次の世代へ引き継ごうと、丹羽秀義氏を会長に結成された「矢田・庄内川をきれいにする会」は、今年で十三周年を迎えられた。

高度経済成長の落とし子として生れた水質汚濁を防止するため、やむにやまれぬ市民・有志の情熱が、自然保護をめざしてこの会を誕生させた。会の構成メンバーは、老人から青年、子どもにわたる幅広い層からなっているのが特色であった。

発足以来、男女を問わず、日夜、県や市に、河川の浄化へ、また、汚濁の防止へと積極的にはたらきかけをおこない、たゆみない運動を続けてこられた。また、市民の庄内川への愛情と関心を高めるべく、時には、汚濁を放出する業者への抗議に、あるいは、魚類の保護作戦に積極的に活動を続けてこられた。

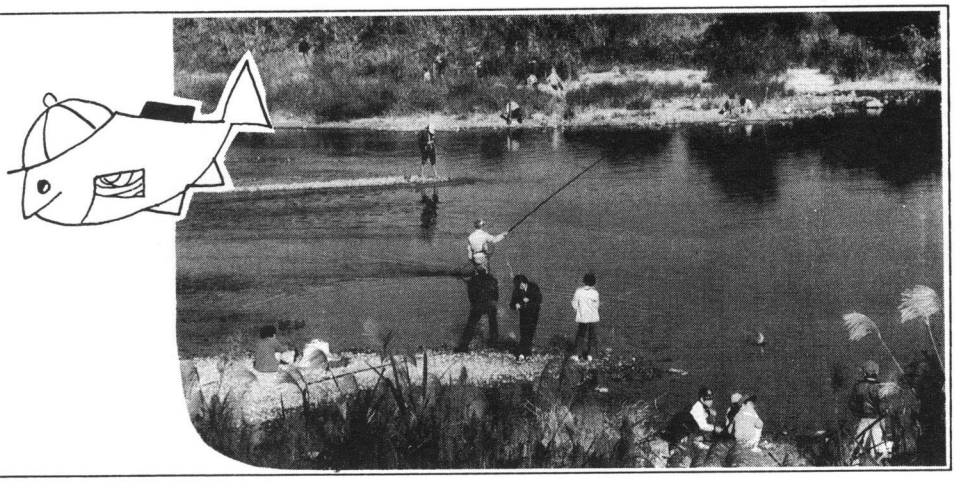
汚水にまみれ、異臭を放つ魚類を市民に理解させるべく、昭和五十年六月には第一回「食べられない魚釣り大会」を水分橋から新川中橋の間で行なわれた。これには三五〇人が参加し、大規模な釣り大会で、五〇～六〇センチにおよぶ大物も釣れたが、油臭さがあって食べられるものは一匹もなかった。

さらに、昭和五十一年に第二回、五十三年に第三回の「食べられない魚釣り大会」が行なわれ、市民の、水質汚濁に対する意識と関心が高まったようであった。

これらの努力が次々に実を結び、その後「食べられるかもしれない魚釣り大会」、さらに、最近では「食べられる魚釣り大会」までに発展した。これはひとえに、この会のみなさんの並々ならぬ努力の結晶であろう。県や市、建設省でも、この会の活躍を高く評価し、ともに手を携え、庄内川の浄化運動をすすめるようになったことは、まことに喜ばしいことである。

特に、一昨年から毎度実施されるようになった生物による水質判定では、この会の小・中・高校生は貴重な戦力となっている。

近い将来、庄内川は、きっと鮎の群れる美しく澄んだ水をたたえ、曇なき青空は市民の憩いの場となるであろうと期待するとともに、「矢田・庄内川をきれいにする会」のご努力と、ますますの発展をお祈りして、十三周年によせる言葉としたい。



魚の坊やと私

日本福祉大学教授　土方　康男

私たちの「会」のシンボルマーク、魚の坊やのバッジが一万二千個も出ているということを丹羽会長からおうかがいしました。ひとつのバッジが十三年間にもわたって作り続けられたことはきわめてめずらしいことだとバッジ屋さんが言っているということでした。その通りだと思います。

言うまでもないことですが、バッジのデザインのよしあしの問題がまったく関与していないとは言いませんが、何よりも、運動の正しさと、運動を支えた人たちの持続的継続的な努力の指標にほかなりません。会長さんが言います。水の色も澄んできたので、バッジの色も変えようかという意見も出ていると。

やったぞとニヤつけたら

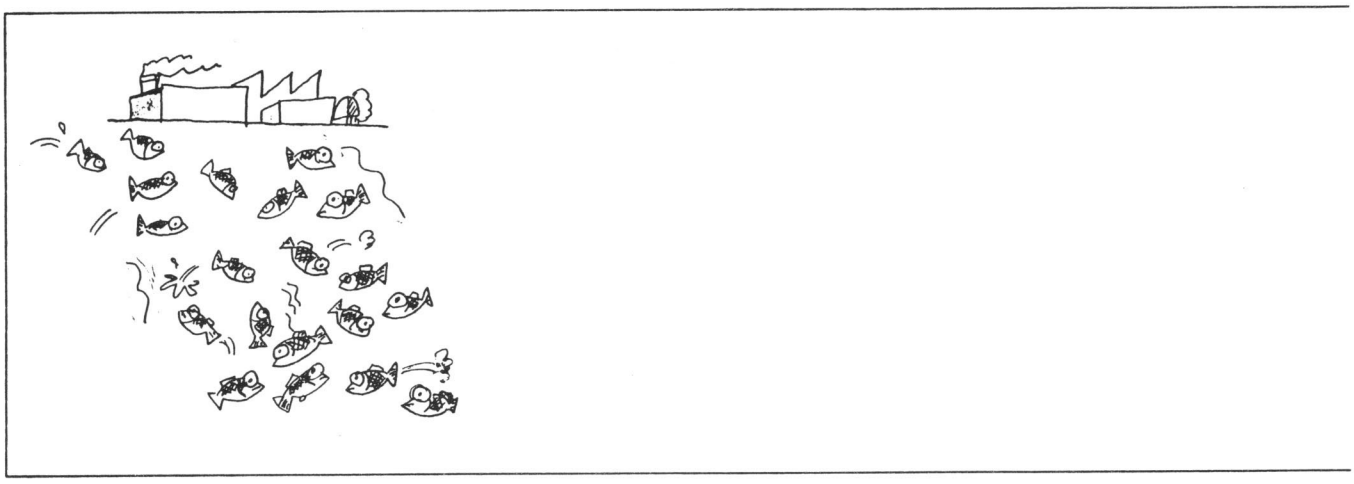
たゆみなく、ひとつにひねりあわせた結果の表われです。それにしても、いい結果を引きおこすには、大変な時間と労力がいるものだと思います。

こうした運動にデザインという面からお手伝いできたことに、言い知れぬうれしさと誇りを感じています。しかし本当を言うと、こういうことに、つまり本業の保育の研究以外の、いわば遊びに喜んでニヤつくよりは、自分の仕事そのもので実をあげてニヤつきたいという思いがないでもありません。いや、もっと本当のことを言うと、あれもこれも両方ともに、もっと心底からやったぞとニヤつけたらいちばんいいのになどと欲深いことを思ったりしています。絵を描くとか、物を作るとか、シンボルを考えて形にするとか、真実を探して、これを視覚的な形にあてはめる仕事と、本業の保育のいとなみから真実をさがして。これを言葉で整理する仕事の、ふたつとも自分のものにしたいということなのです。

本業はめしの種です。これが世のため人のために役立たなくなったら、いさぎよく活動を停止するほかはないと思っています。もうひとつの本業でない仕事の方は、まったくめしの種にはなっていませんが、私の場合、身近な範囲では、人々のためにいくぶんか役にはたったのだろうと自負しています。たぶん本業を停止したあとも、たとえ人々に役立たなくても活動を続けていくことでしょう。本業には苦しさがつきまといますが、本業でないのは楽しさがついて離れないからです。

伸びろ！魚の坊や

私たちのこの会のシンボルマークの



バッジのデザインをはじめ、主として保育にかかわるバッジを数種類、田中美智子さんの「きずく会」のシンボルマークのバッジも含めて、どれもみんな楽しい仕事でした。できてしまえば、もう私の手を離れてひとりだちしていきますが、知らない人のえりやむねに私のバッジが光っているのを見るのは、何ともうれしいものです。

でも、今はもう、バッジははやらなくなりました。今の人たちは、もっと強烈な自己主張の手段を身に着けているからだと思います。服装だとか髪型だとか、その両方に身のこなしも加えて、きわめて多様で個性的な自己表現が試みられています。せいぜいシールだとか、ステッカー、ワッペンです。大型でアピールが強力です。ちっぽけな、今ではめだたないバッジなど、その存在も名前も忘れられてしまったのではないでしょうか。

そんな時代でも、魚の坊やが続いているというのは、何ともゆかいでうれしい話です。きっと、庄内川や矢田川がきれいになっても、魚が住めるようになっても、このバッジは数を伸ばしていくでしょうし、伸ばし続けていかなくてはなりません。川はふるさとの条件の一つだからです。川をとりもつ私たちの経験はいつまでも心に残っているからです。

たべてみた 庄内川の魚

衆議院議員 田中 美智子

毒でも飲まされた感じ

もう十四年になるのだろうか。丹羽さんのお招きで、庄内川で「食べられない魚釣り大会」に参加したのがはじめてであった。もちろん私は、もっぱら魚を食べてみる担当で魚を釣るほうではない。

丹羽さんという方は、行動的な人であるだけでなく、なかなかのアイデアマンで、毎回「食べられるかもしれない魚釣り大会」「アユかえれ魚釣り大会」などなどといった釣大会の名称を考え出し、それがその時期にピッタリで、いつも感心させられた。そんなわけで記憶力の減退のはげしい私にとっては、いつがどんな名称だったか、はじめの方は記憶がさだかではない。

釣ったばかりの魚を串にさして、川端の土手でたき火で焼くのである。いい匂いがして、魚の好きな私は「わあ、おいしそう」の歓声をあげて、フーフーと熱い焼魚を喜んでほおばったのが昨日のことのように思い出される。味は結構であった。

そこまではよかったのだが、ほんのしばらくして、食道の方から油くさい、ドブくさいにおいがフーと出てくるのである。なんとも、だまされて毒でも飲まされた感じである。もちろんみんなから「食べられないよ、臭いよ」とさんざん注意を受けたのに、「いや、小さいとはいえ立派な魚。食べられる、食べられる」と、みずから試食をかって出たのだから、いまさら、毒を飲まされたなどと言えた義理はないはずである。

ところが、ドブくさい油くさい臭いはいつまでたっても消えず、夕方になって、おなかがすいて、もう胃には何も残っているはずがないのに、くさい臭いだけはフーッと食道の奥から

出てきて、気味の悪いこと。胃のふちに汚れた油だけがペッタリくっついて腸の方に行かないのではないかと思われた。

大きな教育であった

あのうす気味悪いにおいは、今でもしっかり覚えている。あの時の臭いが、川の汚れを強烈に体に感じさせてもらったと思うのである。それから毎年、お声がかかると何をおいてもとんで行った。

魚がおいしく食べられるようになったのは何年目ごろだったろうか。

そのうちに鮎の稚魚を放流したり、丹羽さんや宮田さんなどを中心に集まった「矢田・庄内川をきれいにする会」の人たちは、次々とおもしろいアイデアイベントをした。みんなで手作りの船で川下りをしたことも思い出される。小舟の中でずぶぬれになりながら、あちこちでエンコしている船に声をかけあいながら目的地まで競いあった。あの日も忘れられない思い出である。

特に、魚釣に参加する子どもたちの生き生きとした目は忘れられない。「川をきれいにしよう」という気持ちは、あの子どもたちの胸の中には一生うえつけられたのではなかろうか。大きな教育であったと。この運動が未来にまで引き続く実感がわいてうれしかった。

私も——

川は毎年少しずつきれいになっていった。この住民運動こそ政治家は学ばなくてはならないはずである。行政がしっかりこの事実をうけとめて、国や自治体が引き継いで、根本的に美しい川づくりの対策を立てねばならないと思う。

この運動の中で、宮田さんなど若い人がたくさん育っている。ますますの発展を願うとともに、私もしっかりと共にやっていきたい。

さらに息の長い活動を

名古屋大学教授・
住民に親しまれる名古屋港を
考える会 会長
中田 実

「矢田・庄内川をきれいにする会」の、川を汚す者への告発と環境整備の要求、および市民みずからの自己教育活動としての十三年は、まさにわが国の、この十年の歴史の忠実な反映と言えるものであったと言えよう。それだけに、これからの十年の活動の方向を見定めることは、わが国の今後の展開を見通すことも含めて、必ずしも容易であるとは言えないであろう。

この困難は、言いかえれば、これまでの運動の蓄積をいかに定着させ、さらにどんな困難においても、これを前進させうる主体的力量をいかにつくりだしていくのかの困難であるとも言える。

人間と社会にとっての自然保護の意味の重大さはいまさら言うまでもなかろう。そして、現代の特徴は、生活のしくみが自然と両立しがたくなっているところにある。そうだとすれば、自然保護の努力はわれわれの生活のしくみの日常的で自覚的な反省と結びつかなくてはならないのである。このことがいかに強い精神力を必要とするかは、想像にむずかしくない。自然とか環境とか、住民すべてにかかわる事柄について、この精神力を維持することは、住民どうしの連帯と信頼がなければできるものではない。困難な課題を前に組織を拡大・強化することが、これからの活動に求められるだろう。

このようなとりくみは、一朝一夕にできるものではない。それこそ長年のねばり強い活動が必要であろう。特に、今後期待される活動のタイプを考えるままにあげてみると、ひとつには、より日常的な地域共同管理組織が、この課題を担えるようにしていくことであり、ふたつには、より専門的なグループをつくり、より広い層への問題提起ができる研究的な活動を組織していくことであろうか。しかし、いずれの場合でも、この活動を担う中心的な組織は不可欠であり、現在の会の重要な意味は変わらないであろう。川や港、海について学校でもちゃんと教育し、マスコミでも力を入れてとりあげるようにすることが大切であろうが、こうした運動も関係のある諸団体と協力してとりくんでいきたい。

われわれの『住民に親しまれる名古屋港を考える会』も、貴会には大変大きく支えられ、励まされてきた。両者の目的は一致するところが多い。今後も力をあわせてがんばっていきたいと思う。

ご健闘をお祈りするしだいである。

稚鮎放流130キログラム

土岐川漁業協同組合
土屋 保一

「矢田、庄内川をきれいにする会」の十三年誌に載せていただくことになりましたことは、河川浄化運動の一環としてまことに喜ばしいしだいで、丹羽前会長をはじめ、関係者一同に敬意を評するものであります。

ちなみに、私の所属する土岐川（支流も含む）は、庄内川の支流に位置し、延々五十数キロにおよんでおり、貴会および庄内川漁業組合と密接なる連携をとり、あい携えて河川浄化運動を続けなければならない立場に置かれています。

その関係上、昭和二十三年、組合創立当時は、組合員二八〇名、稚鮎放流三〇〇キログラムでありましたが、十数年前頃より河川浄化の声が起こり、昭和四十五年より年々増加し、本年現在で組合員二八〇〇名、稚鮎の放流一三〇〇キログラムまで放流可能とすることができました。しかし、陶土作成によるSSは減少しましたが、まだまだ十分とは言えません。今後、おたがいに協調して浄化美化運動を続けなければならない状況にあります。

川の中の懲りない面々

東京新聞＝中日新聞東京本社 社会部
飯室 勝彦

スクラップブックに貼った一枚の切りぬき。『清流作戦にドロ』『矢田川　無残　看板壊される』の見出しに、穴のあいた『川の汚れは心の汚れ』という看板の写真が添えられている。数えきれないほどの記事を書いてきたが、もっとも愛着を感じるうちの一枚である。

壊されたのを見つけたのは、写真の中で看板の脇に立っている当時小学一年のわが長男。上飯田第二公団住宅に住んでいたから、矢田川の川原が遊び場だった。オヤジが書き続けている浄化運動の大切さが、子どもなりにわかりはじめたのか、その日、飛び出してまもなく「看板に穴があいてるよ」と知らせにもどってきた。

すぐ写真を撮り、『矢田・庄内川をきれいにする会』に連絡して記事を書いたが、単なる報道記者の立場を離れ、意識としても運動体の中にはいりこんでいる自分を感じていた。

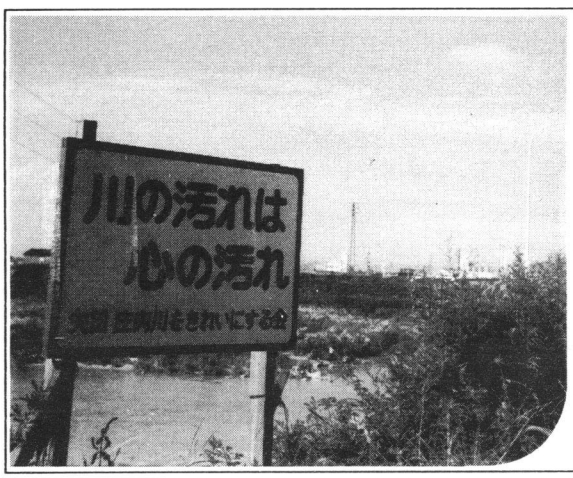
新聞記者は記事の客観性を担保（たんぽ）として不偏不党を要求される。それだけに、組織、運動の中にはいっていくことに臆病になる。その過度な警戒心を解かせてくれたのは、会の人たちのまじめな〈遊び心〉だった。

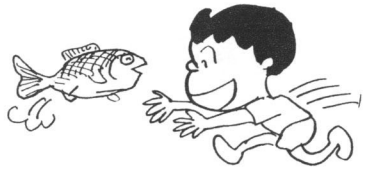
まず『川の汚れは心の汚れ』という標語が気にいった。普通なら「川を汚すな」とか「川をきれいに」など、マナジリ決してという感じになりがちなのに、余裕がある。何よりも、他人を責めるよりも自分たちの問題としてとらえようという謙虚な姿勢がよく表現されている。

アイデアの巧みさに最初に脱帽したのは、初の本格的行事といえる『食えない魚釣り大会』だった。汚れた魚にそっぽを向いた市民を魚釣り大会というエサで水辺へおびき出して、『食えない』と冠することによって浄化を訴える……あのころまだその言葉ははやっていなかったが、見事なブラックジョークになっていた。計画とネーミングを聞いた時、「このオジサンたち（正直言ってメンバーはおじさんと呼ぶのがぴったりの人たちでした）のどこにこんなしゃれたセンスが…」と首をひねったもんだ。

『食えぬ魚の釣りブーム　庄内川』『バッジ作戦大当たり　二週間に四〇〇個さばく　運動支援の手紙が殺到』スクラップブックに貼りつけた数々の矢田・庄内川に関する私の記事は『水鳥が上がってきた　水分橋、三階橋まで』という記事で終っている。日付は一九七六年二月一日。カモやユリカモメがかなり上流で遊ぶようになっ

『食えぬ魚』の釣りブーム　庄内川
流れに親しもう
きれいにする会の呼びかけが実る
バッジ作戦大当たり
矢田・庄内川をきれいにする会
2週間に400個さばく
運動支援の手紙が殺到
春には『大行進』も計画





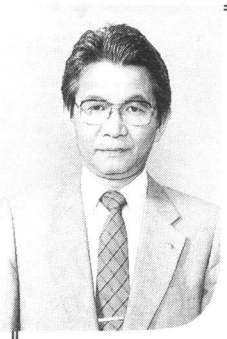
てきたのは、川が少しずつでもきれいになっているからではないかという内容だ。

まもなくロッキード疑獄の発覚とともに私は東京へ転勤。名古屋を訪れることもめったになくなったが、「きれいにする会」の人たちとの友情は続いている。おりにふれて送ってくれるビラや通信文が届くたび、「こりずにやってるね」と、なつかしいかつての面々、そして新しい面々に心の中で呼びかけながら読ませてもらっている。

十三年と聞いて、思わずわが長男の部屋をのぞいた。あの日、看板の穴を知らせた小一の〈坊や〉は大学一年。私よりたくましい体つきになった。机のわきには使わなくなった釣り道具の束が。名古屋で覚えた川の楽しさを、東京でも味わおうとこづかいでせっせと買いこみはしたものの、ドブと化した近くの川では無理。釣りをするには、電車に乗って遠くへわざわざ出かけなければならず、長くは続かなかった。

たとえ「食えない」魚でも、家の近くで釣ることができ、さらにその魚を「食える」ようにしようと息の長い活動を続ける人たちがいる名古屋の子どもは幸せだと、つくづく思う。

より快適な環境の街——名古屋の創造をめざして



名古屋市公害対策局長
大山 邦雄

創立以来十三年を迎えられました「矢田・庄内川をきれいにする会」の会員のみなさま、そして、この会をこれまで支えてこられました数多くの関係者のみなさま、まずもってお祝い申し上げます。

そして、みなさまの永年にわたります実践活動と、その輝かしい運動の成果に対し、心から敬意を表しますとともに、今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

さて、一時期の危機的な状況にありました名古屋市の公害の問題も、さいわい多くの関係者のご努力によりかなり改善されてまいりました。

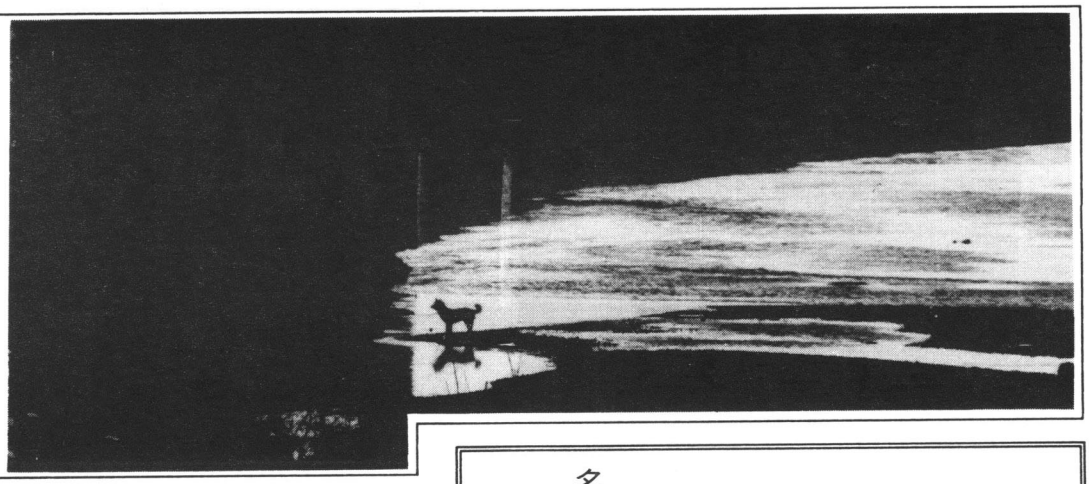
しかし、市内河川をはじめ、閉鎖性水域である池沼、海域などの水質の汚濁や自動車、鉄道などによる交通公害の問題など、まだまだ未解決で苦難な問題を残しております。

また、近年特に問題が顕著化しつつあります未規制有害化学物質による環境汚染の問題や、近隣騒音、生活雑排水による水質汚濁の問題など、気付かないうちにわたしたち市民ひとりひとりも加害者の側に立たされるような事態の問題も提起されております。

このような時にあたり、十三年の歴史をもつ「矢田・庄内川をきれいにする会」のみなさまの活動はますます重要な役割を持っておられます。

丹羽前会長が提唱された『川の汚れは心の汚れ』の合言葉は、単に河川の汚濁の問題にとどまらず、これからの環境問題に私たちがとりくむ場合のキーワードとなり、重要な意味をもっていると思います。

どうか、みなさまの会が、これまでの輝かしい成果とその体験を生かされ、よりいっそう発展され、より快適な環境の街名古屋の創造のためにご活躍いただきますようお願い申し上げます。



矢田・庄内川をきれいにする会

十三周年の歩みの出版にあたって

名古屋市職員労働組合 委員長
山岸 光夫

「矢田・庄内川をきれいにする会」十三周年の歩みおめでとうございます。

私は少年のころ矢田町上飯田町に在住し、矢田川・庄内川に親しんで成長した一人として「会」の運動に深く関心と支持をもっている者です。

高度成長政策のもとで大切な自然が破壊され、海や川が汚染され失われてきました。それとともに四日市公害、水俣病をはじめとする公害が生れ、国民のいのちと暮しが破壊されていきました。

高度成長政策で得たものは自動車、テレビ、洗たく機などであり、それは〈人間らしさ〉人間の心を本当に豊かにしているのかと問わざるをえません。

「会」は、高度成長政策のもとで日本の自然が失われ、海や川が汚染されていくという事態に多くの人が疑問をもたなかった心に、警告と告発をするすばらしい運動であると思います。

こうした運動はボランティアであり、様々な困難に直面したことと想像にむつかしくありません。

今日まで、丹羽さんをはじめとする「会」を支えてきたみなさんに、心から敬意を表します。

今後、「会」がますます発展されることを心から願い、お祝いの言葉とします。

私と——矢田・庄内川をきれいにする会の人々との出会い

住民に親しまれる名古屋港を考える会事務局長
大石 正司

はじめに、十三周年を記念し、「矢田・庄内川をきれいにする会」の十三年の歩みを発行されることにあたりまして心からお祝い申し上げます。

出会い・その背景

私がはじめて「矢田・庄内川をきれいにする会」の名前を耳にしたのは、一九七九年（昭和五十四年）今から九年前でした。

私は当時、名古屋港管理組合職員組合の中央執行委員をしていました。

一、国民春闘

一九七一年から総評も私たちの上部団体の自治労も、住民と共にたたか

う国民春闘路線が提唱しましたが、本当の意味を理解し実践にうつされるのは、全国の組織もだいぶ遅れて、年月がかかりました。

私たちの職員労働組合・港職労は大変まじめな労働組合ですが……。

国民春闘と急に言われて、今まで自分たち組織のことだけを考えて闘争してきたのを「国民とともに・住民といっしょに春闘をたたかう」「住民の要求をともにかかげてたたかう！」と言われても、その経験がまったくなかったので、どうしたらいいのか、わからなかったのです。

でも、まじめに執行委員会で何度も討議をくりかえして進めました。

私たち公務員の春闘の賃上げの人事院勧告

七〇年　一二・六七％
七一年　一〇・三六％
七二年　一〇・六八％
七三年　一五・三九％
七四年　二九・六四％
（オイルショック、物価高騰）
七五年　一〇・八五％
七六年　六・九四％
七七年　六・九二％
七八年　三・三七％
七九年　三・三七％
八〇年　四・六一％
八一年　五・二三％
八二年　四・五八％
八三年　四・四四％
八四年　三・一二％
八五年　五・七四％
八六年　二・三一％

一九七五年を境にして春闘連敗。労働組合運動の苦しい時代に入っていきました。

二、革新名古屋市長選挙と私

また、名古屋市政も一九七三年（昭和四十八年）四月二十二日革新本山政雄市長を当選させました。この時、私は港職労の選挙対策局の事務局次長を担当してがんばりました。

そして、この勝利を大変喜んだことを今のように想いだします。

だけど、この市長選挙は市長が自・社・公・民にとりこまれ、おかしなことになり、とても残念に思いました。そして一九八五年（昭和六十年）本山革新市政は終りました。

この頃、やはり全国の革新自治体もことごとく、つぶれていきました。

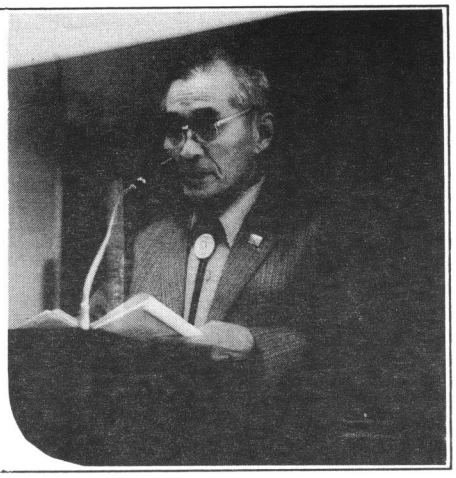
とにかく外へ打って出る

そして一九七二年（昭和四十七年）私たちはとにかく地域へ出て、住民のみなさんと接しようと、街頭や団地・住宅へと入っていきました。

しかしこの頃は「たとえば」市長選挙のためとか、春闘の住民宣伝とかの自分たちの利益か目的がある時だけ地域に出かけていき、それが終わるとふたたび組織内にこもってしまって、本当の運動の意味を理解しておらず、私たちは充分に運動した気持ちで自己満足していました。

しかしそのツケは、一九七五年（昭和五十年）を境にして財界にしてやられる春闘連敗へと結びついていきました。

反省としてふりかえると、本当の住民運動を経験していない弱点から、『井の中のかわず大海を知らず』で、言葉では「住民本位の革新市政」とか「住民の幸せがなくして自治労働者の幸せがない」などのスローガンは頭では理解していたが、表面的なとりくみ



「名古屋港を考える会」結成総会であいさつする丹羽名誉会長

に終わり、その後の自治体労働者の攻撃・ニセ行革攻撃をゆるすことになり、とてもはずかしく思うとともに、もっと早く気がついていたらと思います。

「住民に親しまれる名古屋港を考える会」の結成の経過と「矢田・庄内川をきれいにする会」との出合い

一九七七年（昭和五十二年）、港職労は地域活動として、港区と堀川筋をのさばって三の丸までの地域で『名古屋港と港湾行政』の住民アンケートを足で歩いて実施しました。

その結果はさんざんのものでした。たくさんの住民のみなさんから――海を鉄とコンクリートで埋立て、住民から自然をとりあげたのはあなたたち。また、労働組合は信用できない。だって自分たちの用事のある時だけ姿を現わし、住民の要求を聞いていくが、あなたたちの目的が達せられると、もう来ない、解答もなし、など――冷めた目で正確に見られていた！

この実態に私たちは「考えさせられました」「肝が冷えました」。でも遅まきながら住民のみなさんと膝を交えて、耳の痛い、本当の心を聞かせてもらえてよかったと思います。

この体験を「もと」に、私たちの港職労は自治労名古屋ブロック協議会の方々にも協力していただき、約二年間の論議を重ね「本当の住民運動をしよう！」「息の長い、名古屋港を住民の手にとりもどす草の根運動を住民のみなさんとともにやろう」と決心をし、一九七九年（昭和五十四年）十月二十一日『住民に親しまれる名古屋港を考える会』結成総会をもち、「会」を発足させました。

しかし、私は頭が悪く、住民共闘の意味をまだよく理解しておらず「名古屋港を考える会」の運動には批判的で、むだな労力とお金を使って何の意味もないと反対していました。

しかし、第三期本山市長選挙で、一九八〇年（昭和五十五年）自治労センターに派遣され、地域の団体回りをして「考える会」の活動が多くの方々に理解・評価され賛同を得ていることを体験して、はじめて大切な運動であることを自分自身理解しました。

その後港職労に帰ってからは、「『会』運動は大切にして一生懸命やらないかん、この運動を通じて住民の信頼を回復せないかん」と力説する者に私の「考え方」が一八〇度転換してしまい、みんなに笑われたものです。その後は現在にいたるまで事務体制に関わってきました。

丹羽秀義さんとの出会い

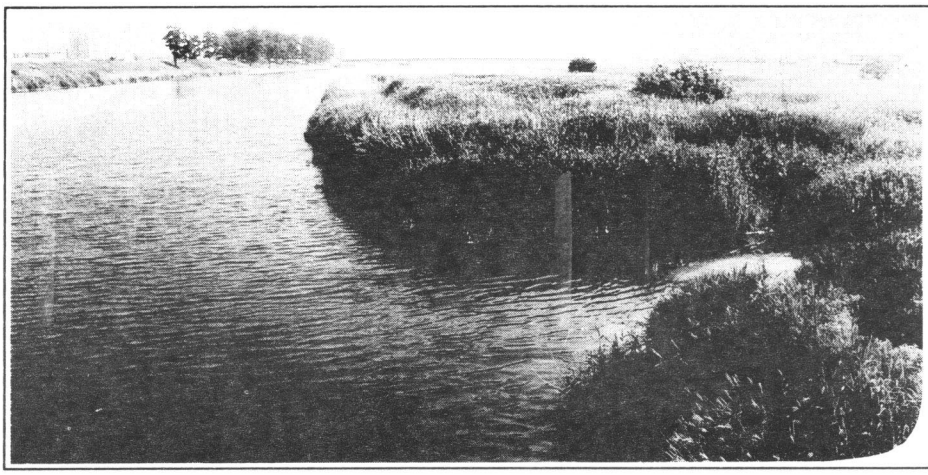
私が丹羽秀義さんをはじめて「拝見」し、発言されるのを聞いたのは、一九七九年（昭和五十四年）十月二十一日『住民に親しまれる名古屋港を考える会』結成総会の席でした。

その時の印象は、元気のいい「おじさん」で、その発言の姿は自信に満ちていて気どりがなく、内容はわかりやすく、とてもユニークな発想で物事を考えられる方だな……と。

あわせて耳の痛い事もはっきりとおっしゃるな……。

そして、快くお引き受けいただいて「会」の副会長に就任されたことをまずはじめに回想します。

そして一九八〇年（昭和五十五年）の港職労・春闘学習会で講師を誰にしようかと執行委員会で話し合われ、いろいろ案は出たのですが、最終的に住民運動の話を聞こう、私たちを見たま



までアドバイスをしてもらおうと『丹羽秀義氏』に決まり、講師をお願いに行き、快くお引き受けいただき、二月十一日愛知県研修センターで港職労の組合員五〇名が『まさに青天の霹靂』、今までに私たちが体験したことのない、言いたい放題のスピーチを約二時間聞かせていただきました。

その内容は、ヨイショは一切なし。

私たち自治労働者の弱点――①形式主義、役人的　②組織エゴ＝住民のことはほったらかしで労組と組合員だけのことしか考えていない　③無責任＝要求だけは聞いていくがその解答は後日返ってこない　④発想が小さい　⑤地に着いた運動をしていない＝スケジュール闘争だけに固持、時期がきたらやりっぱなして終了　⑥革新政党もなっていない、しっかりしろ！

などなど、「こんなことで住民についてこいと言われても、とてもじゃないがついて行けない」「公務員を自治労を信用しろといっても無理」。

もっと「考えて」運動をしてほしいと言われ、最後に少しだけ革新市政を誕生させた名古屋市職労と自治労名古屋ブロックのまじめなとりくみには敬意を表するとのお言葉でヨイショしてくださって丹羽独演会をしめくくられました。

私はびっくりしました。組合員もびっくりしました！

しかし、「考えてみたら」まったくその通りで、「お見通し」に恐ろしく思うとともに、意気のいい話を聞かせてもらったな……。

これをどう生かしていったらよいのだろうかと考えさせられました。

そして帰りに玄関までお送りして、少し会話を交わしました。これが私と丹羽秀義さんとのはじめての『ふれ合い』でした。

すばらしい仲間との出会い

それから私は一九八一年（昭和五十六年）から「名古屋港を考える会」の事務局員になり、矢田・庄内川の運動、アユかえれ矢田・庄内川の釣り大会などに「考える会」を代表して毎年参加させていただき、その他の主な行動にも参加させていただきました。

そしてすばらしい人々と出合いました。

まじめで、やさしく、勉強家の宮田照由ご夫妻、合成洗剤と川の汚れの関係に心を砕かれた故小川博さん、口は悪いけど心のやさしい近藤弘二さん、頭が良く、一生懸命努力されている三宅隆夫さん……。その他多くの人々と友だちになることができました。みな心やさしい人々の集まりです。

「矢田・庄内川をきれいにする会」本当にありがとう。

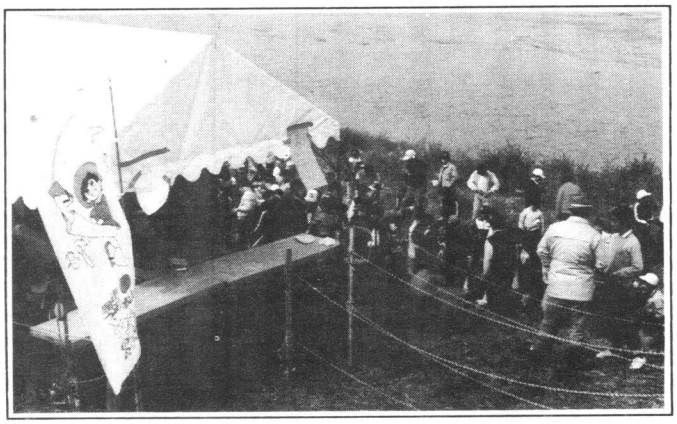
『矢田・庄内川』の運動を見つめて

私は矢田・庄内川をきれいにする会の方々および運動に接して、感じたこと、学ばせていただいたことにふれてみたいと思います。

まず第一にみなさん私利・私欲がなく、矢田・庄内川の自然環境をとりもどすことのみに専念をし、その目的で集まった人々、思想・信条を乗り越えた人々が手弁当で多数集まって、むつかしい理屈はぬきで、しかも『次代』をになう子どもたちを主人公にたくさん集め、みんなで行事を通じて直接自然の川に接し、手で目で足で肌で感じとらせて運動を進めている。そして運動の輪を広げて前進されている。

何とすばらしいことか！

第二に運動（行事）を実施するにあたっては、やれる人が積極的に集まり、全体でよく話し合われ、それぞれがやれるセクションを担当して全員で運営をしていく。ひとりだけに無理をさせない。



第三に運動を実施するにあたり、お金を非常に大切にし、手作りの運動をする。たとえば、予算を立てるにあたり、必要な物はみんなで手分けをし、賞品、必要な品物、現金などを無償リース、または寄付で集める。

お金を大切にし、財政的に会員に無理をかけず、しかも会員のみなさんが役員さんのご苦労を、動いた会員のご苦労を理解・感謝されて、息の長い運動にますます発展させていると思います。

このことは「会」の誠実な運営態度が貴団体および私どもの他団体も含めて、いろいろなことを、その時々たのまれれば、依頼された方々は喜んで協力する行為につながっていると思います。

第四に、丹羽さん、宮田さんをはじめ、みなさんがそれぞれの分野で大変に勉強されておられる。

そして、いろいろな住民運動の団体と連帯をされていて、その知識・行動力を「アゴタ・言うだけでなく」実行力もともなって他団体を助け、生かされ、私たちの信頼を得ておられる。

「考える会」も本当によく助けていただきました。だから「きれいにする会」が運動すると決められたら、われわれも協力に走り回るのです。

第五に政治活動はしないと「会」の方はおっしゃるが、どうして、どうして、なかなか……。

本山革新市政の時は、釣りキチ三平の『あの旗』と「会」のみなさんを「名古屋市公会堂」の段上で、久屋公園等々でいろいろお見かけし、心強く、たのもしく思ったものです。

正しい事、正しいものはつらぬく信念と、正しい政策のみが「住民の生活環境を守ってくれるという視野。これは、やはり本当の草の根運動を実践してこられた「きれいにする会」の運動を通じて身体で得られた体験に基づいた行動だと思います。

その造詣の深さには敬意を表します。

第六に、実にうまくマスコミ（テレビ・新聞など）を活用され、広く市民にアピール、PRをされる。これは運動の長年にわたるユニークな組み立て方と誠実な運動の進め方にマスコミが評価をされてとりあげるのでしょうが、うまいな……と感心し、多くを学ばせていただきました。

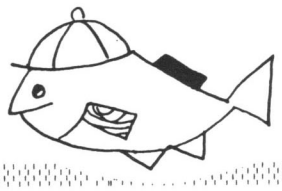
運動の成果が五倍にも十倍にもなり、会員も楽しく力を入れてとりくむことができると思います。

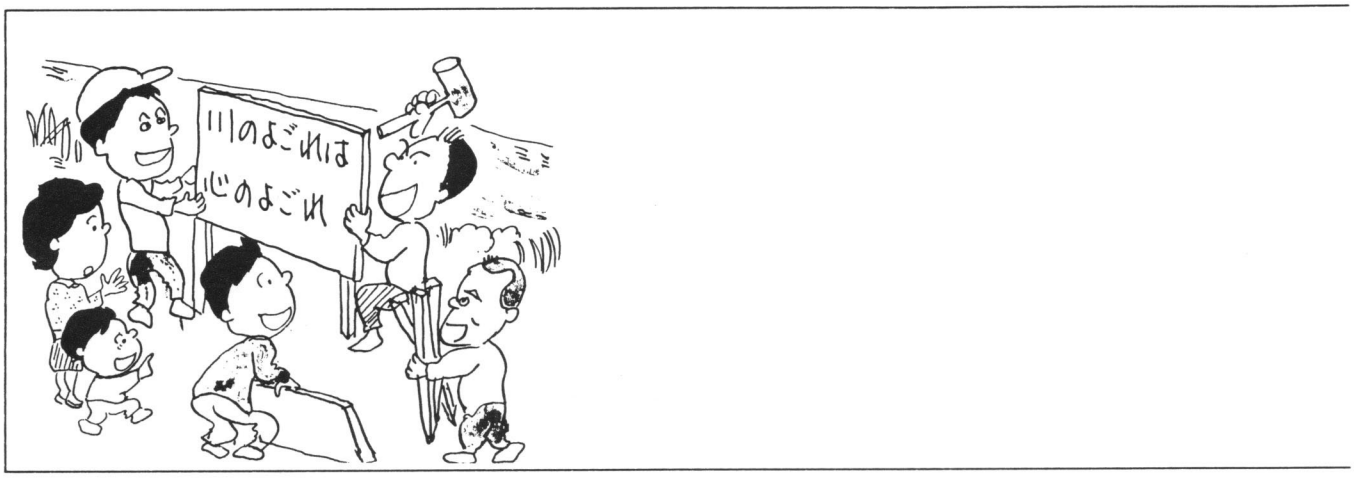
まだまだ書きたいこと、言いたいことがたくさんありますが、紙面の関係もありましょうから結論に入ります。

矢田・庄内川は、八年前とくらべてとてもきれいになり、運動の成果は着実に現われ進んでいます。「矢田・庄内川をきれいにする会」の川と「住民に親しまれる名古屋港を考える会」の海とは切っても切れない関係です。これからもなかよく手をたずさえて、ご協力をお願いします。

私も個人的には、貴重な出合いと体験をさせていただきました。どうもありがとうございました。

最後に、これからも末永くおつき合いのほどをお願い申しあげて、「矢田・庄内川をきれいにする会」のますますのご発展をお祈りします。





庄内川、河川環境に思う――

とりもどそう、清流とふれあいのある庄内川

建設省庄内川工事事務所
藤本 保

近年、河川の水辺の回復であるとか、うるおいとふれあいのある水辺環境の形成ということが叫ばれております。これは、とりもなおさず、河川の環境というものが人間の文化を育む機能を有していることが再確認してきたからであり、それゆえに地域の発展にも重要であるし、また、近年成長著しい情報産業などの精神労働にも極めて重要な意味を有しているからではないかと思っています。

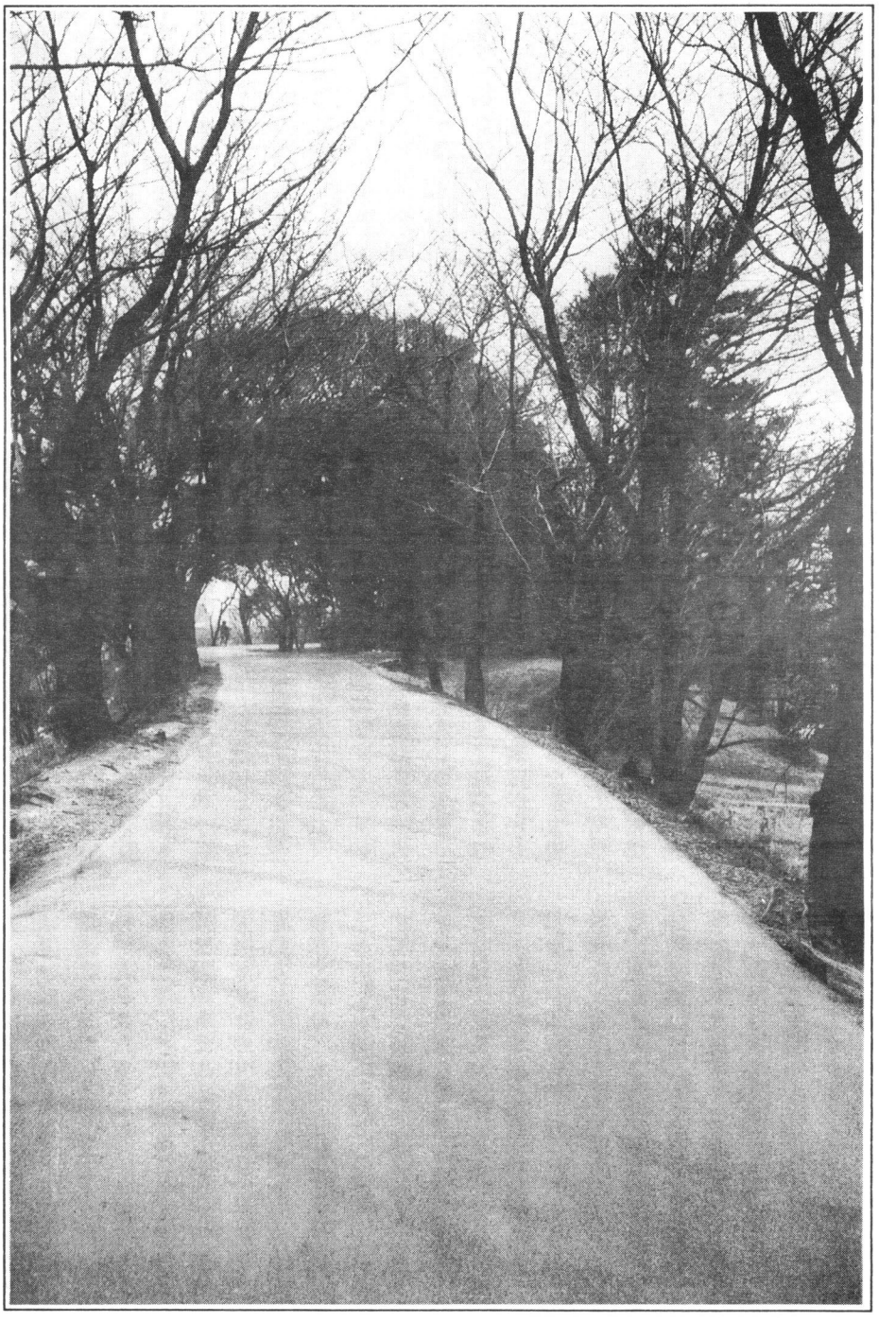
水の流れ――とうとうとした流れ、あるいは清らかなせせらぎ――こういうものを見ているだけで精神の安らぎを覚えるものでありますし、また、瞑想にふける雰囲気を持っているものであります。

このような河川環境を構成する大きな要素としては水と景観があろうかと思います。

庄内川の水質は、昭和四十年代前半の経済の急成長にともない、工場、家庭から排水される白濁水、汚水、生活雑排水の量が増加し、悪化しましたが、その後、排水処理や汚水処理対策による水質改善の努力が行われ、当時とくらべると格段によくなっているといえるものの、まだまだあるべき姿にはほど遠いものではないかと思っております。しかしながら、水質をよくするには時間と費用が非常にかかりますので、今後とも流域のみなさまのご協力のもとにわれわれも努力していきたいと思っております。水質改善の基本は何といっても川に入る前にきれいにすることであり、したがって、水質汚濁防止法による排水規制と下水道整備が肝要であるとは思いますが、それらを補充するという意味で、河川がもともと有している浄化機能を利用、あるいは強化することによって、たとえば、礫間浄化であるとか、バイオシェルフであるとか、エアレーション等々による河川内浄化を図っていくことも重要であるし、また、ぜひとも実施し清流をとりもどしたいと思っております。

一方、河川環境のうち、水質とならぶ景観についても庄内川は問題があります。庄内川の高水敷の七〇％は民地であり、公共スペースがほとんどないため、よりよい河川利用をめざす河川管理計画をせっかく策定しても、絵に描いた餅になりかねない状況となっております。私どもとしても、積極的に用地買収をしていきたいとは思っておりますが、都市河川の中で比較的遅れていると言われている治水整備の方が急務であり、なかなか事業用地以外のところにはまわらないため、現在は市町村による用地買収に頼って進めているのが実情であり、今後とも期待しているところであります。

また、景観を損ねているもう一つの要素として、ごみ投棄があげられます。私どもの事務所が管理をはじめた頃とくらべて少なくなってきたとはいえ、昨年も私どもの事務所で、二〇〇立方メートルもの量を処理しており、実際の投棄量は、他機関やボランティアで清掃していることを考えますと、もっともっと多いものと思われ、市民



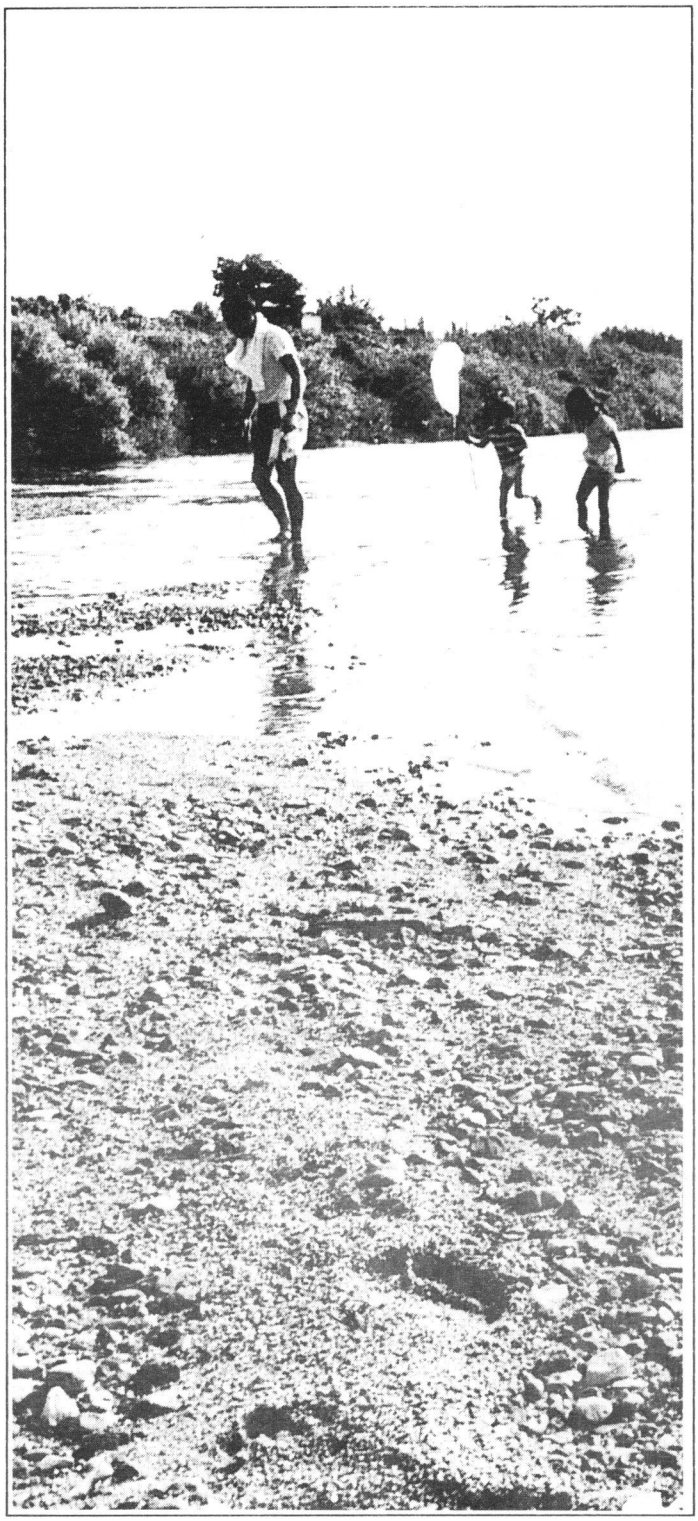
のみなさまがたの道徳心に期待するところが大であります。

さらに、これは庄内川に限ったことではありませんが、河川の構造物、つまり護岸、橋梁などなどはややもすると機能と経済性を追及するあまり、美しい環境を作る一部分であるとの配慮に欠けていたきらいがあります。河川の機能としては、もちろん治水がもっとも重要であることは言うまでもございませんが、近年特に環境というものもまた極めて重要視されてまいりました。

そしてこれは、それぞれ別々にやるものではなく、治水のための河川改修の中に、よい環境づくりを取り入れていかねばならないと思っております。

こんな思いから、庄内川では、殺風景な護岸に何か工夫できないかと考えており、十年ほど前から岐阜県多治見市では水とまりもと魚などをデザインしたタイル護岸を、そして昨年は西枇杷島町において、ある新聞から「堤防美術館」というすばらしい名称をいただいた、西枇杷島町枇の誇る山車をデザインした玉石張りの護岸などを施工してきました。今後とも機会と予算があれば、護岸だけでなくいろいろ試みていきたいと思っております。

その他、河川環境という観点から



は、たとえば、極めて多い専用道路をせめて日曜日ぐらいは歩行者天国にするとか、高い堤防のうっとおしさをなくすために丘のようなスーパー堤防化を図っていくなど、いろいろありますが、いずれにしても、よりよい河川環境を有する庄内川をめざして努力していきたいと思っております。あわせて、この会の活発な活動に期待しているところでございます。

最後に、流域の代表市長が集まって開催した庄内川サミットにおいて採択された「庄内川宣言」を引用し、結びといたします。

一、めざそう、洪水に強い庄内川
一、とりもどそう、清流とふれあいのある庄内川
一、築こう、地域に貢献する庄内川

かけがえのない森林

全林野名古屋地本　中野　英次

最近、水不足が問題になっています。

このところの異常気象で雨や雪が少ない、台風も上陸しないなどの理由がありますが、川の水の源・森林の荒廃もその大きな原因なのです。

日本のように山がけわしく海までの距離が短いところでは、雨の大部分はいっきに海へ流れていってしまいます。

でも、豊かな森林があれば、その半分近くを樹や葉や、土にしみこませての地下水として、ちょうどダムのように蓄えます。その上、ろ過された水は美味で平均して流れます。

森林の保水量は約四四〇億トン。東京の水ガメ、小河内ダム一千個に相当するとも言われているのです。

■■■

木を伐って売ったお金で、苗木を育てたり、植林したり、山に道をつけたり、山崩れを防止したりしています。

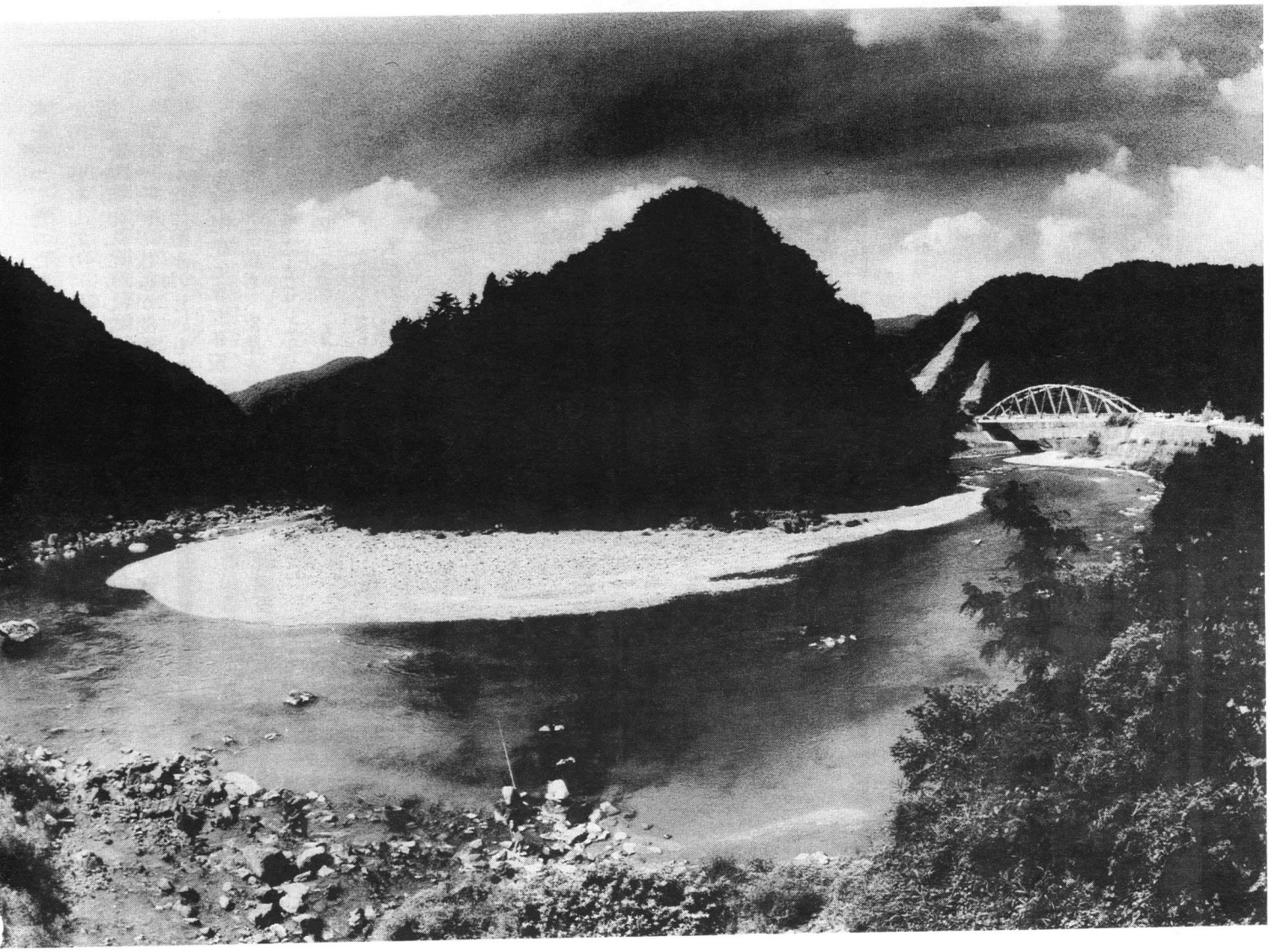
知床や白神の伐採が問題になったのも、そんな仕組みのせいもあるのです。

しかし慢性的な木材不況のため、特別会計は赤字続き、累積赤字一兆五千億円ということで、収入の半分が借金。支出の三分の一が借金返済の「サラ金会計」になっています。

森林には、木材の価値以外に、水資源、大気浄化、治山、鳥獣保護、保険休養などの効用がありますが、それは計算に入っていません。まして国土百年の基としての価値にはまったく目をむけていません。

■■■

山本 光春　「矢田・庄内川点描」



「大回転」――土岐川下流　愛岐道路沿い

下津渡、付近

枇杷島橋付近

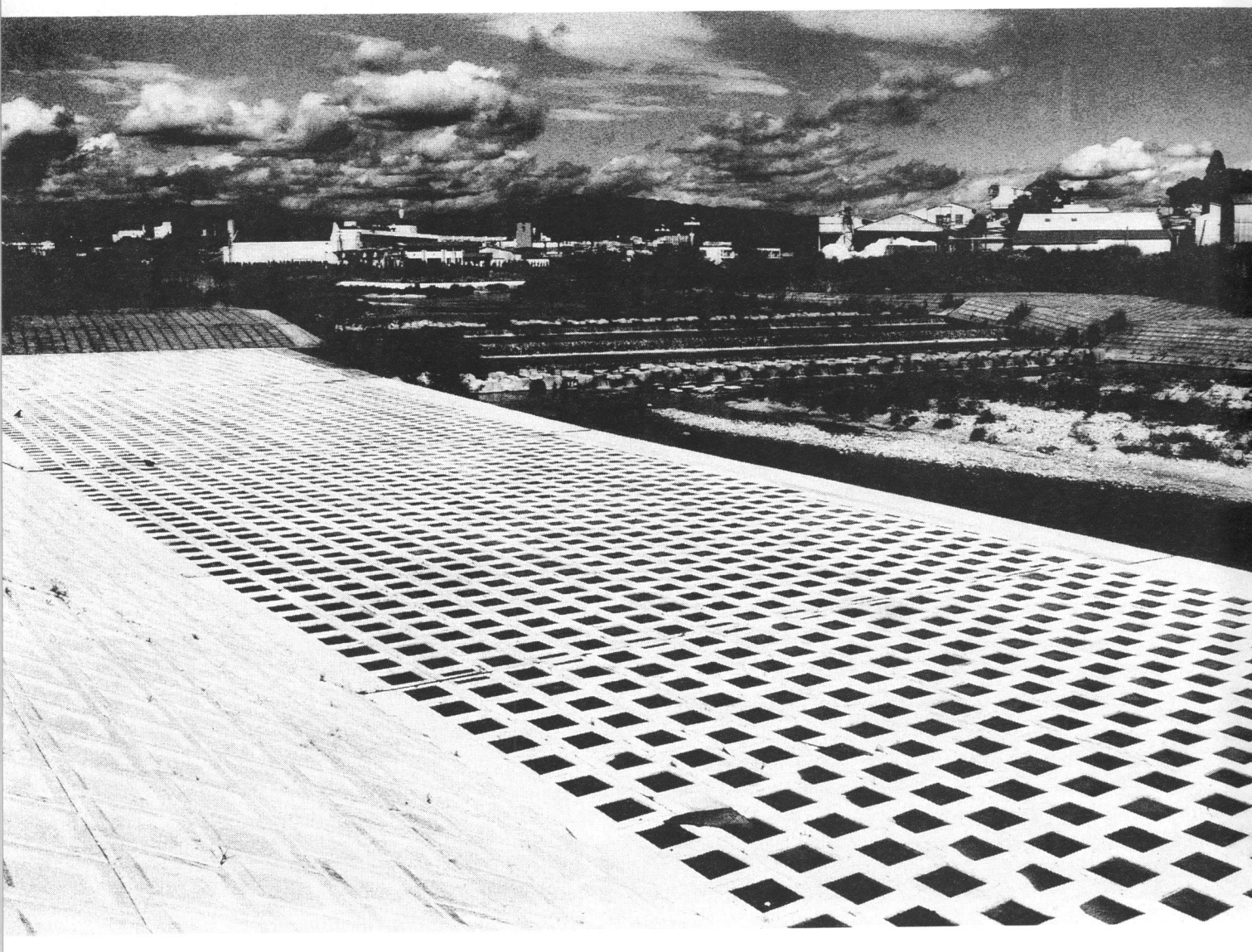
「庄内川にかかる最後の木の橋」だいとうろう橋

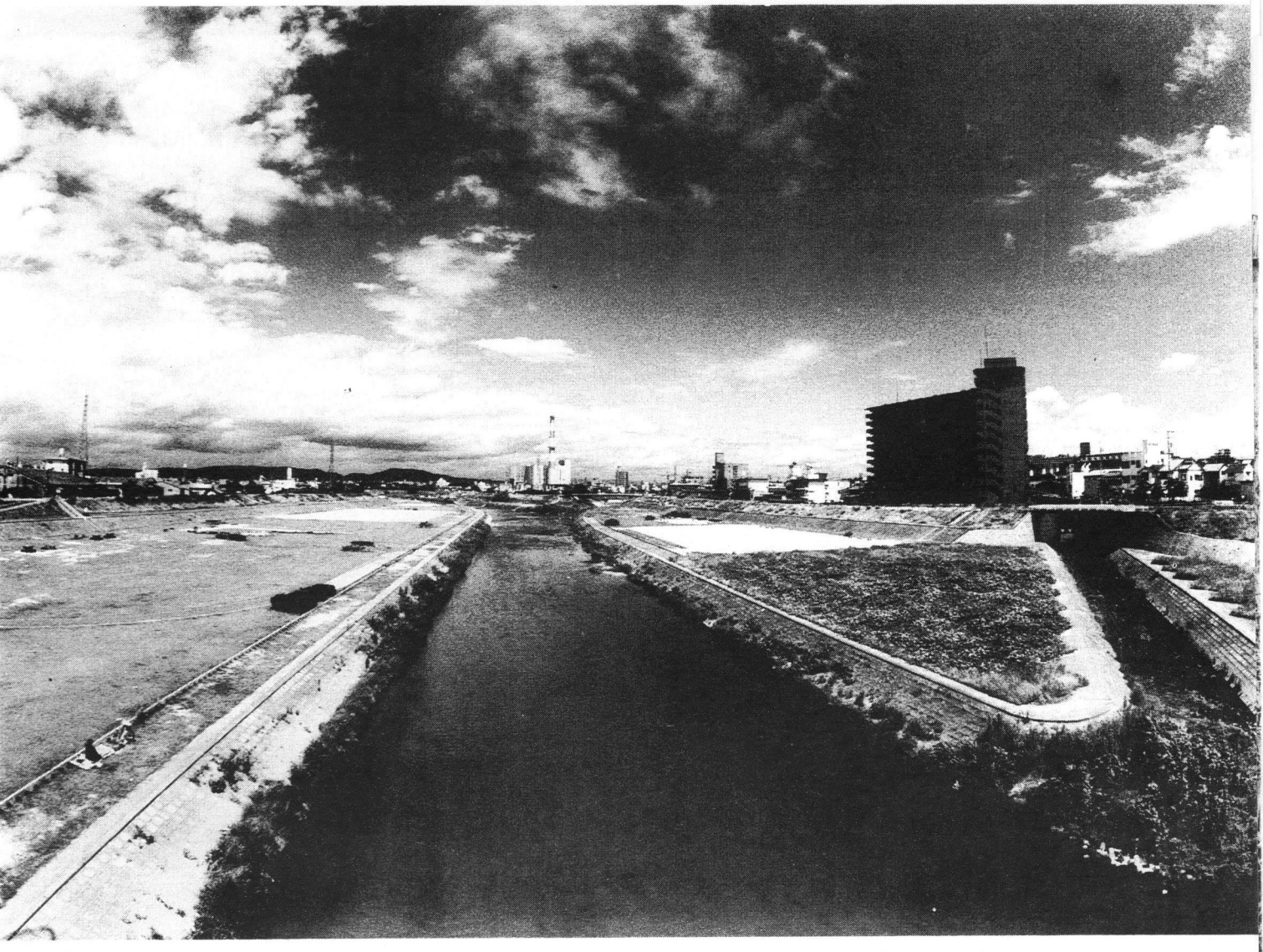
山本 光春

山本光春作品集

『北嵯峨の美』
『洛外の四季』

「護岸工事のすすむ河川敷」印場付近





「川から水路へ」小幡付近

矢田橋下流付近

矢田庄内川を通って

新日本歌人協会幹事
田中収

子供のころ泳いだ川を
工場廃水の
汚濁から守ると
立ち上った住民

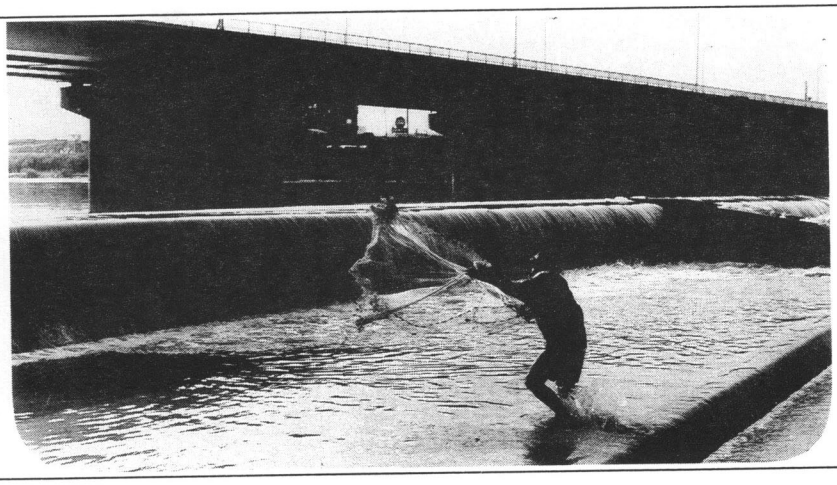
川のよどみは心の汚れの
看板の立つ矢田川は
秋陽にきらめく

水分橋に近い
川沿いの公園の
みどりに遊ぶ
幼児と母は

住民と話しあって
出来た処理場
テニスコートがあり
少女ら打っている

親と子で植えた
桜の並木と言う
丹羽さんとゆく
下水処理場

堰を落ちる
庄内川の水の音
丹羽さんの苦労
聞きながら立つ



『矢田・庄内川をきれいにする会』十三周年によせて

北医療生活協同組合理事長
徳田 秋

チグリス、ユーフラテスの昔から、人類の文化は川にはじまり川と共に栄えた、といわれています。人工衛星が飛び交い、まもなく二十一世紀を迎える今日といえどもこれは真理でありましょう。

かつてわが国の浅薄極まる経済成長は、郷土の自然を破壊してかえりみず、産業廃棄物や生活排水を川と海にそそぎ入れて、恥じることのない日々を重ねました。その結果、水は汚され、鳥さえ水辺を避けるかのように姿を見せなくなりました。

「矢田川、庄内川をきれいにする会」が生まれて十三年、幾多のご努力のおかげで、汚濁した水に奇形魚がかろうじて生き残っていた川がみごとによみがえり、流れには鮎が泳ぎ、川面には水鳥が影を映すまでになりました。

この川部に住むものの一人として、長年月にわたって運動を進めてこられた方々のご苦労に深く謝意を表しますと同時に、その無私の熱意とたくえつした実行力に衷心より敬意を表します。そして、住民の利益を守って奮闘してこられたこの会の、さらなるご健闘とご発展を祈って、連帯のごあいさつにかえたいと思います。

（一九八七・十）

私たちは水を必要としています

合成洗剤問題を考える市民連絡会 会長

日本福祉大学名誉教授
神岡 浪子

琵琶湖の水によって生きている人たちは、琵琶湖が汚れないように琵琶湖を守る運動を続けているが、「名古屋は水に恵まれているから水の汚れについて関心がない」と「矢田・庄内川をきれいにする会」の丹羽秀義名誉会長はきびしく指摘する。

名古屋にも川はあるが、上水道の水源になっている川はない。水は木曽川から「もらい水」（といってもタダではない）しかも、木曽川を水源とする名古屋の水道の水はおいしいという定評がある。そこで、かりに、木曽川で合成洗剤の白い渦が渦巻いていた場合に、木曽川と水道管だけで結ばれ

ている名古屋の市民が、はたして木曽川の水を守る運動に立ち上がるだろうか。

大都市では下水道の普及率は高い。したがって、工場排水も家庭の雑排水も暗渠の下水道を流れて下水処理場に入るから、汚れた水は人目に触れないし、悪臭も臭わない。したがって、下水道のある地域の人は、一般的に言って、捨てる水に関心を持たない。下水道のない地域では、工場排水も家庭からの雑排水も排水溝を通って川に流入するから川は汚れる。しかし水は下に流れるから、下流に流れていく汚れた水には関心をもたない。

東京都は、昭和四十五年九月、多摩川の玉川浄水場からの給水を停止した。それは、多摩川の水の汚濁がひどくなったからである。汚濁の原因は、工場廃液のほかに、上流流域の無秩序な開発による家庭排水が顕著だったが、とりわけ合成洗剤と汚濁との関係が指摘されている。

香流川が矢田川に合流する地点の香流川の水は、白い泡を吹いて、泡がまいあがっていた。これは合成洗剤の泡である。この泡を浴びながら釣りをしている人がいたのには驚いた。

名古屋の地図をみれば明らかのように、名古屋には川が少ない。川の少ない名古屋に、その昔、堀川が開さくされた。名古屋市史（『政治論』三巻四四四頁）は堀川の消息を次のように伝えている。

「堀川は古来、名古屋における第一の要江にして、明治九年、愛知県属黒川某の計画により、旧川を補鑿延長し、東春日井郡瀬古村に於て、荘内川に通ぜしめ、この一部を黒川と称す、南流して西春日井郡に入り、矢田川の底下を過ぎて大幸川と合し、出幟、上名古屋を経て、市内に入り、堀川と称し、南下して名古屋港に注入す。長三十余町、幅四十間乃至五十間とす。水流急ならざるが故に、舟筏上下頗三便なり……」

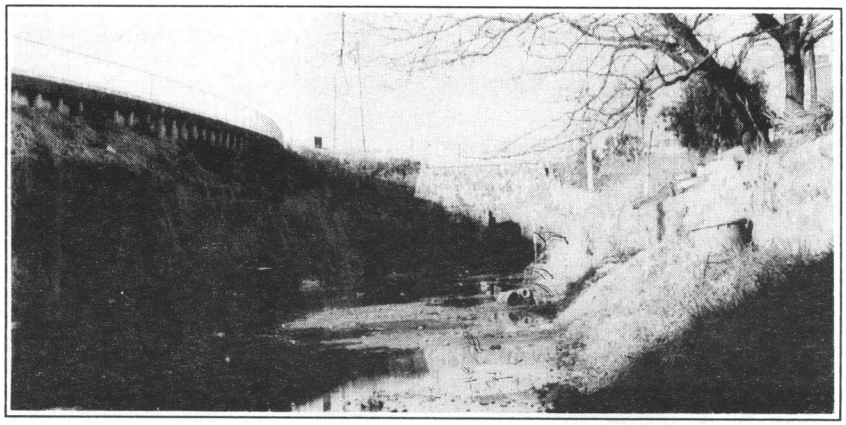
堀川は水運に生命をかけた川であるが、水がきれいな頃は、月見や花見の宴が催され、まさに観光の名所であった。

今、黒川の橋に立って川の面を見下ろすと、水は黒くよどんで、文字どおり黒い川である。

「名古屋の道路網は、他都市では真似のできないほどに完備しており…」と評価されているが、名古屋の道路中心の都市つくりは、すでに大正六年名古屋市長になった佐藤幸三郎が、「理想的都市建設は道路から」と「道路事業の貫徹に邁進する」とその決意を述べている。

こうして、名古屋の道路は高く評価されているが「名古屋は水を切り放して町づくりをした。都市景観は劣る」と指摘されている。（毎日新聞昭和六十二年九月二日付）

名古屋港に流入するおもな河川は、



堀川、新堀川、庄内川、荒子川、山崎川、天白川、日光川および中川運河であるが、とくに、堀川、新堀川および中川運河が湾内汚染の大きな原因になっている。

前記のように、名古屋には川が少な

い。しかも、それらの川が汚れている。この汚れた川をきれいにして水辺をとりもどそうと「矢田・庄内川をきれいにする会」が昭和四十九年十二月発足した。「魚が棲める川」→「魚は棲めるようになったが釣った魚は食べられない」→「釣った魚が食べられるようになった……」と年を経るごとに矢田・庄内川の水がきれいになったことを実証してくれたのは魚であった。

魚は環境のバロメーターと言われるが、魚は正直だ。釣った魚が食べられるところまで矢田・庄内川をきれいにしたのは、丹羽秀義さんを中心とした地域住民のねばり強い運動の継続があったからだと敬服する。まことに『継続は力なり』である。

私たちは水を必要とし、そして、使った水をどこかに排水しなければならない。しかし、その排水した水によって水環境そのものが失われないように、そこに住む一人ひとりが心がけなければならない。

私のささやかな試み——私の居住地域は下水道が完備しているが、私は、使う水、捨てる水に心を配っている。たとえば、洗濯も台所用もいっさい合成洗剤を使わない。たまたま景品として合成洗剤を渡される場合には辞退している。台所の流し口には二平方ミリメートルのメッシュの袋を張って、野菜くずやご飯粒など細かいごみが下水官に流れ込まないように工夫して、捨てる水には注意している。

自然環境を守ろう！

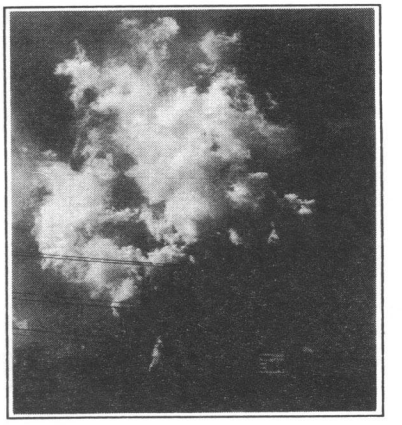
王子公害をなくす「住民の会」
春日井支部代表
小原　政春

「矢田・庄内川をきれいにする会」は、いつも気になる存在である。とりわけ、イベントの新鮮さには舌を巻く。アイデアの豊かさから、とてもリーダーが超高齢者だとは思えないのである。今や名古屋の名物男になったかの感のある丹羽さんが明治生まれというから、驚かされるのも無理もない。

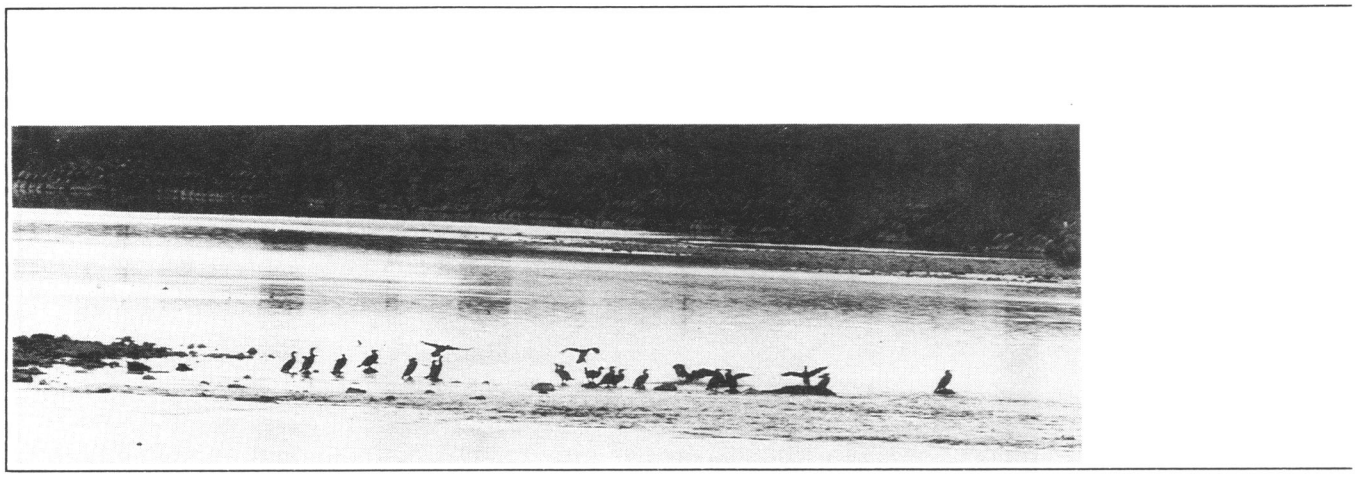
「矢・庄きれいにする会」がはじめた『食えない魚つり大会』や『食えるかもしれない魚つり大会』は、「つり大会」を名目に、ちゃっかり『川をきれいにする』ためのキャンペーンをきっちりやりとげてしまっているのである。こんなことができるのも「商人」であったことがものを言うのである。発想がただ若いだけでなく、企画する側も、企画にのっかる側も、「実」を取ることができるようになっているのである。

せちがらい昨今、「遊び」をとりいれつつ「会」のキャッチフレーズである『川の汚れは、心の汚れ』をつなげてしまうのが実にユニークなのである。心をうきうきさせるのである。

住民運動のパワーが、「公害国会」



王子製紙春日井工場



に実らせ、その成果を「地につけて押し広げよう」とする時代は、あっという間に消え去ろうという時、「矢田・庄内川をきれいにする会」は誕生した。「矢田・庄内川をきれいにする会」が誕生する前は、実は、王子製紙公害をなくす「住民の会」の一支部としてともに学び、ともに発生源へせめのぼるたたかいをしていた時期があった。したがって、リーダーの丹羽さんや、現在の会長を引き継いだ宮田さんとは、よく会合で顔を合わせた仲である。

その二人の力が「運動をより身近なものにする」ことと、もっと「身体で感じる運動」――をと考えたのでしょうか、「子どもをまき込む運動」を思いついたのである。

「反公害」というより「自然環境を守ろう！」に着眼し、さらには、子どもたち自身が身をもって「現実から学ぶ」ことや、未来の担い手たちに、「これが今の世だ！」「この汚れた川をきれいにするかどうかは君たち自身が決めることだ」と提案しているのである。決して押し付けでないところがこの会の生き方なのである。

自然と親しませたこの生きた『学びの場』の設定である。当然多くは「親子」でやってくるのであるから、大人自身も、「親子のふれあい」をしながら「ともに考えさせられる」はめになるのである。「明治男さまが！」と叫ばざるをえない。

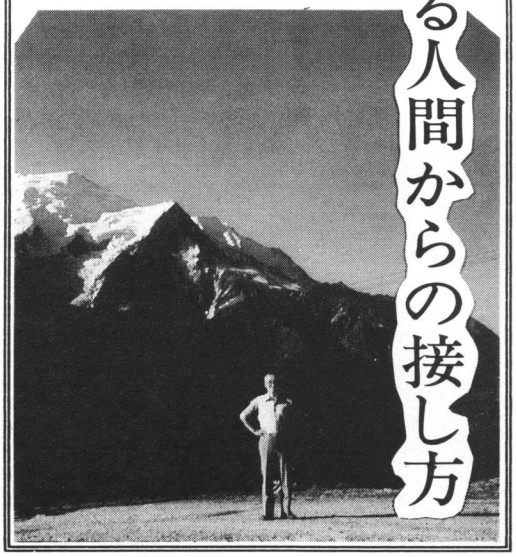
「矢田・庄内川をきれいにする会」は「遊んでばかりいる集団」だとヤユする人々もいる。しかし、ぼくはそうだとは思わない。裏方を実にていねいにこなしてきた現会長、宮田さんは、「川」「水」「魚」「ほたる」などの現状をこまかに歩いて調べ、その博識ぶりには目をみはる。この宮田さんが、実は高校時代まで「全然勉強ぎらいのチャンピオン」だったというのである。楽しいではないか。「試験技術」をただ押し付ける現在の「管理教育」からは、こうした大人を育てられなかっただろう。脱線したけど、このことはいつかはぜひふれてみたかった重要なことなのである。

さて、紙数がなくなった。偉大だった先代会長の後を継いだ宮田さんを中心とした「若きリーダーたち」による会のさらなる発展と、わが会のよき同胞（はらから）として、一つだけ期待を述べようと思う。

運動とは動き続けることで前へ進むことである。動き続けるために、いかに苦労が多いことか。さらには前に進むということは、「力」の継続と魅力的な運営なくしてはありえないのである。ともに刺激しあっていい仕事を続けよう。

自然に対する人間からの接し方

中部の環境を考える会
野呂 汎



「あの木を見て下さい。本当なら下からずっと枝が葉をつけているのが、まばらになっているでしょう。

西ドイツでは年々こうした森林の立枯れ現象がめだっています。」

こう説明しているのはバーデン・ブルッデンベルク森林調査研究所のベルハルド・ヒューバーさん。まだ三十代の若い技師です。

ところは西ドイツの南西部。スイス

国境に近い森林地帯でいわゆる「黒い森」（シュバルツ・バルト）の南のあたり。

黒い森はここから北方へ一〇〇キロあまり広がる西ドイツ有数の森林地帯で、中部・北部の三つに大きく分かれています。

そのうち、南部はちょうど中津川付近の山林に似ていて、それほど高くない山並みが続いていますが、木の種類はまったく違ってモミ（タンシーンバウム）一色です。

日本におけるひどい松枯れ病を見なれた目にはさほど病んでいるようには思われず、まだ枝葉も十分つけているのですが、ドイツでは早くも被害が出ていると見ているのです。

原因はやはり大気汚染ということでした。

それでも日本で聞いていた「酸性雨」の影響についてはあまり強調されず、車、工場からの排煙、排ガスがおもな原因であるとの説明でした。

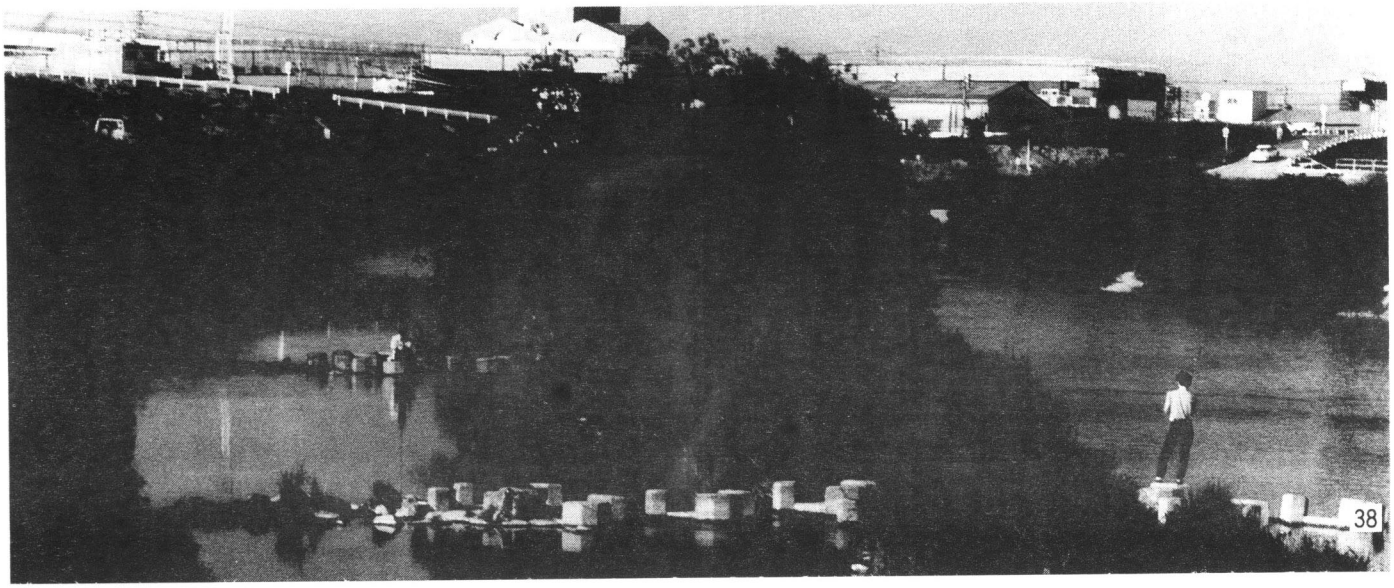
排ガスといえば、西ドイツでは車に排ガス規制は強制されていません。規制車には免税の恩賞がある程度ですから、速度制限のないハイウエイ（アウトバーン）を高速度で車に走られては近くの森林は相当のダメージをうけるにちがいありません。

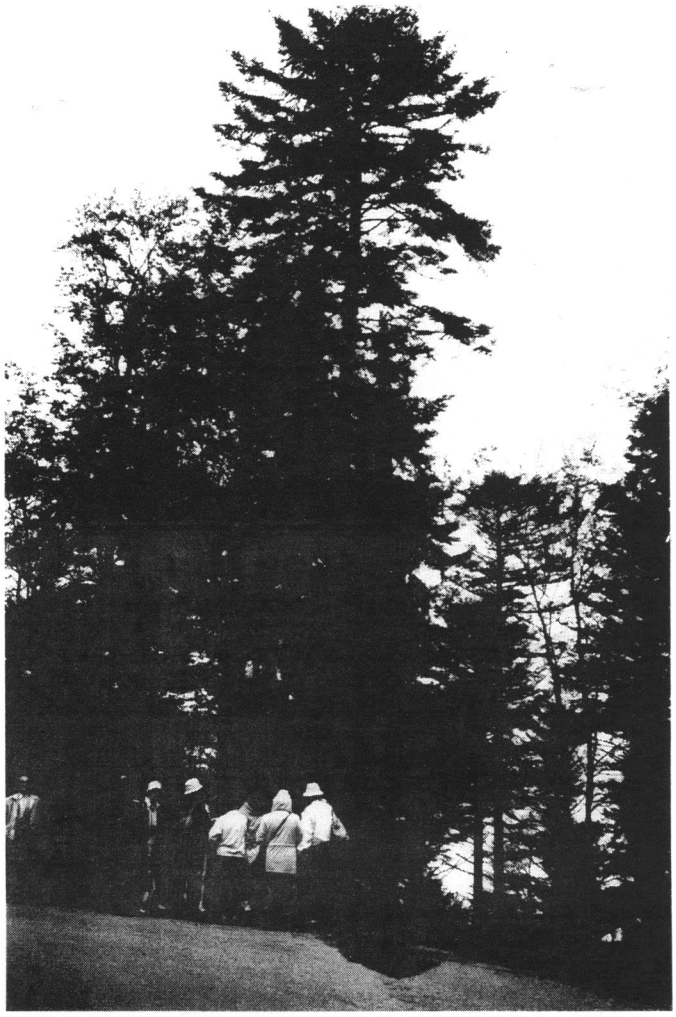
それだけに大気汚染による森林被害には関心も強く、前記の研究所では近くの森の中に観測施設を作ってデーターをコンピューター処理で集めて分析していました。

この施設は、直径六m、高さ七mの円筒型の塔の周囲を透明ビニールで囲い、上部をオープンにしたもので、中に自生のモミの木を入れて、外から清浄空気を送り込む一方で内部の空気とパイプで吸引する装置がとりつけられています。こうして清浄空気と自然の大気が混じりあった中のSO_2、NO_2、O_3、CO_2を自動的に測定して、木の成育に対する影響を観察するのです。わが国の林野庁とか愛知県が、こうした施設をつくって森林保護の行政をすすめていることは聞いたことはありませんでしたから、さすがドイツならではの印象を強く受けました。

黒い森も北部になると町のすぐそばで丘陵状に連なり、その中を縦横に散歩道がつけられています。フロイデンシュダットという小さな保養地近くの森を歩いてみましたが、日本と違って下草が生えていませんので、森の中の見通しがよく、また、森の木も一本一本が大きく立派に見え、実に素晴らしい印象でした。町から二、三分も歩けばこうした森があり、二、三時間の森林浴は軽くできるのはドイツ森林の特色です。

日本でも森林の自然は豊かです。この自然に対する人間からの接し方、すえ方が欧州とでは基本的に異なるの





ではないでしょうか。

つまり、欧州では自然環境を人が生きていく人間環境の一番大切な要素として扱い、しっかりとつかまえてきたのにくらべて、日本では自然を人のくらしから離れたものとしてながめたり、感じたり、あるいは恵まれたりする対象としてしか扱ってこなかったのではないでしょうか。

この違いが、前述の森林観測施設のように森林の現状にちょっとした変化、影響がみられるとすぐ科学的な対策をたてるといった行政の姿勢にも表われているのであって、自然の環境破壊はおろか、人の生命、身体に被害が出てはじめて公害、環境対策の重い腰をあげる日本のたち遅れを痛感した次第です。

このように、今は立派な欧州の森林も、二〇〇年前までは家畜の放牧とか燃料にするために徹底して破壊されていたのが、その後、これではいけないというので新しい森林を意識的に作って現在に至ったそうで、それだけに森林を大切にしようとする意気込みは、日本とは比べものにならないほど強いと言えます。

今度の調査旅行では、ほかにフランスの国立公園、スイスの世界野生生物基金本部（W・W・F）、国際自然保護連合（I・U・C・N）を訪ねましたが、いずれも組織的かつ計画的に森林など自然保護のため管理、活動を続けていて、その成果は数々の法制度、条約、協定などに生かされています。

こうした欧州の実情を見ると、日本の自然保護の動きは、あるいは情緒的であったり、あるいは経済尺度で見すぎたり、いま一本、筋が通っていないのが心配です。その原因は何か、対策はどうすればよいかなどなどの問題は次の機会にゆずりたいと思います。

庄内川河口——藤前干潟の渡り鳥

名古屋港の干潟を守る連絡会議長　辻　淳夫

ニューヨークでも

少し前のことになるが、洋書店で偶然「ニューヨークの森と湿地」という本を見た。高層ビルの林立する大都会というイメージしかなかった私に、その題名はいぶかしくも魅惑的だった。

表紙ウラの地図には、マンハッタンをはさむハドソン川やイーストリバーの上流部から河口部までの点在する公園や保護区が描かれ、頁をめくると、都心から一〇～一五マイルの所にある昔日の面影をのこす風景や、豊かな自然と野生生物が、その歴史と保護に関わった人々のことなどとともに紹介されていた。

驚いたのは、ケネディ空港のあるジャマイカ・ベイに、五〇〇〇ヘクタールもの干潟やあし原が密集する島々を結んで連なり、シギ・チドリやガンの群が渡来し、ブロンズトキや

ユキコサギが繁殖するという巨大な野生生物保護区があったことだ。

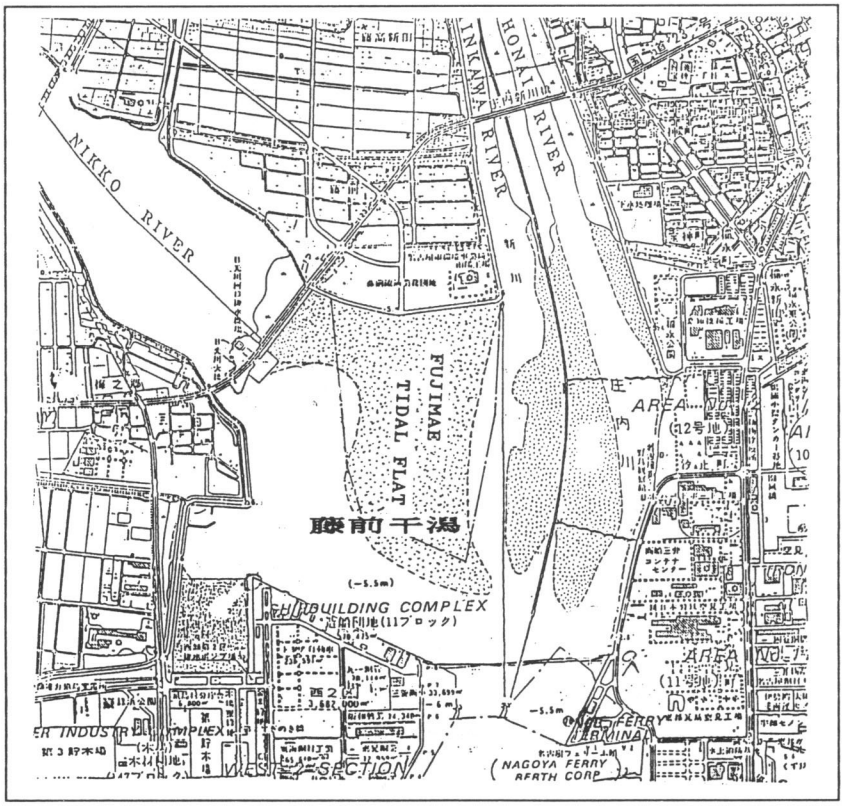
当然ここにも空港の拡張計画や、道路、地下鉄などの侵蝕圧力が常にあり、それに抗しつつ野生の復元を図ってきた保護区管理官（行政マン！）の大変な努力があったからこそらしいが、ともかくこうした原生の自然をその懐に擁しているニューヨークに、それまでとは違った親しみを覚えたのである。

かけがえのない、最後の生息地

思うに都市の表情とか風格というのは何だろう。パリのセーヌ川、ロンドンのテームズ川など、私たちはその都会を美しい水辺の風景で思い出すことが多い。華やかな近代都市の中で、そうした自然がいかに大切にされ人々に愛されているかが、映像や写真を見ただけでも快い印象としてストレートに伝わってくるからだろう。

さて私たちの名古屋にそのようなものを探せばどこになるのだろう？　先覚者による夢と努力がもち続けられている堀川や庄内川に美しい水辺をとりもどし、それをいかしていきたいものだ。

そしてまだ充分市民になじみがあるとは言えないが、ニューヨークのジャマイカ・ベイにあたるところが、名古屋港西部の庄内川河口から日光川河口にかけての干潟なのである。（その中心が藤前干潟、図ー一参照）



全部で三〇〇ヘクタールと、ジャマイカ・ベイの広さとは較べべくもなく、港用地や工場にとり囲まれてとても原生の自然といえるものではないが、ここはあいつぐ埋立で失なわれてきた木曽川デルタの干潟数千ヘクタールの最後の部分であり、角ばった人口埋立地にはない自然の地形がもつゆるやかな曲線とのびやかな広がりを見せてくれる水辺の空間なのである。

万葉の歌にうたわれ、愛知の由来でもある「年魚市潟」がどんな姿を人々に見せていたかは想像する他はないが、少なくともその現風景をイメージし、当時を偲ぶよすが（＝手がかり）となる雰囲気が、近代的な名港西大橋をその先に望む藤前干潟にはある。

その太古の昔から伊勢湾に渡りを続けているシギ、チドリ、カモやサギなどの水鳥たちに

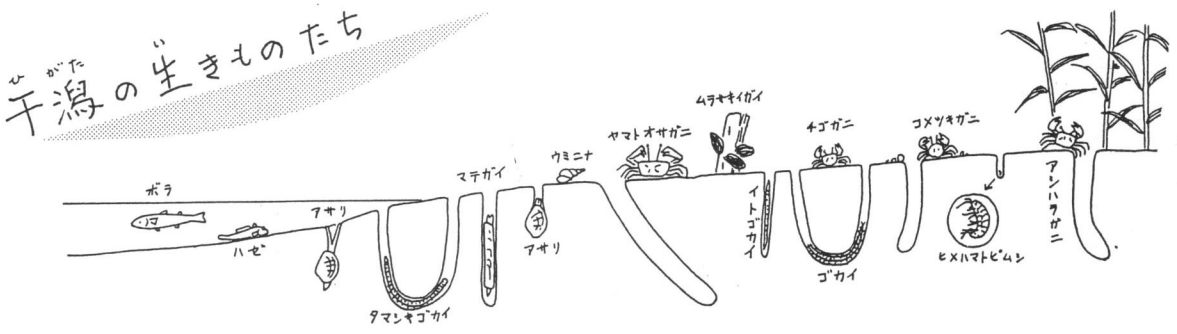
とって、かけがえのない最後の生息地であり、日本で最大級の渡り鳥渡来地になっているのである。

干潟は元来、潮汐のある太平洋側の内湾、大河川河口部にのみ形成されていたが、そのいずれにも臨海工業用地として埋立が進み、今やシギ・チドリが一〇〇〇羽以上の単位で見られるのは、東京湾、伊勢三河湾、有明海などのごく一部に限られてしまった。

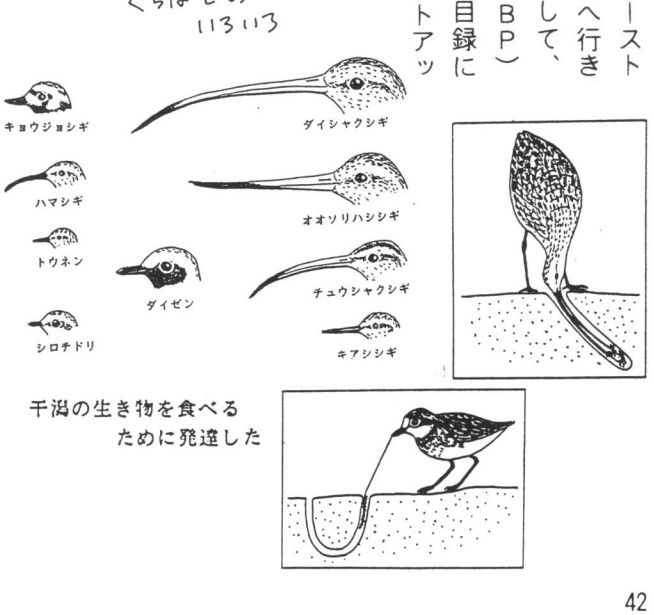
ところがこの伊勢湾でも、最後に残る干潟の中心部であり、鳥たちの最良の餌場となっている藤前干潟に、名古屋市が一九九〇年からのゴミ処分場としての埋立を計画している。

もしこれが実行されれば、一帯の干潟は庄内川河口を残して消失し、渡り鳥たちは貴重な餌場を失ない決定的なダメージを受けるのは必至である。

私たちは三年前の計画発表以来干潟保存運動にのり出し、現在地元の野鳥保護四団体を中核に自然環境保護の十四団体が連絡会を結成し、広範な市民運動を展開しているが、かつてない熱意の盛り上がりと市民の好反応があり、支援の輪は全国にも拡がっている。



さらに藤前干潟は、オーストラリアからシベリアなどへ行き来する渡りの中継地として、国際鳥類保護会議（ＩＣＢＰ）のすすめるアジア湿地目録に特別重要地域としてリストアップされていることもあって、つよい国際的関心を呼び、すでに八ヶ国十六件にのぼる海外の自然保護団体、個人からの保存要請や請願署名が寄せられている。



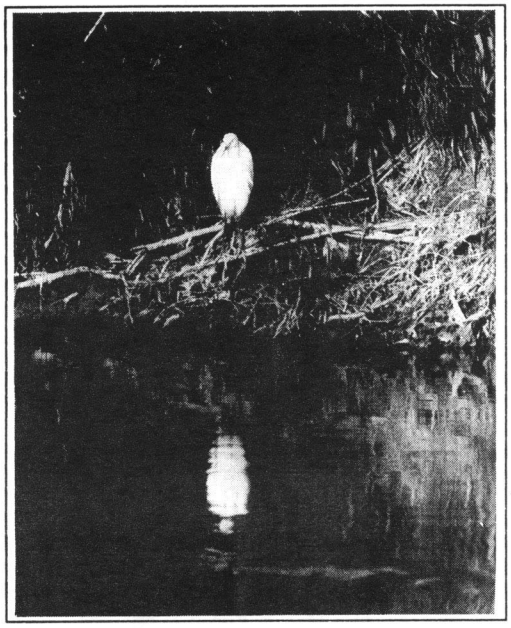
暮しのあり方を見直して

干潟は渡り鳥によって象徴されているが、彼らの餌となる底生生物、カニやゴカイなどの生きものが棲み、貝や稚魚を育てる場所であり、その豊富な生物生産量から「海の胎盤」ともいわれる。その生態系が流入する有機物を分解し、海水の浄化と生命の再生産を維持しているのである。

そのはかり知れぬ大きな価値を失ない、ゴミ埋立による汚水流出に重なって、ことは「伊勢湾の海の生死に関わる問題だ」ということももっと理解されて良いだろう。

そして市民の一人として、私たちの出すゴミが、こうした貴重な自然環境を潰し続けている事態を直面して、これをどこか根本的に改めてゆく道を見出す責任を感じるのだ。

名古屋市のゴミ行政は、他都市とくらべて格段にゴミ量は



多く、リサイクル（資源化）率は低いなどの改善の余地が大いにあるが、何より市民自身がその実態を認識し、ゴミ問題を解決してゆく志向をもつことが必要だろう。

そこから、私たちの「使い捨て型」の暮しのあり方を見直し、またいや応なくそれを強いられる生産－流通－消費－廃棄の過程をトータルに考えた政治的、経済的な解決の道が見えてこよう。

ことは容易ではないが、現在本気でとりくまなくて、いつそれができるだろう。

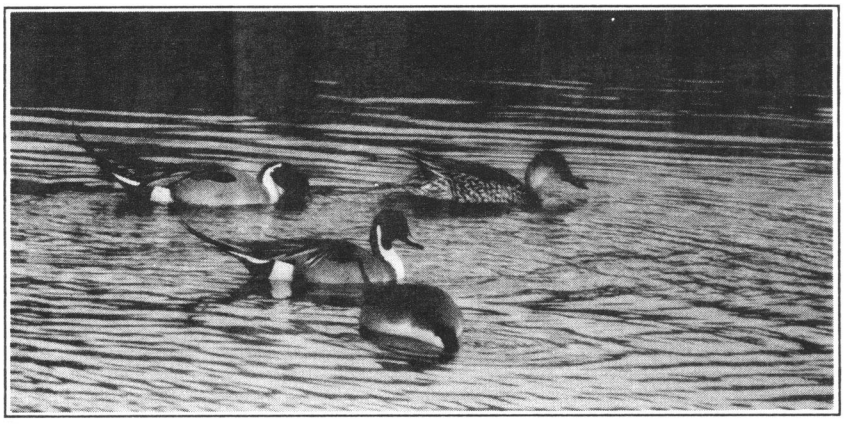
市民のオアシスとして

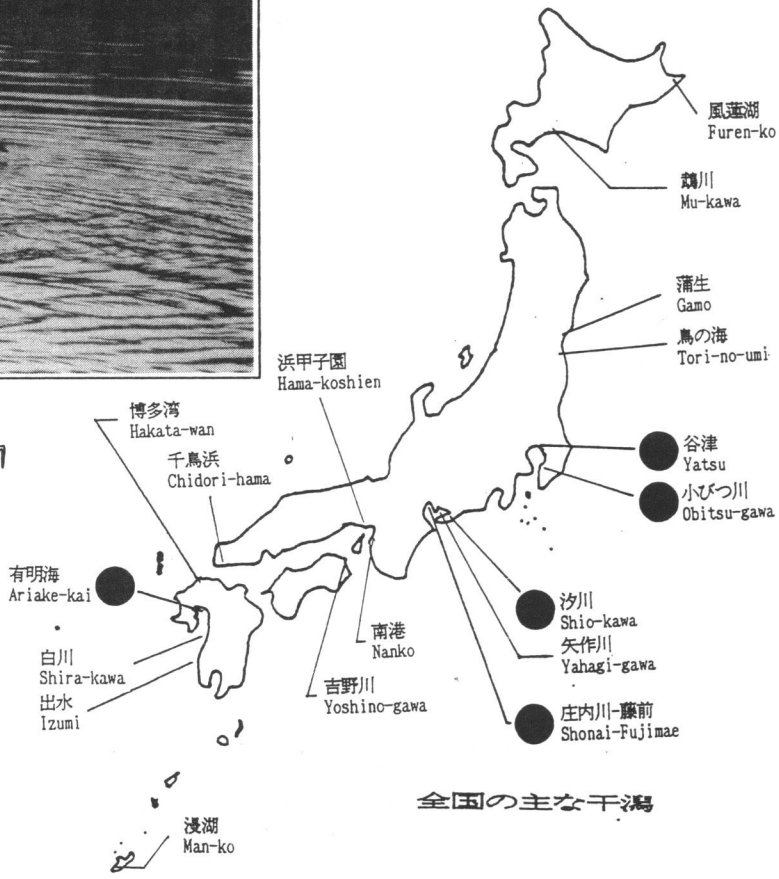
かのニューヨークでもゴミ問題では苦労しているらしい。ゴミ処分場がなく捨て場を求めて出発したゴミの船が、各地で拒絶にあい、結局ロングアイランドに戻ったという話を聞いた。

しかし一方「この人口七一〇万人の大都市で、アキ缶回収のためにデポジット制度を導入して、その七割を回収し、埋立ゴミの八%、肥料五五〇トンの固型ゴミを減らすことに成功している」（「暮しの手帳」九九、一九八五）という。

私たちの名古屋でも市民の英知を尽くしてゴミ問題を解決し、地下鉄でゆけるところにある市民のオアシスとして、世界に誇りうる渡り鳥の大規模渡来地を貴重な自然遺産として守り伝えようではないか。

そうした努力によって守られた干潟と渡り鳥たちの姿こそ、訪問者の目と心に焼きついて消えないであろう。





全国の主な干潟

庄内川あれこれ…洪水と新川

大蛇の話

「尾張徇行記」という本によれば、福徳村の又左衛門という人が、雨が激しく降る日暮れ時に比良村の池のそばを通りかかった。池のほとりに数匹の大蛇がいるのを見た。大蛇は頭は虎のようで、目は星のよう青白い光りをおび、舌は火のように赤かったという。彼は驚いて逃げさった。これを伝え聞いた織田信長が村人を使って池の水をかえ出し、大蛇を見ようとしたが、水は汲めども汲めどもなくならなかった。信長は怒り、こんどは自分がもぐって大蛇を見ようと、刀を口にくわえて飛び込んだが、ついに見る事ができなかったという。それ以来この池を蛇池と呼ぶようになった。

この近くの人は、池に渦巻きがおこったりすると

「大蛇が泳いでいる。」

といったり、又池に竜巻きがおこったりすると、

「ありゃあ、大蛇が天に昇ろうとしているのだわ。」

といったりしたものだ。

童唄にも蛇池のことが唄われている。

「比良の蛇池に蛇がおるげなじゃ
雄蛇か雌蛇かわからんじゃげなが」

という。

今このあたりの庄内川から新川に至る堤防は桜並木になっており、絶好の散歩道であり、春の花見時には人が一杯訪れる。蛇池の周りには公園がつくられ、市民の憩いの場になっている。

比良の蛇池のスケッチ

歴史教育者協議会　会員
春日小学校教諭
半谷 弘男

著書　『愛知の歴史ものがたり』
『おはなし歴史風土記』愛知県
『社会科二年の授業』
（いずれも共著）

大水のこと

私の祖母は明治十九年、現在の西区の上小田井に生まれた。この祖母がよく寝言をいったものである。

「成願寺の堤がきれたよう、味鋺も危ない。」

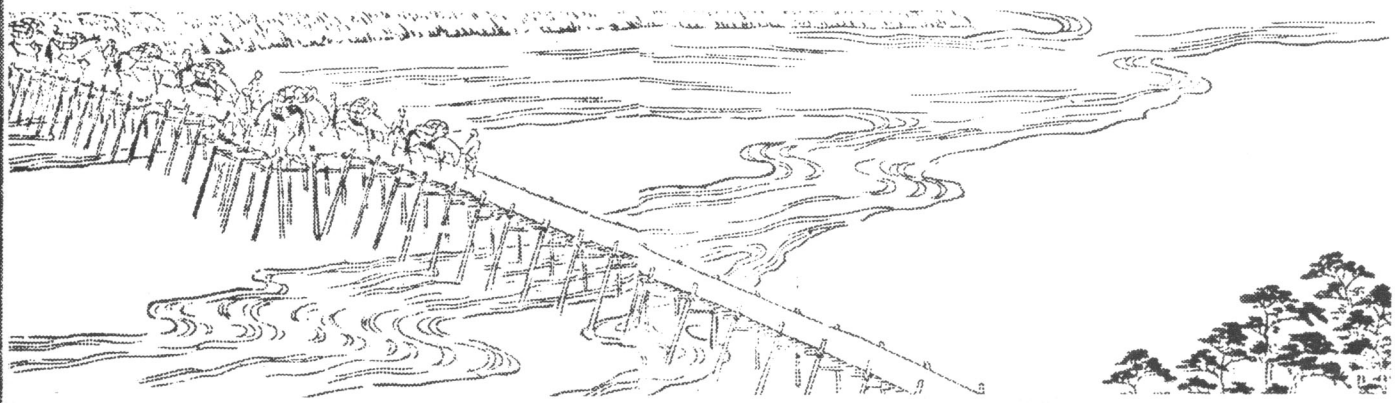
という洪水のものが多かった。隣で寝ている私は怖くて怖くて、それを聞くと布団の中にもぐりこんだものだ。昭和二十年代になっても寝言にいうほど恐怖を与えた洪水というのはどのようなものだったのだろう。こう思って水害について調べてみた。

庄内川は岐阜県の夕立山に水源を発し、全長九六kmの中小の河川である。上流の土岐・瑞浪・多治見は陶磁器の産地であり、陶土の乱掘が続き、燃料の薪を得るため山林の乱伐があって、治水に欠けた。さらに上流は崩れやすい花こう岩からなっていたので、庄内川は年々土砂がたまり、周りの土地よりも川底が高い天井川となっており、一度大雨がふればたちまち洪水となる荒れ川であった。

洪水の時期は台風シーズンの八、九月と梅雨どきの六月が多く、堤防の切れるのは味鋺から枇杷島あたりの右岸に多発した。これは庄内川と矢田川が合流し水かさが増すことと、平野部に入って流れがゆるやかになることからきている。さらに堤防の名古屋市側が切れないで右岸が切れるのは、城下町の名古屋を守るため、右岸の堤防が三尺低かったからである。名古屋を守るため、右岸を人為的に切ることすらおこなわれた。「小田井人足」という侮辱的言葉が今に伝えられている。小田井の農民は名古屋を水害から守るため庄内川右岸の堤防、つまり自分たちの村を大水にするため堤を壊す仕事に動員された。サボタージュするのが当然であり、責められるものではない。責められるべきは誰であろうか?

江戸時代の水害の主なものだけでも三十九回、明治期には七回の記録がみられる。今、庄内公園になってている所は遊水地であったし、川沿いに水神社が各地に残されている。「雨を降らせないで下さい。」と祈った人々の気持ちが伝わってくる。これらを見ると、住民の水害への恐怖がよくわかる。

水害から身を守るため、成願寺・中切・福徳では村の周りに輪中を造っていた。また、自分の屋敷を高く土盛りしたり、水屋をつくることがおこなわれた。明治四(一七六七)年七月十日から十三日の大雨で庄内・矢田川の堤がきれ右岸左岸とも泥海となった。現在の西区と北区が浸水した。城西では、船で往来した。名古屋では家屋・俵の流失が多かった。この水害後、味鋺・如意の二村は村ごと東北の高地に移動している。清洲惣庄屋丹羽家の文書は次のように記している。



「出水で比良村（西区）大野木村（西区）堤が切れ、土器野新田（新川町）と西掘江村（新川町）萱津村の堤の右岸が切れ、家は勿論溺死した人数も分からないほどです。」十五日の夜から減水したが、田畑の作物は、皆腐った。

庄内川の川底の砂を取り除くこともおこなわれた。天明三（一七八三）年の冬、川ざらえの様子が名古屋押切村の庄屋一東利助の御冥加普請記に次のように記されている。

「「その日になると町のものは銘々の印の付いたのぼりを立てて集まり、人数は千余人、町のものは木遣りをうたい、村のものは長持うたをうたい、川をさらえ、土砂を運んだ。数百ののぼりが、風にひるがえり、その声は遠くの村にまで聞こえた。」

これを見た殿様は酒・肴を下し、労をねぎらっている。

田に洪水が流れこむと、砂が入り稲が育たなくなる。農民は「砂入りになって米が出来ません。年貢をまけてください。」と洪水の度ごとに願いを出してくる。支配者である武士側もその都度対応におわれる。こんな繰り返しが江戸時代何十回となくおこなわれた。残された資料は水害の悲惨さや支配者である殿様の恩恵を伝えているが、水害を逆手にとった農民の粘り強い交渉や「小田井人足」などのしたたかさを見逃してはならない。

庄内川の水害を防ぐには、一つは堤防を強化することである、二つは川底をしゅんせつすること、三つは川幅を広げることである。さらに第四は新しく排水用の川を掘ることである。

前の三案はいずれも莫大な費用がかかり、実現の見込みがなかった。最後の四案が可能性があった。庄内川沿いの村々の切なる願いであった。清洲十四か村の総庄屋であった丹羽助左衛門はその先頭に立って、嘆願をくりかえした。新川町寺野の丹羽家には当時の古文書が今も大切に保存されている。次にその治水工事の様子を見よう。

新川開削とその影響

新川開削の工事は天明四（一七八四）年に始まり天明七（一七八七）年に完成している。工事は庄内川の右岸を全長七十mほどを五合目の所で切りとり、新しく排水用の川を開削することである。庄内川を切りとった所を洗堰といい、新しく掘った川を新川という。工事区間は全長二十km、現在の名古屋市西区、西春日井郡、海部郡にわたる地域である。これで水害がなくなると勇んでかけた農民が多かったであろう。私の家の先祖の与七もこれに動員されている。冥加普請ということで一日の手当はわずか十六文か十七文であったので、そば一杯分である。そのとき得た金で買ったという茶碗が五十こあり、私の子供の頃まで汁茶碗として使っていた記憶がある。

昔の庄内川（味鋺付近）
（尾張名所図絵から）

さて工事には莫大な費用がかかることがみこまれた。資料によると四十万両といわれている。当時米六斗が一両であったから現在の米の価格で計算してみると、百九十八億円になる。当時、尾張藩の年収が十五万両ほどであったから、おいそれと工事にかかれなかったことがわかる。

責任者の水野千之右衛門は、この間の事情をよく承知していたので、工事費の見積もりを安くし、しかも二百か所で一斉に川を掘り、途中で工事がやめられなくした。西区の村が受け持った堤の長さは次の通りである。

比良村　九五〇間（一七一〇m）、上小田井村　五十四間（九七・二m）、中小田井村　七百五十三間（一三五五m）、下小田井村　四一六間（七四九m）。

堤の断面図を等脚台形にたとえると堤の大きさは、ほぼ上底が九尺（二・七m）、下底が九間（一六・二m）、高さが二間（三・六m）である。ブルドーザーもダンプカーも無く、もっこと鍬で行われた。土木の専門業者である知多の黒鍬もきている。工事事務所は新川町土器野新田の庄屋宅に置かれた。資材や人足がおびただしく出入りしたことであろう。

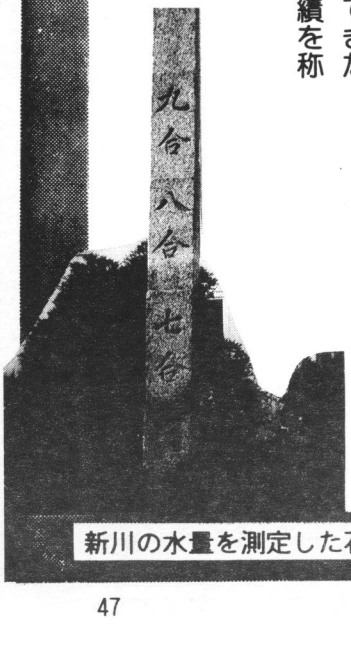
ところが工事は一時中断される。費用が莫大過ぎるということである。農民はたまったものではない。村々から工事の再開を願う嘆願書が相次いでだされる。水野千之右衛門は悲壮な決意をこめて藩公に上書している。掘り返した田をそのままにすててておくわけにもいかず、工事は再開された。責任者は積算を誤ったということで罰を受ける。しかし沿村の農民にとっては大恩人である。新川完成の三十二年後の文政二年に水野の功績を称える治水碑が比良新橋の東百mの所に立っている。水野千之右衛門の八十七歳のときであり、碑文は当代一流の学者、樋口好古である。明治三十三年に西春日井郡長の高坂景顕は「非常の業は非常の人を待って成功する。」とのべているが、至言である。薩摩藩の三川分流工事にも匹敵するものであった。

新川完成後、排水がよくなり洪水は五十年ほどおこらなかった。さらに予期せぬ副産物がもたらされた。一つは、比良村と如意村の境にあった大蒲沼が年々干上がり、開拓がおこなわれ、ついに新田となった。大蒲新田、喜惣治新田がそれである。地名変更でこれらの名称が無くなったのは残念なことである。

今一つは、農民の努力とあいまって、麦の収穫高が飛躍的に増えた。それは、従来、稲を刈り取った後に麦を蒔いていたのが、稲株の間に麦を蒔く方法が考案され、播種を約一か月速めて、収穫をふやした。さらに、従来は四本畝であったのを三本畝にすることになり、播種面積が、三割増えた。勿論水はけがよくなったからできたことである。この水稲中播を考えたのは比良村の早川新七である。土地の人は新七蒔きとよび、かれの功績を称えている。

参考にした本

新川町誌　町誌編纂委員会　昭和三十年
庄内川流域史　庄内川工事事務所　一九八一年
尾張徇行記　愛知県郷土資料刊行会　時和五十一年
楠西学区の歴史　愛知県郷土資料刊行会　昭和五十八年
山田地区三〇年のあゆみ　名古屋市合併三〇年記念事業実行委員会



新川の水量を測定した石柱

早川新七頌徳碑

「矢田・庄内川をきれいにする会」とともに

ガキ大将七十六才の生涯

「矢田・庄内川をきれいにする会」名誉会長

丹羽 秀義

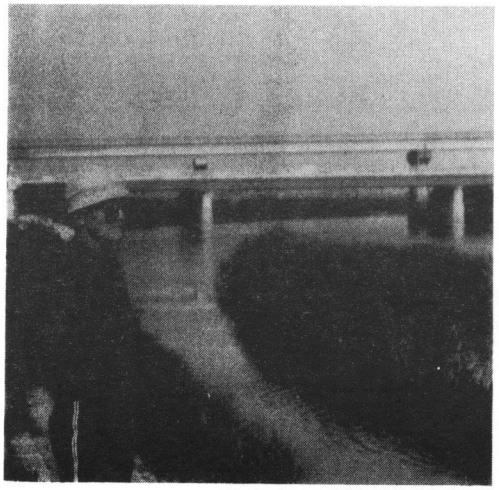
私は明治四十五年、八神やえを母親に私生児として生れ、母が再婚するにあたってお荷物になり、生後二ヶ月、子どもがほしいというところへ点々と三回くらいまわり、落ち着いたのが中区小林町、現在前津中学の近くに住む丹羽為一を父に、母をウラと呼び、育てられた。

この家がどんな生活だったかというと、丹羽愛之助の芸名でどさまわりの役者。非常に女性問題が多く、いつも夫婦げんかで、世間から見れば乱脈でだらしのない家庭でしょう。その当時のどさまわりの役者なんていうのは次から次へと、どれが家内だかわけのわからん状況だ。しかし、母はそういう社会に似ても似つかない堅物で毅然とした態度でね、世間では根性が悪いとか気が強すぎるとか言われたが、家によりつかない父より私をしっかりだかえる母をこのうえなく頼もしく思った。

先日NHKの番組で九州の炭鉱の町を出て各地方へどさまわりする劇団にひろわれて子役をやりながら地方舞台をまわり歩く様子に感銘するところもあった。しかし、ちょっと違うんじゃないかと思うところもあった。私も時々子役で名古屋から刈谷、安城、岡崎、豊橋と、それぞれ三日、四日と行ったもので、セリフもよく覚えて、座員や観衆からほめられたと自慢して母に報告すると機嫌が悪い。子ども心に「どうしてだろう。ほめてくれると思ったのに。」

大正七年、前津尋常小学校にぴっかぴかの一年生で入学。体の小さいのは三番目、足の早いのは一番で、四年生ともなれば前津小を中心に門前、橘、南久屋、松元、松枝の各学区を縄張りに十五、六名のがき大将ぶりを発揮。ニックネーム白ネズミ。二、三の例をあげると、上前津より東へ五百メートルの大池町に、周囲約一キロの池があり、遊泳禁止をさも得意げに水泳を披露する。塀を乗り越えて登校。他校生徒とのけんか。そのたびに校庭の大きな柳の下に立たされる。先生からのたびかさなる呼び出し、こごとに母は父兄会に出席しなくなった。

私は水泳に、野球、短距離と、上級生に負けないがき大将だが、先生や全校生にも人気がよい。学芸会には、私はいつも主役。みんなとうまく成功し、喝采されるが、その中から「どさまわりの役者の子だよ、がき大将で勉強の方はねえ」、目と声に心機一転ぐんぐん成績を上げる。速算三級をとり、五年生をむかえ、年令を偽り夜間部前津実習商業学校の入試を受け、パスをする。四ヶ年終了の乙種商業過程である。しかし、入学にあたり戸籍抄本を提出して年令がばれて職員会議が



開かれ、呼び出しがあり、向学心が旺盛だから特別に前期二ヶ年は聴講生とりあつかいとし、後期三年をさらに入試することで通学が許可された。

母は、月謝や本代などを心配するが、学校側から進学者から古い教科書をもらい、月謝無料と知らされ得意顔の少年が鼻水をこすりながらも忙しい毎日となる。小学校を三時に上がり、名古屋速算を五時に帰り、夜間部に九時三十分帰宅。日曜日の昼間は、がき大将ぶりを、夜は近所のおじさん方の囲碁に興味をもつ。そして、大正十二年九月一日、東京震災をむかえてはじめて石をもち近所のおじさんを負し、大評判となり、当時の大津通りの愛知新聞の見出しに『がき大将碁打ちの大人へ殴りこみ』と出て、後藤桂山先生に五子対局が連載され、またまた鼻が高い。

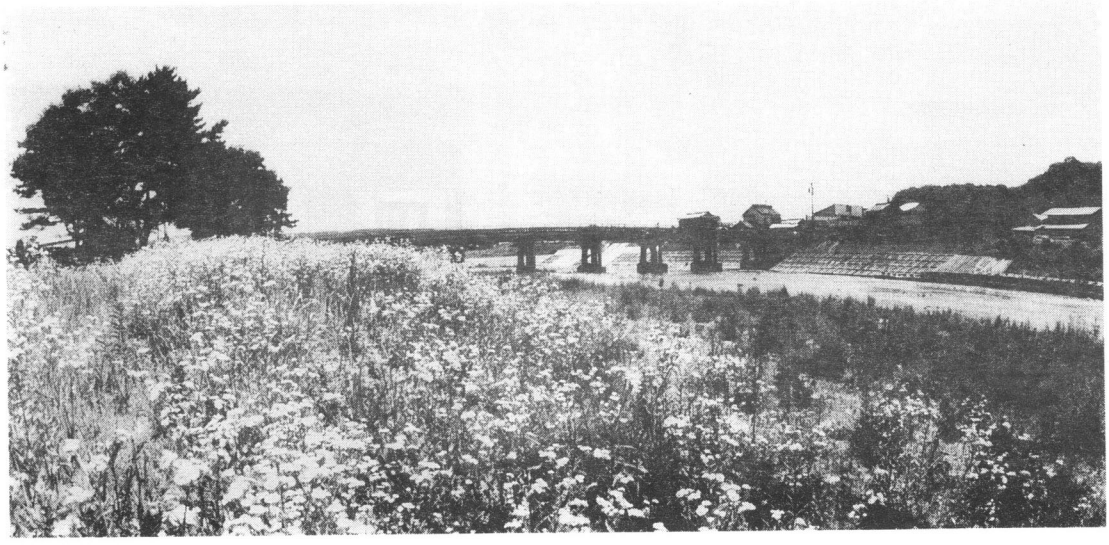
さて、自分が新聞で紹介されたことで、何もわからぬ子どもが記事に興味をもち、連日にわたる悲惨な関東震災の報道、さらに、陸軍甘粕大尉社会主義者殺惨に紙面がにぎわう。ますますすみからすみまで読み、意見を唱える周囲から「子どもらしくない」と声が聞こえてくる。あまり家によりつかなかった父が家にいるようになった、女形役者の宿命か、鉛毒による障害でモルヒネ中毒の薬害。後遺症と重なり貧困に立ち向かう母は、屋台車を引いて子どもの遊ぶ広場でキンチャン豆を売り、三人の生活がはじまる。

大正十四年四月、私は速算初段をとる。名古屋速算塾長中川先生の同情と好意で名古屋速算分室の看板を掛け、近所の子どもを集め、三時三十分より五時三十分まで指導し、月収五、六円を上げる。そのころ海国日本軍艦長門、陸奥、国民皆泳の声が盛んに伝わってくる。家がいかに苦しくとも子どもにとって夏休みは夢の中に海だ山だ川がある。県議服部崎一氏主催愛知遊泳の募集に参加、庄内川枇杷島へ友だち三人と楽しい毎日だ。水泳も、日に日に上達し、魚を追い、焼き魚に舌鼓を打つ。青空にトビが舞い、河原では時々「うなぎかき」のなごやかな風物詩を見る庄内川との出会いが生涯さらに大きなであいになろうとは思いもしなかった。

「秀ボウ」から「秀さ」へ

迎えて大正十五年、栄町の伊藤呉服点が大津通り矢場町の松坂屋デパートでの開店記念披露行事にちなんだ展覧会へ応募し、作品『虎の声聞くや大正十五年』が特選する。当時、名古屋新聞主観小林橘川先生の目にとまり、先生から「卒業したら入社しないかと聞いて、あこがれの豆記者きどりで母に報告する。「とんでもない」と言葉が帰ってきた。なぜだなぜだ、私は不満であった。関節リュウマチで手足の痛い母、私は暇をみてそらまめの皮をむき、日曜日は広場で遊ぶ友だちによびかけると豆がよく売れた。がき大将も時には役立つものだ。

尋常高等学校、夜間商業と卒業の日がきた。新聞社に小林先生をたずねる。「お前なら初任給十三円取れるようにする」と聞く。当時米十五キロ約二円四、五十銭であり、母を助けられると思ったが、叔父からの援助もあり心配するな。母は大反対で役者も新聞社勤めも道楽者と受け止めている。堅気は手に職を付けることだと大津橋西外堀町の学生青年団服製造皆川商店従業員二十五名方に小僧に出される。その日、税務署調査で大変なところに出会う。親方をはじめ、全員小学校出で帳簿の整理を習っていない。



署員から後日の帳簿整備を次々と指示があるも対応ができそうにない様子に、「私なら少し簿記もでき、仕分計算ぐらいなら教えて下さい」と申し出る。みんなが不思議そうな顔で私を見る。署員は二、三質問してから「やってみるか」と、いろいろ注意して帰る。その後、実務のむつかしさは碁で大人を負かしたようなわけにはいかない。仕入先の会社に走り回り、三か月後どうにか格好がつき、夏が来た。

庄内川枇杷島橋の夢を見る。こづかいは月に金一円也。だまって家に帰る。母が心配する。父の病ますます進んでいる。子ども心に塾を開けば五、六円になる。

十日ほどたった日に仕入先の人から店の出納簿から八円不足している、丹羽が持っていったと評判だと聞かされ、隣の小沢さんに話すと、「泥棒にされてしまうぞ。秀ボウこい」と店に行く。税務署が来た時以上に店内が騒がしくなる。「秀ボウはがき大将だが親孝行で塾でも小さい子の面倒見もよく将来ある町内自慢の子だ、警察を入れてはっきりさせる」とどなる。警察と聞いて縮む時代だ。泣いて謝る、犯人もでた。一件落着。帰路につくおじさんに、「今度のことでよくわかったであろう、身勝手でだまって、しかもお金もたしかめず、そのために罪人をつくり、無責任と横着は世間では通らない、今後はやるべきことをやって堂々とでてこいと」諭され、増長気味の私は頭をぶんなぐられたような思いがした。

その後、親方から再三、帳簿もそのままで店に帰るように催促を受ける。庄内川遊泳も終り一ヶ月半ぶりに帰店する。月のこづかいがないしょで五円となる。外注職人、見積仕入先への注文事務増加で、小僧本来の掃除、仕事一切やらない。店内では生意気で横着でこんな小僧見たことがないと蔑視される。居心地が悪い。内緒事は何となくみんなが知るようになる。親方から秀は学校を出ているからと説明されるがますますいづらい。

さて、氏神東照宮の祭りをむかえる。長らく店をあけた私は留守番を引き受ける。休日の少ない店員たちは朝早くから衣服にアイロンでプレスして我勝ちに出ていく。最後の者は戸締りをして鍵は私が受け取る。その日の午後三時頃、近い所で火事だ火事だと大変な騒ぎ。外に出てびっくりした。店の工場だ。店の中で奥さんと主人の母と妹は、がたがた震えているだけ。私は主人の行き先へ連絡する。工場は全焼し、警察と消防署での調査結果は、アイロンの電源切り忘れと認定。早く全員そろって連絡せよと帰る。明くる日の朝刊に火災原因は店員のアイロン電源の切り忘れで失火と出た。店員たちは警察に泊められるのではと心配顔に私は実家近くの愛知新聞社小杉記者に電話したずねる。「落ち着いて正直に答えれば泊められることはない、ただし火災保険の件で少しうるさいよ」とのこと。私はさも得意げに親方をはじめみんなに伝える。さて、ほかに思わぬことが一つ残っていた。「今後、鍵を受け取るにあたっては内部をよく点検し、確認の上受け取ります」と私が始末書を取られて終ったことだ。

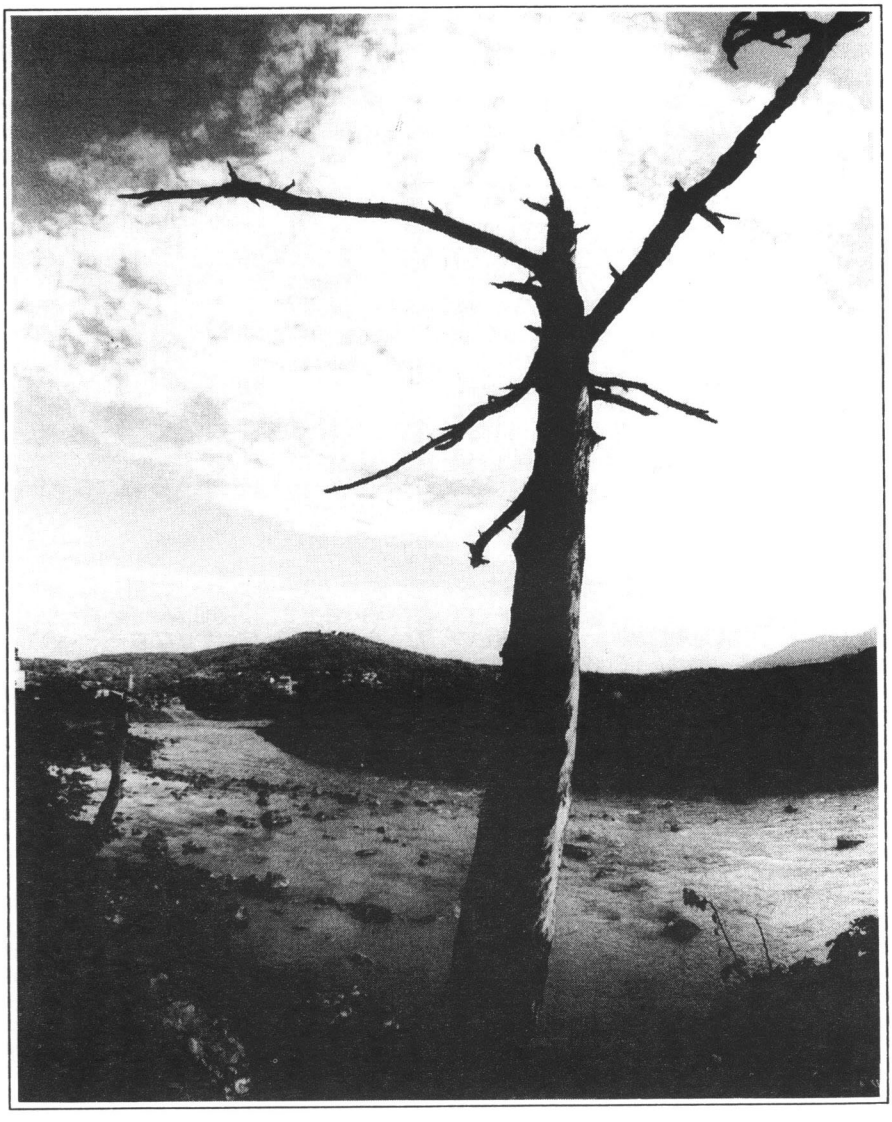
事件後、店内の空気が一変した。私を何事にもつけ「秀さ」「秀さ」と呼んでくれる。寂しかった私に兄弟子たちが良い友だちになりうきうきした毎日が続いた。

そんな頃、二・二六事件と青年団軍事教練の強化など世相は暗い方向に徐々に進んでくる。私は豆記者気取りで報道内容を説明する。手答えは少ない。昭和三年一月二十二日、長い病の父死去する。何の喜びなく苦労ばかりの母の大きな嘆きにひきかえ孝行息子とほめられる私は涙が出ず、肩の荷が一つ下りたような気がした。どうしてだ、悪い子ではずかしいと思った。

店に勤めて二年で給料八円と上がっているが、手に職をと望む縫製の腕は上がっていない。

「おまえは気味の悪い小僧だ」

ある日、海軍水兵服地を愛知一中師範学校育英商業制服指定海軍ヘル地（生地の名前）の大事な仕入先太田商店に出向くと、五名で碁が始まっている。つい手が出る。　相手は三級程度だ。勝負にならぬ。社長は私の遅くなることを店に了解を取ってくれた。手土産を戴いて店に帰ると親方が「おまえは気味の悪い小僧だ」といいながら機嫌は良い。その後太田商店からは仕入に特別便宜を計ってくれる。時々呼び出しがあるもメリットがあるので親方は何も言わない。碁を通じてだんだんと身近になった太田社長に生い立ち現在の



んと身近になった太田社長に生い立ち現在の状況を説明し将来進路の意見を聞く。君の店は良い裁断士がいない。通信教育で勉強し資格を取ること、さらに腕の良い土居下に住む職人で酒好きな後藤俊夫氏を紹介された。

給料が一升瓶に変わる。三年の歳月が流れ、資格を取得した。店では、変な役割が続いている。主人の妹かぎ様嫁ぎ先より二度出戻りの荷物引取り方、奥さんに頼まれて親方の芸者遊びで待合料理店を探し回りつれ帰る。何とも気の進まぬ役柄であったが、店員職人一同私に一目置くようだ。

昭和六年満州事変勃発し、軍国風吹き荒れ、号外の鈴音なり、世相騒然仕事どころではない。七年八月母校前津小学校で徴兵検査を受ける。同級生のなつかしい顔から「丹羽元気か」と声がかかる。特に仲良しだった飯田の顔が見えない。「どうした」と聞くと精神病院と知ってびっくりする。検査の結果乙種に決まり後日国民兵に編入される。商業学校乙種、通信教育、徴兵と成績全部乙種だ。思いと異なる。腹のそこから笑いがこみ上げてくる。校門を出て大きな声で「乙だ。」友だちは、「丹羽が乙を取った、ざまあ見ろ」と大いに笑う。

さて、この頃大日本帝国、八紘一宇の文字が、声が生活の中に深く感じてきた。店は青年団服でますます景気が良い。それに並行して親方が月に十日は芸者遊びで店に帰らぬ。夫婦げんかの絶え間がない。二三日がすぎる。金庫からお金をつかんで出ていく。仲の良かった友だちが満州で戦死と伝わり、がき大将だんだんと腹が立ってきた。みんなを前にしてばかばかしい、「この店は芸者の線香代を稼ぐため働かせるのか」と親方に鋭くつめよると、「おれもお前も養子で境遇が似ているから随分と目をかけてきたが、何となく気味の悪いやつと思っていた。増長して使用人の分際で主人に対するそれが態度か。出ていけ」と首になるが、首の皮が一枚残っていた。後日奥さんが尋ねてきた。「謝ることないよ」と母に。しかし「御主人様に申し訳ない」とさかんにわびる。話を聞くと太田社長が「皆川君、私が知るかぎりでは裁断に外注の手配、外交、今度のことでは帳簿を預かる者として我慢ができなかったと思う。丹羽が帰らぬなら取り引きを停止する」と申し渡されて親方は反省しているから、ぜひ店に戻ることを懇願されて、帰店して驚いた。食事は親方といっしょでみんなに悪い気がする。さらに給料が二十二円が三十五円支給され、びっくりした。親方が「秀や今夜は早く帰る」「それは奥さんに言って下さい。」おやじさん、にっこり笑って出かけていく。今後おやじさんと呼ぶことにした。太田社長の意

見がよほど利いたと見える。居心地の良さでルンルン気分が続くが、この三、四年、官憲による治安維持強化と称し、共産党狩りが行なわれる。昭和十一年、二・二六事件を期にますます強まっていく世の中、何となく暗雲低迷の度が高まっていた。

私は店の順調を見て店を出ることにした。おやじから「よく勤めてくれた」と言葉を聞いて、太田社長にあいさつに行く。「それはよかった、君に頼みがある、東京新宿白木屋へ当社の社員として六か月出向してくれ、帰名したら、君に合う仕事を作っておく」とのこと。打ち合わせを済ませ、二十日ほどで上京した。在京中にひょんなことから海軍中佐佐悦さんに出会い、横須賀の官舎に時々出入りした。後日私の人生に大きなつながりになるとは知るよしもなかった。

任務終って帰名した。社長は「織物も統制になる、今のうちに実績を残すために洋反物のブローカーをしなさい。商品はいくらでも貸す。」さらに近藤紡、豊島その他有力な会社を紹介し保証までしてくれた。商売は順調に進み、妻を娶り昭和十三年中区東陽町（現新栄一丁目）に店舗を構えたが、母は嫁に息子を取られたとばかりにたいへん仲が悪く、小林町を動かない。二軒世帯となりいかな私もまいった。

「米英鬼畜を殺せ」

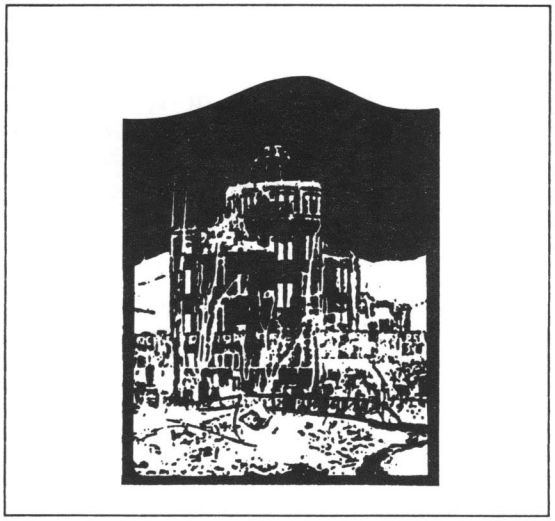
ますます続く。

昭和十五年日独伊軍事同盟となり大きな戦争への道を走り出す。明日の不安がつきまとう私に昭和十六年十一月長男義兼の誕生を見て喜びにしたるもつかの間、十二月八日真珠湾奇襲の報道は全国に大歓声となって上がる。偽りの神国八紘一宇と徹底的に教育された国民の大半は疑いもなく悲惨で苦しい泥沼の道へ突き出されていった。「米英鬼畜を殺せ」と婦女子に竹槍を、防空壕掘りと防空訓練が盛んに強制され、新聞紙上には連日我が皇軍は中国、東南アジアで快進撃を続け戦果拡大をしている。国内は反戦分子非国民共産党員大量検挙とある。司直の理不尽さに戦勝に酔う国民は関心が薄い。大本営発表はいつも敵に大損害を与え撃退我が方軽微である。軍神肉弾三勇士稲垣兵曹長と壮絶な報が伝わる。昭和十八年第一回名古屋空襲を受ける。ミッドウェイ海戦をさかいに負戦は歴然としてきた。

十九年私は召集され呉鎮入団した。十日ほどして脱走兵が出た。捜査状況を衛兵伍長室へ報告に行き部屋を出る。出会い頭に参謀肩章を吊った将校四名だ。慌てて「頭、中」の敬礼と同時に「丹羽君と違うか」、私は顔を見る余裕はない。「丹羽であります」と答えて歩調をとってそのまま行進し班に帰る。私の胸には丹羽二水と階級布がついている。あの人は佐悦中佐だ。三十分後、「丹羽二水副官部へ来たれ」と下士官室に電話だ、班長福田一曹の案内で副官部へ。「今ぼくは大竹潜水学校にいる、君が来るよう手配しておく」。三日後、大竹に転勤した。私の任務は水兵とは思えぬ内容で、公用の腕章を付け校門出入りはフリーパス将校官舎家族サービス係、第一分隊では茶坊主とニックネームが付いている。六月二男盛（あつし）誕生。サイパン、グァムも落ち、四国沖からの艦載機攻撃は熾烈で、一度に千機以上も数える。呉港には損傷係留中の戦艦日向、扶桑はグラマン攻撃になすがままである。世界の大和は倉橋島で修理を急いでいる。蝿がたかるようなグラマンを次から次へと打ち落す、さすが。大和を目前見る。隊形を変えて執拗に責めるがびくともしない。その後出港したが、戦線からは我が軍撤退玉砕大和自沈と悲痛な無電頻り。副官室将校の顔がさえない。副官室には準士官以下出入りを禁ずると規定されている。兵長の私が出入りを許されていたことは終戦にてわかった。

「この責任はだれがとるのか」

二十年八月六日、魔の快晴の朝を迎えた。ばかに静かな朝だ。マグネットのような閃光が走り、数秒後、轟音天を揺るがす。兵舎を飛び出す、きのこ雲が東の空に。世界で日本が初めて味わう残忍な広島原爆投下であった。三日後、広島へ上陸用舟艇で救援に。大田川を遡航、原爆ドーム前に上陸して慄然とした。体が震え血が引いていく。川一杯の水死体、足を出す場所もない死傷者で手の付けようがない。熱風で全身焼けただれ、手足をもがれ黒い血で染まり真夏の強い日差しに地底からのうめき声、足下から見渡すかぎりの膨れ上がった死者。死臭漂う崩壊した瓦礫の



下から立ち上るくすぶり鬼気迫る情景はこの世のものとは思えぬ。広島連隊、県、市は壊滅し、放置された幾十万の住民を目前に戦争の残虐さに胸を締めつけられた。数日後さらに原爆が長崎に投下され十数万の死傷者が出る。まさに鬼畜の仕業である。ここまで追い込んだ軍国日本は大きく罪深いものである。国の内外に千数百万の死傷者を出し、残された住民に長い苦しみと悲しみを残した。

大東亜戦争終末の十五日を迎えた。ラジオの天皇の声を私は空しく聞いた。国民に世界に「この責任はだれが取るのか」と、ふと反戦分子非国民と投獄されても、節を曲げず叫び続けた人々の勇気と信念に心から敬意の念にかられた。十八日となって、私の任務がわかる。スピーカーで「丹羽兵長来たれ」士官室に入室して驚いた。将校が少ない、佐官級がほとんどいない。某大尉からいろいろの指示と書類を渡され、任務終了と同時に復員させる。士官者家族への連絡と校内での重要かつ適切な手配を済ませてますます驚いた。海軍上層部はこのことあるを早々と完全すみやかに逐行の準備されていたこと。さらにこの任務はのちのち上層部に責任が及ばないよう何もわからず刺激を与えず下級者（すなわち私である）に、内容、命令者、私事の依頼者など、今となっては各人の名誉のため明かすことを差し控える。復員をした。空襲で焼け出されて家族は疎開している。官舎に入り家族を呼び寄せて大竹町の生活となった。復員で急増人工二万七千。紙面にて進駐軍上陸と報道、実際にはオーストリア占領軍が上がってきた。強盗、強姦、復員者とトラブルの絶え間がない。取り締まりは自治警察でもっぱら物品の闇取引摘発ぐらいで治安維持はできない。

自信、過信、慢心

占領とは無法地帯である。我が軍の戦地での話を思い出す。働く場と食べる物がない。パンパンの姿がちらほら目につく。今後私が住む町だ。町行政は無力化している。まず仕事場を作る。兵舎とミシン、モーター必要器具類学校内は私の手の内であり、払い下げを受ける。職業指導作業場設立、洋裁衣服更生と私の本業を活す。婦女子わんさと押しかけ、評判は上々。二十二年の正月、官舎住民代表天本君の来訪は、「丹羽君町会議員選挙に立ってくれ。田舎のことでむつかしいが」と申し込まれ、がき大将その気になって立ち上がる。「知名度を広めるため新聞発行したいが君受けてくれるか」「よかろう」ということになりちゃちな山陽新報を発行し運動に入り見事当選する。妻の負担が増える中で、八月長女玲子が誕生した。母と妻の仲悪は続いている。妻は三人の養育に手不足と大竹町を知るため職場のN女史に助けを求めた。意気揚々と議場へ。いささか自信過信慢心気味だ。ほかの議員に悪い印象を与えたと思う。親類縁者につながり大竹の土地柄、気風に、

私が大都会名古屋での振る舞いから出る発想の提言は馴染まず、「よそ者が何を言うか」と一蹴される。提議のまずさにへそを噛む思い。議員生活四年、成果とすれば授産所建設ただ一つ。しいて言えば隣の小方村と大竹町を合併、大竹市政提言が継続審議されたぐらい。任期三か月前となった日、天本君から次期へむけての運動方針の話が持ち出された。「君をはじめ、大竹町民に対し私は深く懺悔して謝る。自分の家庭すら満足にできなかった私が臆面もなく町政に参加した。さらに議会での孤立化の淋しさをN女史に求め、家族に淋しさ悲しさを、父親として議会人としても失格者である。立候補届け日、新報紙面で辞退の顛末をこっぴどく掲載してくれることが最大の友情だ。その日に大竹を出る。N女史の名は伏せてくれ」「丹羽君潜水学校時代から良い友だちだったよ」「違うな悪い友で苦労をかけた。感謝している。」さてその日大竹を後に車中で最後の山陽新報の記事を手に「天本しっかり書いてくれた」と、いいしれぬ思いを胸に名古屋へと向かった。二十六年春、自信から慢心、そして欲望と後悔で大竹町の幕は下りた。

丹羽一商店

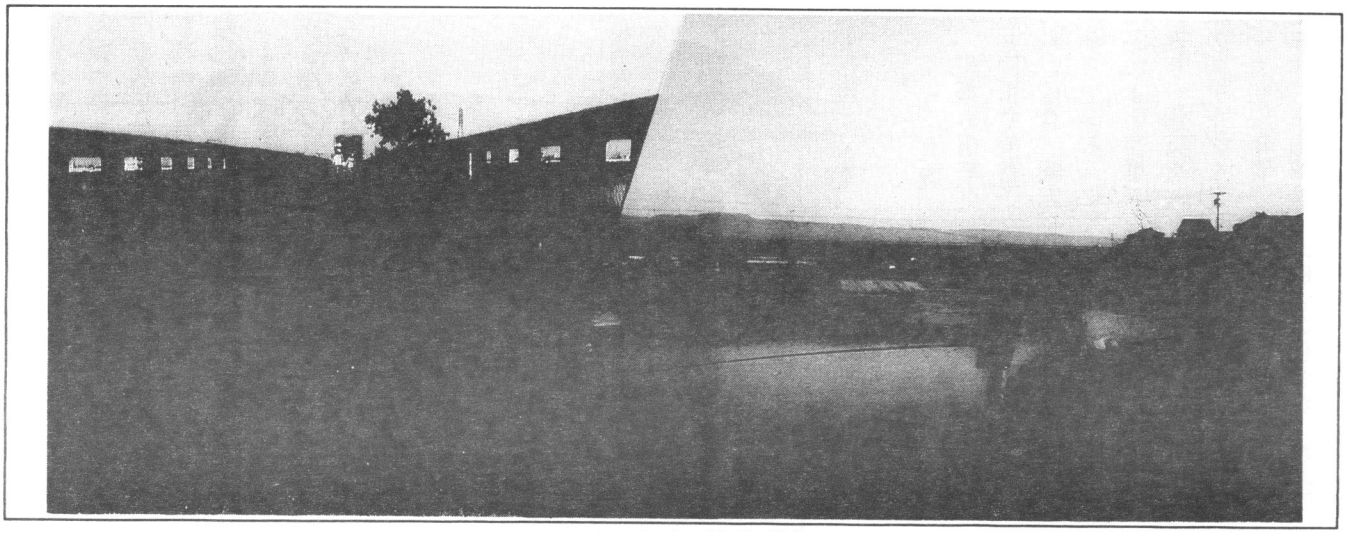
懐かしい名古屋だ。中川区西日置は戦災で焼けていない。親友丹下一男君を訪ねた。「丹羽うまくやっているそうでないか」といわれ赤面し、委細を話す。「君のことだ、隠居家を空ける、住んでゆっくり考えよ」とその日から生活の準備をしてくれた。友だちの大切さが身に沁みる。住んだ隣が奥村鉄三宅である、因縁といえよう。

大竹町から家族を呼び寄せる。寝具会に進出すべく有力問屋の製品下請けを。手に職をと頑こな母に感謝しつつ。母も郷里に帰ったせいかいくらか和らいでいる。丹下一家は兄弟以上に暖かく援助してくれる。家族団らんの日が続く。

昭和三十年暮れ、亭主に泣かされ、子どもの私とともに苦労し恵まれなかった母が生涯の最後に家内の名を呼び静かにやさしい顔で永眠した。父の時に出なかった涙がどおっと堰を切った。

社会党山崎常吉は戦争中軍司政官でパージにかかっていたが解除になり立候補する。協力方を夫婦揃って懇願されるが、大竹士官室が頭をよぎる。嫌な感じだ。「君も中村区で市会に立ってくれ」私は懲りている、嫌なこった。連日の懇願に妻が参った。「おとうさん黒子ならどう」がき大将が引き受ける。パージにより赤松勇、春日一幸に労働界を二つに分けており、さらに五人区へ社会党三名立候補である。三千不足次点で破れる。二回手伝うが、同じく骨肉争いの醜さに弾圧の中、反戦初志貫徹した共産党が終戦後いちはやく国民に好かれる日本共産党を結成したことを思い出させた。期待と興味が広がる。

伊勢湾台風の三十四年、丹下一家の祝福を受け国道21号線沿い西区鷹匠町に有限会社丹羽一商店文化カバー本舗を華々しく開店し、税対策に民主商工会に入会、党員の献身的な仕事ぶりに驚嘆した。長男大学、次男高校、



長女中学だ。親類は知らぬ間にできる。学生生活を楽しく良い友を何人持つかが自己の価値観だ。

会社伊藤万、滝兵、堀商店、泉州田中良商店と有力仕入先で順調に進んできたが、伊藤万に寝具部が新設された時点から会社は赤字続きに変わった。私の経営未熟かわからん。しかし主力製品納入が著しく減るたびに値上がりする。先方は黒字当方は赤字、当然だ。社員も増えている。何とかせねばと考えている矢先に、共産党加藤進氏の選挙となってポスターを社内外にはりチラシをまき民商の人人とともに活発な運動に入った。これは自ら求めた商売に致命傷だ。がき大将にもどって生き生きしている私に妻から「あなたの気性では、同業者から商人らしくない、無茶だ」の声にこれでタイミングを見て整理の決心が決まった。着々と準備を進める。商社筋の意表を突いて整理に入る。百万円以下支払残り十七社は支払いを済ませて、支払い額三桁以上五商社と話を進めた。私の自宅は伊藤万に担保入りしている。

信用調査紙面に『有限会社丹羽一商店、内整理に入り、三光化成社連鎖作用起こるか』と載る。債権者会議の中へ商社と深い関係を持つ我社の有力な得意先から盛んに債権の声援が上がる。更に次男の友人で、二十二才で貿易商を営む栗木君は五百万円を、私の友熊沢氏は田地田畑を担保に入れて、「丹羽一商店の主張が通り再建するなら、金は丹羽君に渡す」倒産目前の会社にこの情景は始めてと会議は伊藤万と堀商店に移され、堀商店全額肩代り伊藤万より堀商店を通し丹羽主力クレラ製品を数量市況適正ネットにて要求に応じ納品する。丹羽一は負債を三ヶ年以内に完済する。

昭和四十四年一月二十六日と決定。二月一日付けで次男盛を代表とし、道義上私は後見に黒子の立場を取る。良い社員が戻り我が家族となり、団結と必死の経営で二年八ヶ月で完済ができた。社員と手を取りあって喜び感謝した。堀社長は「丹羽君親子とも良い友を持って今時にない清々しい光景と君の強い姿勢につい出しゃばったが、よくやった、良かった。」

堀社長は豊島と大変密接な間柄を知って太田社長を思い出した。

住民本位で市民参加

この苦労で大きく成長し、各方面から将来を嘱望された次男盛が四十七年二月九日病死、二十七才の若さで世を去った。目の前が真っ暗だ。落胆は極に達した。何事も切り開く、強いお父さんと言われたことを思い出した。せがれはよい日の目も見ず、せめて五十まで生きたかったであろう。二十三年を私がかわりにと気を取り直しても深く滅入る。自己本位に生きてきたが、今後社会性を睨み、黒子でがき大将の本領を発揮し生きてやる。せがれ見てくれ、父さん六十人生の折り返しだ。

一九七二年暮れ、一大旋風が舞い上がった。至難の選挙区一区へ殴り込んだ共産党革新共同田中美智子女史、童顔の優しさに秘められた信念、闘志、身に備わる華やかさ、全市から上がる「ミッチ、ミッチ」の声、あれよあれよと当選だ。落胆のそこから黒子は生き返り、元気をとりもどし元気に立ち上がり次のステップを考える余裕が沸いてきた。

一九七三年春、名古屋市政に一大変化をもたらす。本山革新市政樹立の狼煙が上がる。私はミッチ旋風の余勢を駆って魚が水を得た

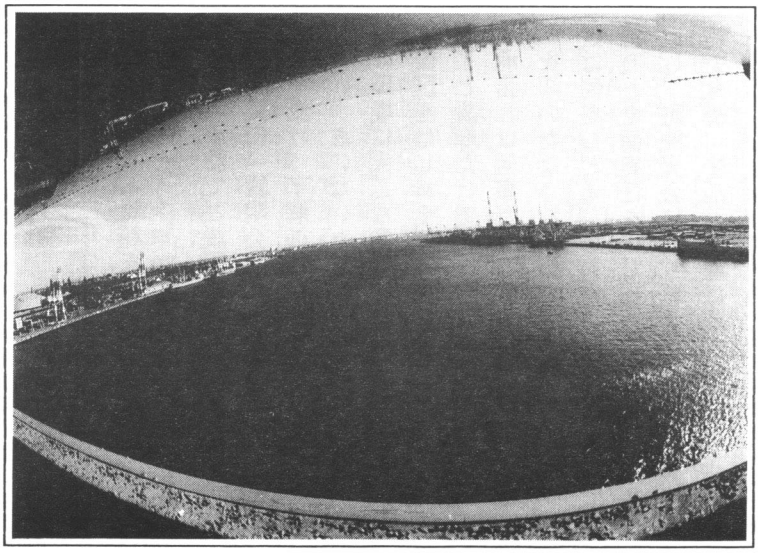
ごとく泳ぎまわる。我が陣営は政党勢力三分の一で社会、共産と各階層に革新市政を望む市民の団結で熾烈なたたかいのうえ住民本位で市民参加の本山革新市政が誕生した。気を良くしている。

ふと「住民本位で市民参加の行政に結びつけて革新の真価を問う仕事はないか。」あっ

もう黙っちゃおれぬ

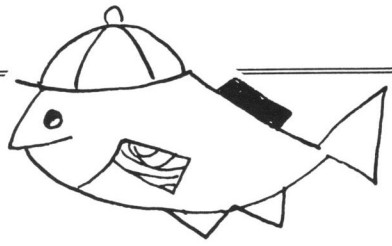
さて、どこから手をつけようか、この川に楽しい思い出と深い関わりを持ち愛する人々を誘う。近くの喫茶店で時々出会う宮田君に話しかける。「ぼくはここで生れ育ち、庄内川は遊び場であった」という。理解は早い。賛成第一号。この日から親子の年令差で野球のバッテリーよろしく老人の剛球に戸惑いながらも良き保守ぶりを発揮する。運動の準備は川をよく知ることだと、庄内川の歴史、性格、流域住民の生活とのかかわり、地場産業、流域市町村の対応を、川の原点から受け皿の名古屋港まで九六キロを釣り名手の宮田君と釣り竿をかつぎ、楽しみながら六ヶ月かけ調査を終り運動進行の組み立てをする。革新支持の同志に呼びかけ、二十数名の集団となった。スポンサーなし、行政、政党の紐もなし、純粋な住民運動のがき大将先頭に立ち、事務局長に宮田を据え、組織として活動に入る。一九七四年十二月暮会員年会費千二百円と決め、長い道のりへテープが切られた。社会にわれわれの存在を大きく知らすにどんな手段があるか。毎日新聞社紙面に川のシリーズが目に留まり、看板『川の汚れは心の汚れ』百本を立て、各市町村住民にアピールしたいと申し出た。十二月二十五日世話人会の模様が写真入りで「もう黙っておれぬと矢田・庄内川をきれいにする会を結成し立ち上がる」の見出しで大々的に報道された。大旋風が巻き起こり電話のベル後をたたない。妻応対に悲鳴を上げる。入会申込みだ。各社記者訪問頻り、会員ふるい立つ、もう一歩も後へ引けぬ。

た。青少年の頃、魚を掴み泳ぎ楽しかった庄内川を目の前に私は生活している。廃液、悪臭、ヘドロ、汚物投棄で痩せ衰え、魚も住めぬ死の川となり見捨てられた。こんなになった責任は政府か企業か、住民も見て見ぬふりで次代の青少年にわたせるか、われわれ一人ひとりの責任だ。



次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会

ここできれいにする会の性格と、さまざまな住民運動の違いを説明しておきたい。単純に住民運動社会を分析すると、自然環境破壊防止を唱えて、山林伐採、ダム建設、埋め立てによる動植物消滅、宅地開発など自然破壊を懸念しての運動体であり、次に新幹線、高速道路の騒音に悩み、排気ガスの被害拡大防止の建設反対など、過去に有毒煤煙空気汚染で病魔に侵され、有毒物質流出でイタイイタイ病にカネミ訴訟と何十年の苦しみを訴え、国と企業を相手に保証を求め勝利するも、も



との健康はもどらぬ。むなしいかぎりだ。将来への大きな警鐘にと、病苦を押しての運動である。われわれは、悪い社会を生む、歪んだ経済主導型の社会へ一抹の清涼剤として『次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会づくり』を根本とした運動である。見捨てられた川を思い出させる方法は、悪臭とヘドロの元凶王子製紙の廃液放出の場で食べられない魚釣り大会を開催とマスコミに売り込む。このタイトルニュース性はマスコミ好みと自信だ。各社スポーツ社まで、一斉報道にNHKを始め公、民放テレビ総出動で大会を迎えた。水分橋周辺は親子連れや見物人千名を越えている。釣り参加者三百五、六十名、大半が子どもである。これだと注目した。はじめて出合った会員から会長びっくりしたなもと声がかかる。宮田は安全対策に場内整理にと、また他の者には意味のわからぬ「帰ってきた、帰ってきた」と呟き、子どもの頃を思い出し、私の手を握る。子どもたちは、背の曲がった魚、片目の魚、不気味な臭いの魚に驚きながらも歓声を上げている。人々の思いがどう響いたことか。大会は大成功で終了した。この日から人々は王子の廃液、ヘドロの行方に関心が集まる。

さて、宮田と二人で調査にでかけた。午前零時、満水期の寒い真夜中に王子廃液放出口に立つ。零時となる。すごい勢いで不気味な悪臭は鼻を突き、吐き気さえ覚える。硫化水素の発生であり、白く泡立ち何とも言えぬ異様さで廃液が放出される。午前五時、ぴたりと停止。人家の寝静まりを見て悪どい放出で心の汚れだ。時間差で撮った写真に説明をつけ大衆浴場など人の集まるところに展示した。後日起こったエピソードを紹介しよう。王子勤務の親子の会話である。

「お父さん、会社の水はヘドロになるか」

父「うん、魚がおかしくなってるよ、うん」

「ぼくたち寝ると流すんだって」

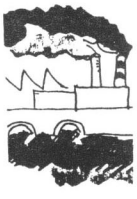
「うん」

「臭いのもそうなの」

「うん」

「悪いことやるんだね、どうするの」

父親はまいった。以上の話は直接聞いたもので、子どもの純粋さに心打たれた。きれいにする会規約に、「十才より十七才までの少年を準会員とす、会費免除」とある。



守山下水処理場建設

そんな時、会の本拠地川西地区に大きな問題が投げこまれた。守山下水処理場建設の説明会であった。川西六町内会、世帯数約五百戸である。集会場に一同が参加した。このことありと予期していた私は、当時評判の良い鎌倉下水処理場の資料を手に参加した。正面の行政側に自民党有力市会議員が参加している。この議員に二年ほど前に町内役員会席上で建設に関する資料を要求しておいた。そして説明は予算三十七億で、建設業者指名、市議会の承認でと説明が続く。私は大声で六町内会長に「説明会前に資料を手にしたか、説明を受け、了解の上集会を開いたか」と問う。いっさいないと答えは返ってきた。「生活に環境に大きな問題を持っている今、東京太田区をはじめ全国で問題の工事を、手続き完了と説明だけで地域住民の了解もなく、事後承諾とは何事だ」と叫ぶ。場内騒然、蜂の巣を叩いたような情景だ。場内から、町内会長は何をしとる、の声が。会長六人は私に収拾方と全面責任を申し出た。私は説明会を中止し、町民大会に切り替え、行政も議員も信頼できぬ、生活と財産は我々の団結で守り、市長局長と直接交渉する。そして、守山下水

会員意識を高めるため、シンボルバッヂを作成し運動資金の一部にと、日本福祉大学教授土方康夫先生にお願いした。魚が野球帽をかむるユニークなバッヂができ上がり、準会員は大喜び。巷には、鯛焼君の歌声が流れていた。一年足らずで千個のバッヂが準会員の胸に。さらに今日までに一万二千個が輝いている。「川の汚れは心の汚れ」の看板は会員の手で矢田川、庄内川、堀川に着々と立てられる。矢田川に第二回釣り大会の開催で釣りブームが起きた。

処理場等監視委員会を結成し、委員長となって直接交渉に入る。

一、地域住民了解のない現時点は計画全面白紙に戻すこと。

二、問題解決の成否は住民本位で市民参加、本山市政の姿勢を問われることになる。

三、この取り扱いのいかんは市民連帯と主権者の心を失い市政に関心をなくす。

「三点の申し入れよくわかりました。担当者に申し入れをよく把握させ地域住民の方々の理解を得るよう努力いたします。必要があればいつでも来て下さい」と聞いて席を立つ。

秘書に呼び止められ、市長は議会で、矢田・庄内川をきれいにする会、住民運動がおきました、市としては大変大切にしなければなりませんと発言されている。何かお手伝いはありませんかといわれた。早速大会に市長表彰状と一般と少年にカップを注文した。今に至るも恒例となっている。「川の汚れは心の汚れ」の看板立ては矢田川を遡上し瀬戸川にいたり、瀬戸市長の手で立てられ、併せて各陶器業者排水口にそれぞれ名称がつけられた。水の濁りが薄くなった百本目大看板は本山市長の手で立てられた。一年数カ月の運動は各方面にわたり進行している。各企業よりの化学物質排出により魚が浮く事件が毎々あった。会員中の科学者、小川氏が迅速に行政と連絡をとり、適切な行政指導が行なわれた。

準会員が自主的に四百名で川の清掃、住民と宝探しを楽しみ合成洗剤の害を訴える。川の浄化に大声を出そうとテーマソング川の歌発表。県民に夢をと県に九年ぶりの鮎放流をさせ、成長追跡調査の中で天然鮎発見。一般住民は川の状態を知るには行政学者の科学的データーの発表より、川に住む動植物の存在を注目する。したがって鮎の生息は清流のバロメーターであり、追跡調査は宮田が頑固に今日も続けている。調査中思いもしなかったシラス（うなぎの稚魚）の遡上を発見する。

鮎救出大作戦

鮎追跡中一大発見をした。それは矢田川と庄内川の合流点庄内橋下まで毎年稚鮎が遡上し七、八センチで死滅していることだ。原因は王子排液で生活の糧である石コケを食めず餌不足で遡上できないとわかり、庄内川上流

土岐漁協の応援で鮎救出作戦を発表。六月一日以前の魚族移動を禁ずとある時は五月の違反承知の行動である。県の摘発を期待したが不発。庄内橋十五日早朝を迎えた。黒山の人と各新聞社ＮＨＫをはじめテレビ陣総出動の中を採取された鮎が上流土岐川へと急送される。バンザイの大声が出る。

さて、下水処理場の件はどうかといえば、工事現場となる。川西地域住民は工事で狭い道路を掘れば家が心配、商売ができず。処理場の臭い匂いがあるから、土地の値段が下がる。川西地区は矢田川と庄内川に挟まれ川底より低く、今でも小雨が降っただけで浸水している。さらに降水量五十ミリに対応し、十七万トンの処理とは不安であり、実力行使阻止反対だ。工事に不安がない受益者の中から「委員長が共産党だからできるものもできせん」との声が広がっている。とうとう共産党員にされる始末である。行政側は住民の理解をと懸命な努力が続いている。きれいにする会会員は住民排水のたれ流しは問題で、すべての不安を取り除く方法があれば市民連帯の立場で考えるべきだ。監視委員会役員会三十七回の中で言い尽されたのを見て、私は切り札を出す。行政も議員も信頼できぬ、利害関

係のないその道の権威である学者の意見書を取って考慮してはと、住民に計り行政に伝え、地域環境すべての資料を添えて河川工法名大西畑教授、下水工法岐大富永教授の意見書を取る。

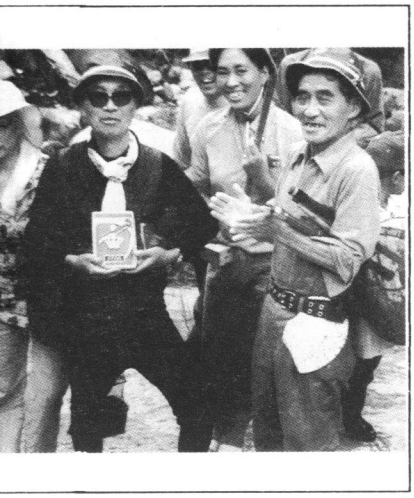
地形的に建物は半地下的に、屋上は避難所に、ヘリー発着可能に、還元施設に集会場、演芸場、子供の水場、テニス・ゲートボール場。道路は掘らずにシールド工法で臭気防止。大雨浸水完璧工事施工に、工事中の安全対策、各家の現在と将来への保証確認を条件に行政と協定を結ぶと提案し承認を得た。前記条件に細目を加え、下水道局長と私とで協定書を取り交した。さらに各工事会社にも騒音塵埃工事時間他、細目に渡り、違反すれば工事中止協定を結び、住民監視で行政企業三位一体で建設に入った。予算は大きく膨らみ、住民も工事中の不便を辛抱して完成した。

明るく 楽しく 美しく

住民は団結の力の強さを知り主権者意識がおおいに高まり、きれいにする会のよい経験になった。企業の川に対する行政指導が次々と打たれていく。庄内橋に二十四時間自動水質調査機も設置される。上流土岐川支流肥田川に土岐川魚協と地域住民との親睦のためアマゴ五千匹放流、会の趣旨に賛同する釣りクラブ「山彦会」を発足させる。

「釣り大会」も『食べられない魚釣り』、『食べられるかもしれない魚釣り大会』からおまけがついた試食会、なかなか食べてくれない。ジュースをつけて『庄内川まつり』『いつかは食べられる魚釣り大会』『鮎帰れ庄内川魚釣り大会』『鮎の住む庄内川魚釣り大会』と市民の関心はタイトルごとに高まっていく。釣りブームはますます白熱化している。釣具商組合主催フィッシングショーで川池をきれいにして手近なところによい釣り場を作りましょうと呼びかけ、名古屋市には池を整備して開放を申し出た。次々と釣り場が開かれていった。釣具メーカーには魚の放流を促す。名古屋釣商組合、毎年全市の川池に放流、釣師に喜ばれている。

ここで会運営の進め方に触れてみたい。水の問題は永遠であり、次代の青少年にという限り、気長にとりくまねばならない。会員の方々に政党支持の違いを乗り越えて水が汚れ切るまで無関心でいた私たちは政治と社会の情勢、きれいな水に戻し暖かい社会を作り子孫に渡す責任がある。息の長い運動の位置付けは勤めと生活に影響させず、家族ぐるみで楽しめるイベントを考えて進めます。以上の趣旨に忠実で尊敬している人格者を紹介する。兄とも思う親友の科学者小川博氏である。行事に参加する人々の氏名人数は予想できない。それは全員の勤めや生活が千差万別であるからだが、ふたを明けてみると不思議と支障しない参加になっている。小川氏の顔は必ず見受けられる。



楽しく明るい社会作りを列記する。市に要請し王子休業の年末から正月の清水を堀川に導入（三百六十年ぶり）桜の銀行樹立、入学卒業就職結婚出生記念植樹。舟で名港見学。東谷山フルーツパークと釣池見学。人形劇公演。水問題映写会。水分緑地愛護会設立記念ソフトボール大会。観桜会フォークダンス。八丁トンボ見学。水生生物調査は水質のバロ

メーターになり時々おこなわれている。以上は一例を挙げた矢田・庄内川をきれいにする

よっしゃやるぞ

一九八五年十月二十八日釣り大会二日前悲しい報が入る。尊敬信頼の小川氏急死である。来春に舟、イカダなどで庄内川下りを二人で計画、四月二十九日にSLが一日一千万円の赤字を出して半田から木曽川へ走るそうだ。私ら四月二十七日に挙行してSLを食ってやろう、老人パワーを見せて安心して渡せる宮田を先頭に若い人たちへバトンタッチに花道を作ろう、二人は楽しく話し合ったばかりだ。両手をもがれた思いで小川邸に急行し、涙を押え言葉が出ない。奥さんから話しだされた。「主人から矢田・庄内川をよく聞きましたが軽い返事をしていました。新聞で大きく主人の訃報が紙面で伝えられ、もっとよく聞いて上げていたらと思います。また少し気むずかしい顔の時に丹羽さんから電話ですよと伝えますと、生き生きしていそいそと出かけて行きました。主人はしやわせ者でした」と聞いて、涙、涙。

よっしゃやるぞ、見て下さい。「宮田君、川下り企画準備は私一人でやる」心の中で（小川さんと二人だ）君は十六キロを安全点検、当日会員の役割配備、挙行、会場、総指揮を取る。いつもながらツーといえばカーである。私は各新聞社、各関係行政諸団体、指導を受けた各位と幅広く協力、要請をする。気持ちの良い答えが帰ってくる。日頃の付き合いの大切さをつくづく思った。マスコミは舟の数、そんなことわかるはずがない、四、会の行事、すべてを各新聞社およびテレビ放送されている。

五十艘と法螺をふき、報道次第と答えた。記事の出る度に申し込みがあり、四十五艘となって四月二十七日を迎えた。川の周辺は人人で埋まり、物売りまで出ている。休日返上で名古屋市職労、名古屋港管理組合、安藤巌事務所の方々が交通整理に、場内安全対策と手際よく見事に対応されている。川に目を移す、趣向を凝らした舟四十五艘今か今かと待ち構える壮観である。会員の準備は宮田の指揮で一糸の乱れもない。革新勢力団結の輪は広く大きく十六キロを包みこみ、川の心は

われわれは加害者だ

最後に憎まれ口を一言したい。私たちが被害者意識で立った運動が社会情勢の変化にともない、加害者の道を一歩一歩進みつつある現状を認識せねばならぬ。その一例に王子製紙の現状と住民生活排水を比較検討参考に供する。王子は従来原料のチップを薬品で溶解、その際有毒で悪臭、硫化水素を出し、ヘドロにもなっていた。世界貿易の影響によりカナダから半製品を輸入することで、国の水に対する基準、行政指導、われわれの運動による牽制に半減しているが、きれいな水を十七万トン汲み上げて汚していることに変りはない。科学薬品を使用する限り、すなわち最

一気に溶けこんで行く。一方、新聞テレビ社総出動でヘリ頭上を二機舞っている。いやが上にも盛り上がりを見せる。本山前市長より祝の言葉を戴き、小川さんの遺影を抱き、舟上の人となる。風船を上げ花火の合図で陸からも舟からも大歓声の中、舟は下っていく。小川さん、見たか聞いたか、事故のないよう守って下さい。いろいろな話題を生み、たくさんの愉快なエピソードを残し無事大成功で終った。関係各位の献身的な協力に深く深く御礼申し上げる。その夕方にNHKを始め各テレビ局ニュース番組のトップである。翌朝新聞紙上は各社大々的に載り、中には半面そっくり。小川さんSLを食ったぞと大声で叫ぶがき大将最良の花道ができあがった。

悪への想定もあり監視の目が離せない。

では一方、水に恵まれる名古屋市民は、合成洗剤、油など問題点の生活排水に深い関心を持っているとはいいがたく、名古屋水道労組の呼び掛けに呼応し、懸命に運動に立ち上がった団体も目に付き、敬意を表するが、全市的視野では一部にすぎない。現在の状況で推移すれば、五、六年先は加害者に立たされよう。

水は世界の水であり、賢明な二百二十万の市民が一斉に立ち上がった時、王子にも大きく注文をつけられ、庄内川は鮎の楽園となり、伊勢湾の赤潮も解消する。私の夢でしょうか。

『社会と川の汚れは心の汚れ』

生前、会に没頭する夫を顧みて

小川　くに

大正元年に茨城県のさかうべ村に生まれました。兄弟は七人で私は六女です。女中が何人もいる大きな家で大地主でした。

恵まれていて、上の女学校まで行かせてもらって、物質的には何も苦労がありませんでした。

私とはいとこにあたる主人と結婚して、東京に出てきて、主人は平塚の海軍の火薬長になりました。貧乏なところへきたな、覚悟しなきゃと思いまして一生懸命働きました。

海軍工廠で爆弾を作っている時に終戦をむかえました。終戦になって茨城の水戸へ一緒にもどったんです。貧乏のどん底になり、土方までやったんです。それまで土方やってる人を見て、土の上に寝っころがってなんて人だろうと思っていたのが、やってみて、はじめてその開放感がわかりましたね。

食べる物も着る物もなく、お産も納屋の中でやるという状態でした。五人の子どもをかかえて八百屋なんかもやってがんばっていましたが、どうしても良くならないし、茨城にいては仕事はないし、主人みたいな人は自分を宣伝して就職するということのできない人でしたから、八百屋なんかして苦労に苦労を重ねたのですがやっぱり生活できなかったんです。そこで海軍の人を頼って名古屋へ来たんです。社宅に入って旭精機に勤めました。これは海軍の火薬のことをやっていたという主人のもとの仕事ですからやっと安定しました。四〇才ぐらいの頃でした。主人は読書家であり研究家でした。

●小川さんが「矢田・庄内川をきれいにする会」に入ったことをお聞きになったのはいつごろですか。

とにかくうれしそうでしたね。矢田川の丹羽さんの話を聞くといって、うれしそうにせっせせっせと女の人のところへ通うみたいに行きましたね。私は踊りをやっていまして、私には私の生きる道がありました。家のことをほっぽりだしてちょっとやく時もあったけれど、あれだけ一生懸命なれるものがあるというのは良いことだと思いますよ。きっと丹羽さんが魅力なんですよ。

子どもも大きいですから、いっしょに行くこともありました。今は子どもが主人の写真を持って行きます。

●ご主人との長い生活の中で何か思い出になるようなことはありましたか。

私らはいとこ同士でしたから小さい頃のことからよく知っていました。だからけんかをする時は昔のそういう事が原因になるね。あまりにも知りすぎているから。主人が工業学校に入っている時に、私は女学校でしたから同じ水戸でたまたま寄るんです。その頃のことが原因になっていました。

主人が死んだ時にはびっくりしちゃってね。もう、悲しいことだか何だかわからない、無我夢中だったです。このごろになって悲しいなぁと思いますね。

●丹羽会長から貴重な方だとは聞いているんですが、会ったことがなくてどんな方かなと思っていました。ただ、生物などに詳しい方だとは聞いていましたが。

とにかく気持ちがきれいな人でしたね。子どものような透明な感じの人ですね。野心がなくね。

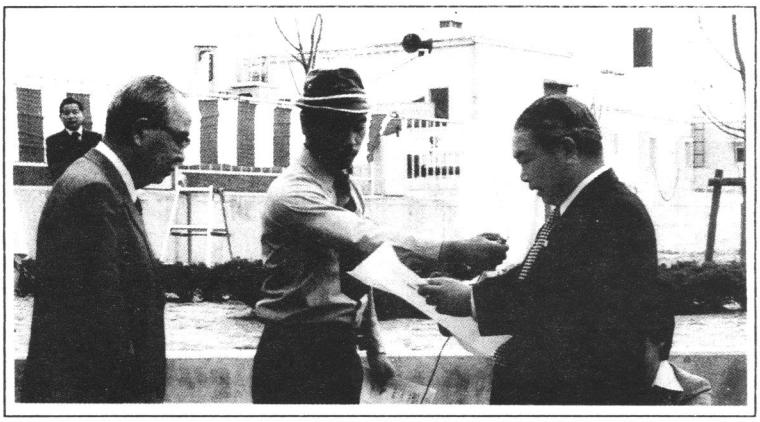
●私たちも川をきれいにする運動というのには本当に野心があってはできないでしょうね。

いま問題になっている堀川をきれいにする問題で、うちの会の方がなかなか参加しないのは、堀川をきれいにすることが心をきれいにするという問題であればいいんですが、そこに船を浮かべてお金を取るという観光会社に直結する危険があるというところですごく問題だというふうに私どもは考えています。小川さんの考えていらっしゃった、きれいな心で川をきれいにしていきたいということが、いろいろな生き方の中からぼくたちの運動をひとつひとつ組み立てているわけです。

魚が泳いでいったのを見た時はうれしかったですね。

●ほんとに汚なくってしょうがなかったらしいですからね。今年は「あゆ」が戻ってきたからという事であゆ釣り大会があります。

これもみな小川さんたちの力のたまものだと思っています。竹内さんにしてもそういうような方ですね。その他まだいろいろな方がみえます。こういう話をどんどん聞いて、私たちの揺らぐことのないひとつの柱にどんどんしていきたいと思います。



桜の銀行の目録を渡す生前の小川博さん（右はじ）

家庭にかける時間が少なくなったり、多少持ち出しもありますので、手弁当で行かなきゃならないボランティアですから。

そりゃやっぱり、夫婦はけんかできるだけ良いもんじゃないですか。こりゃ言ってあげましょって待ちかまえている時もありますものね。そして言えばせいせいするでしょ。夫婦だから言えるんじゃないですか。

●小川さんの生活というのは川というより海だったんですね。

いま庄内川も矢田川も非常に汚なくって、相当上流に行かないときれいじゃないんです。ヘドロとか生活排水が流れましてね。海も今は汚れているんじゃないですか。

茨城の水戸から三〇分くらいのところですが、きれいですよ。砂が真っ白でまばゆいばかりにきれいなんですよ。こないだ主人の納骨に行きました。

●石にかじり付いてということはよく聞くことですが、石にかじり付いてでも生きるというのは今までにあまり出会ったことがないんですか。

あの場合はそうしなかったら食べていかれないから。

●生前ご主人が矢田・庄内川のことについて奥さんに相談されたりしたことがありますか。

相談はしないけれども、とくとくとしゃべるからね。丹羽さんをすごく

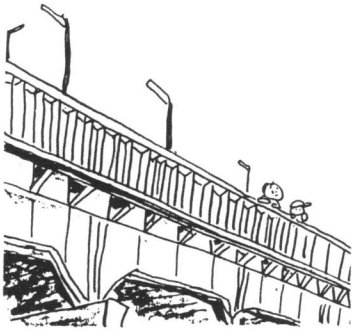
崇拝していて、その話は一生懸命話してくれました。せっせせっせと行ってそこの川に「ふな」だの「こい」だのがいて、こんなにきれいになったもんねぇと言ってね。

●ここの矢田川はまだまだ汚ないところです。

犬を連れたりして散歩するにはものすごくいいんですが、川そのものの浄化作用からするとちょっと考えた方がいいんじゃないかなと思いますね。ああいった所の植物体系がどんどん変わっちゃいますからね。

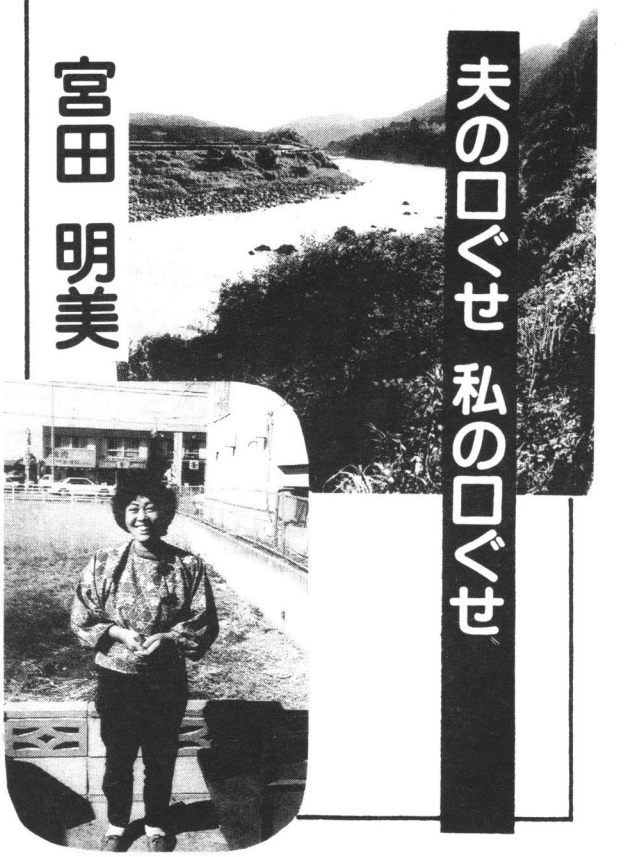
主人は、よく散歩したときに「ここには、あの植物があるわけだが」と言われてみると、足下にその植物がありましたね。ここは茨城よりあった。だから枯れ方が違っているってね。茨城は枯れるんですが、ここは寒くっても枯れないという事を私も経験しました。

●どうもありがとうございました。



夫の口ぐせ 私の口ぐせ

宮田 明美



●どちらでお生まれになりましたか。

長野県下伊那郡根羽村です。矢作川の源流になる所で、愛知県との県境です。山も川も空気もきれいで人口は少なく、名古屋にくらべたら住みよい所だと思うんだけど、なぜか名古屋に出てきてしまったんですねぇ。

●当時のどんな思い出がありますか。

一番大きな経験は、あんな山の中のいい所だけれども、五才のときに水害にあっているのね。七月の梅雨明け頃の集中豪雨で家が全部流されちゃってね。その時たまたま父親だけは山の仕事に行っていたものだから家にいなくて健在だったんだけれども、おじいさんとおばあさんと私の母親と妹と四人一度に亡くなったの。今も母親はいるけれど、それは亡くなった母親の妹がかわいそうだからってずっと母親のかわりして育ててくれたのね。そういう時はきれいな水がいいばっかりでもないね。

それで高校がないもんだから、名古屋の高校を出るために来たんだけど、そのまま名古屋にいついてしまったのね。

●田舎から名古屋に出てくることもすごく勇気がいることでしょうね。

でもね、学校行きたいだけで、一人だからさみしいなーとかそんなこと何にも思わなくって、とにかく高校に行きたいからということで出てきちゃったのね。下宿して名古屋の明和

高校へ行きました。卒業し就職してから、夜がひまでしかたがないものだから勤め先にはないしょで喫茶店でアルバイトしてたの。その時に主人と知り合ったのね。

●ご主人とはどんなふうに知り合われたんですか。

主人との出会い

喫茶店アルバイトしていた頃いじめられてたの。そういう所で働いたことがないからマスターの言うことを本当に聞いてやろうと思っていたの。マスターに「お客さんの水がカラッポになってたら早めにお水つぎに行けよ」と言われるのを主人が横で聞いているのね。水を植木の中にほかったり椅子の下にほかっといて「ちょっと、水」って言うの。「今言われとっただろう」って言うのね。「すいません」て持って行くんだけれど、なんべんもやるので、「すいません、椅子の下にほからんでください」と言ったんだわね。そんなことがたびたびあって、いつかしかえしをしなくちゃと思っていたの。今、一生懸命やってるんだけどね。もう二〇年もかけて。

●新婚当時はどんなご主人だったのですか。

その頃はね、マージャンと競馬に明け暮れてて、たまたま私がいとこにぐちこぼしたことがあったの。「しあわせ」って言われたから「だって夜中まで帰ってこんもん」って言ったのがまわりまわって在所に聞こえちゃったの。そしたら「一人で帰っといで」って私だけ呼びつけられたの。「そんな遊びしかやらないのと一緒にいてもしかたがないから、もう名古屋へ行かんでいい。話してきてあげるから」って父が言うのね。そんなこと突然言われても私そのつもりないから「そんなこと突然決めないでよ」って私も言ってね。「最後に困ってもうちへ入れたらんよ」って言うからね「いいわ、ほんならもうどうなったって帰ってはこうへんで」って名古屋へ帰ってきたんだけれどね。主人も少しは気にしていたんじゃない。「なんだった」って言うからその通り言ったの。そしたら「マージャンやめやあいいの」って言うから「いいけど、やめれぇへんでしょ」って言ったんだけど、それっきりマージャンも競馬もやらないもんだからねぇ。

●それからご主人は釣りの方へ移っていくわけですか。

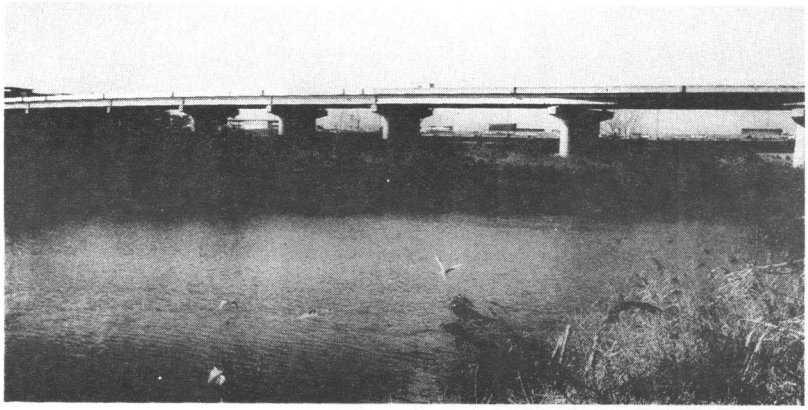
どうすりゃいいの

その頃も磯釣りはやってたの。知り合った当時にはマージャンと競馬ばかりだったから「もうちょっと釣りをやるとか他の事やったら」って言ったら磯釣りを始めたの。その時に主人がやけどして帰ってきたの。目と鼻と口しかなくて顔じゅう包帯なの、だからはじめは誰だかわからなくて「だれ」って言って声聞いてやっとわかるくらいに包帯してたのね。

それからは私の在所にも行くようになって、在所の父が川釣りに連れてってくれてたまたま上げた針に魚が引っかかっちゃったのね。それから川の魚を釣ることになって、投網の打ち方とかも父に教えてもらったの。

今それが役立ってるわね。名古屋市の依頼で魚類調査をやるときとか建設省に依頼されるとか「きれいにする会」独自のときでもね。

だけどね、川の釣りに行くときでも夜中から出て行くでしょ。名古屋に出てきて結婚してからだけど、私は、体を悪くしたのね。私が三九度とか四〇度という熱があっても主人は「釣りに行ってくるわ」って言うから「なら行っといで、帰ってきたら死んどるわ」って言ったことがあったんだけど、「ほんなこと言われても、何をどうすりゃいいのかわからんがね」って言ったから「わからんかったらお医者さんに聞いたら」って言ったら医者に電話して「どうすりゃいいね」って聞いたら、お医者さんに「熱は高いのはしょうがないけど冷やしてやったらどう



だね」って言われて、釣りに行くのをやめて持って行く氷を割って冷やしてくれてね。「そんなことまで言われて行けるかぁ」って言ってけんかしていたこともあったけどね。

●ご主人も奥さんのことを心配しながら、住民運動は誰かがやらなきゃいけないし、やらなきゃみんなが不幸になるっていう運動なんだからわかってほしいと思っていたんじゃないですか。

きれいになるまでは

私ね、名古屋に来て矢田川を見たときに、なんて川だろうと思ったの。「川じゃない」って思ったのね。ドブだと思ったの。真っ白だったからねぇ。自分一人になってさみしくなったら川のふちに立ってるのが好きだったの。だからずっと川を見てるんだけど、「なんて汚ないんだろう」って見てたんだわね。瀬戸に陶器があるから汚ないなんてそういうことは思わなかったんだわね。

●そういうのはご主人が説明してくれましたか。

「きれいにする会」をやるようになってからはね。その前は主人もなんとも思ってなかったんじゃないかな。だけどやっぱり、川をきれいにしようということになってくると、私は私なりの疑問はあるから「何であんな汚い川がきれいになるの」って言うでしょ。主人の友だちで「川をきれいにしようと思ったら企業がつぶれちゃうがぁ」って言った人もいるんだけどね。「そうだよねぇ」って言いそうになって話してたんだけど、それは私が昔のきれいな矢田川を知らないからね。主人が子どもだった時にその川で泳いだとか魚取ったとか、そういうきれいな川を知らないから、昔からああいう川だと思っていたの。だから都会の川はああいう川なんだとしか思っていなかったからね。きれいにする必要なんてないだろうし、なるわけないと思っていたの。でも、今の川見るとね、やっぱりきれいになるもんだねぇ。

●それがご主人たちの努力の成果だと、いま感じられますか。

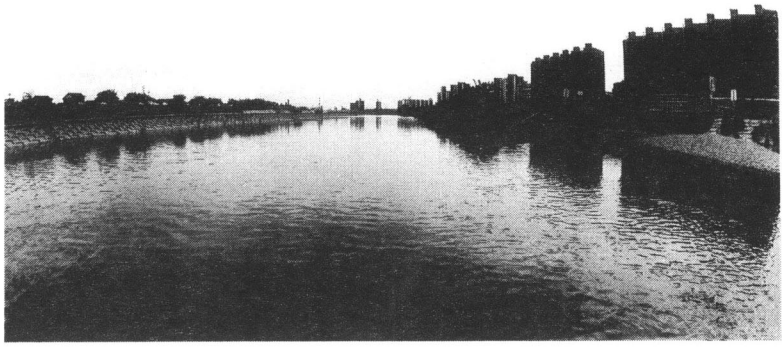
私たち、子どもがいないから主人が何かするって言えば一緒についていくことにしているの。ひとりで家にいるのいやでしょ。だから、主人が看板立てに行くんだと言えば一緒に車に乗ってっちゃうの。何にも手つだわなくてもそばに立ってるんだわね。釣り大会やっても一緒についてっちゃって、子どもたちが釣ってきた魚を見るんだわね。私の田舎にいた魚とこっちにいる魚とでは、魚の種類がぜんぜん違うんだわね。だから「なんていう魚」って子どもに聞いてたの。子どもは好きですから。

主人が事務局長をやっている頃に、子どもからの手紙とかいろいろ来るのね。子どもたちのが書いているのを見ると、やっぱり川がきれいになるまではこの仕事やめられないだろうなという気持ちはもっているのね。

●今ご主人の活動を見ていて主婦の立場から援助してあげれることはどういうことがありますか。みんなお仕事のこともあるし、家庭のこともあるし、でもご主人は会長ですから家庭のことがあっても東奔西走されるわけですが。

仕事も変えて

「きれいにする会」のことは今一番優先的にやっているね。最初は主人も主人の兄と一緒に土建業やっていて、兄にしてみれば「きれいにする会」の



用事に行く時に、仕事を中途で行ったりとかいろんなことがあるわけね。突然休む日もあるし、「名古屋市の交渉に行くから、あした休みだぁ」って言うとすごくきげんが悪かったの。

そんなことでしょっちゅうけんかもあったから「もういっそのことやめちゃって時間のとれる仕事をしたら」っていうことでやったのがタクシーの運転手だったの。それは自分の働いただけの売り上げで収入が決まってくるから、時間をつくろうと思えばつくれるし、他の時間で働こうと思えば働けるのね。それでやってたけれど、こり性だもんだからタクシー乗ったら組合に入っちゃって、組合の書記長やっちゃって、それこそそのときも朝四時になっても五時になっても帰ってこないというふうになっちゃうのね。組合の活動をして「きれいにする会」の活動をしていると収入がなくなっちゃうのね。

私は元気なときは働けるものだから、なにか仕事をやろうと思っていたの。たまたま夕食セットの配達の仕事があって、体は弱いけれど、時間が短くてもやれるし、医者に行ってきても誰にも遠慮もいらないのではじめたの。時間から時間までのパート勤めは私には向かないもんだからその仕事をはじめたんだけど、だんだんそれも忙しくなってきて、他の人を使ってたんだけどその人がやめることになった時に、その人に払っていく給料をみれば主人がやってくれればいいと思ったの。主人がいないときには私が手つだえばいいし、私が体弱くしたときには主人がやってくれるしというふうで、その仕事を主人にやってくれるように言ったの。組合をやってても余分にお金になるわけでもないからって今の仕事をずっとやっているんだけどね。私が疲れちゃってえらい時や入院してる時には主人が二人分やったりもするんだけど、私が調子がよくなれば、たまたま主人が市役所へ行かなきゃとか、県、市からの調査を頼まれたりする時でも行かせてあげることができるというのを考えて仕事をやってるんだわね。長い時間働かなくても短い時間で集中的に配達を終われればいいし、ずらすこともできるし、いろんな面で今の仕事をやってもらえるようにはなったのね。

●奥さんは時々川で散歩されることはありますか。

ランク上げを

川は好きでね、主人とけんかすると車に乗って堤防で遊んでるの。二時間でも三時間でもね。けんかして泣いてる時もあるけどね。うちの中に閉じこもっているというのがすっごくいやなのね。今はぶっそうだから車を降りて川をながめているわけにはいかないから、車の中から川をじっとながめて「あー田舎の川はきれいだったなー、人の顔が見えるのになー」とか思ってね。だから今でも田舎に走って行ってすっごくきれいな水を見ると何か心の中が洗われるような気がするの。

庄内川ももうちょっと透明度があってきれいな川になるといいのになっていつも思ってる。それをするには川のランク上げをしてもらわなくてはなかなかならないとは思うんだけれど、そのランク上げというのは非常にむつかしいそうだから簡単にはやってもらえそうにないみたい。田舎と同じAランクにしたらきれいになるんじゃないかなっていうのは思うんだけどね。

●私たち「きれいにする会」も、十三年努力を続けて、少しはきれいになったと思います。おっしゃるとおり、まだまだ問題が残されています。

きれいな川にしてほしいという要求をどんどんぶつけていけば、行政も対応してくれると思いますけどね。

ところで、子どもたちと川で遊ぶことがありますか。

気持ち悪いなー

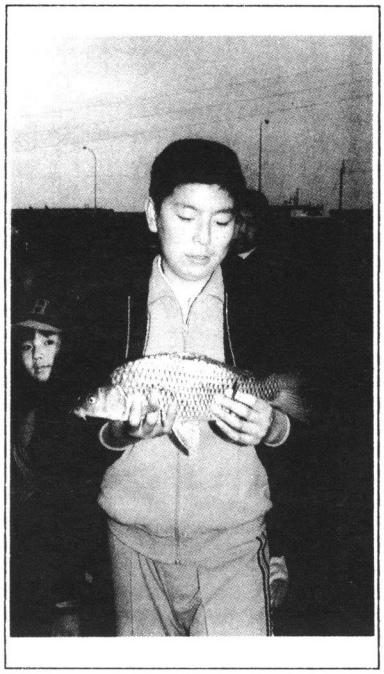
釣り大会のときぐらいしかないけれども、その時はいつも行きたくてね。釣り大会でみても、ここ数年、川自体は変わってなくて、やっぱり最初の頃の釣り大会が心に残ってるね。

最初は「食えない魚釣り大会」という名目でやっていたんだけど「食えないことはないんだ」と言ってた人もいたりして、その次には「食えるかもしれない魚釣り大会」に変えたの。ほんとに食えるのか食えないのか食べてみたらいいじゃないかということで、水分橋の魚と庄内橋の魚と松川橋の魚の三種類の魚を取ってきて串に色分けしたの。魚を刺したのが私だから、どの色がどこの魚というのはほとんど私しか知らなくて、子どもたちや来た人に「食べやぁ」って言うの。「赤い串食べよかな。青い串の方が安全かな」とか言って食べるの。どこの橋のかというのは当たらないんだけれど、一番食べれなかったのは水分橋の魚の緑の串で、庄内橋の魚の方がまだ食べやすいの。

結局王子製紙から出てきた排水が、自浄作用といって川が自分できれいにして庄内橋の辺に行くともう少しきれいになるの。直接の出口の水分橋の辺よりもね。

水分橋の魚を食べるとみんな「わー」言ってすぐはき出すの。「気持ち悪いなー」ってしばらく言ってた。食べた人には悪いからってジュースあげたんだけど「ジュース飲んだって直らない」っていうんだわね。だから食べさせたのは悪いけど、おもしろいことやったなって思ってます。

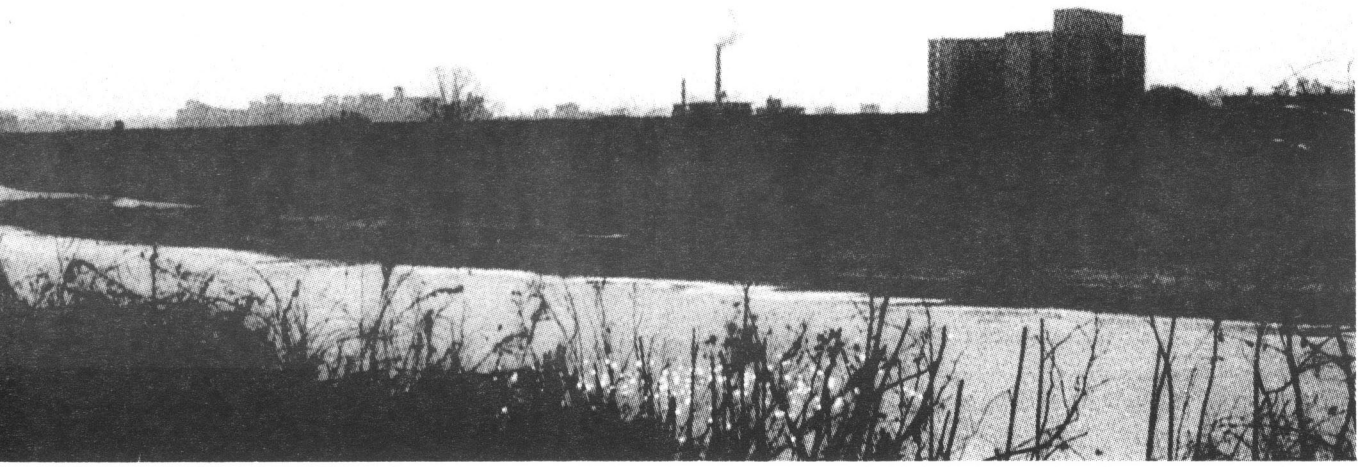
「それね水分橋のだよ」って言うと「えー、これ水分橋のってこんなに臭いのー」とか言ってたの。水分橋のところで釣り大会をやるっていうのも、立ってるだけでくさいの。王子製紙工場の排水のにおいでね。だからみんなに一番よくわかってもらうには、一番条件の悪い所でやった方がいいということでしょっちゅうやったんだけどね。最近は魚自体にはあの頃のにおいはなくなって、子どもは喜んで食べちゃうわね。



●きれいになったとは言っていますが、それが具体的に実証されたという事ですね。科学的な調査じゃなしに、人間の感覚でもね。

だから目で見れば十三年前に比べて川はきれいに見えるし、においも少なくなったから、一般的にはきれいになったと思っているんだけどね。だけど中に含まれているBODだとか何やらむつかしいものの計算をするとひとつも良くなってないということが言えるらしいのね。だからそれだけがいやなの。

今のにおいというのは王子製紙は王子製紙なりに排水のことを考えて処理場みたいなものを作ったようで

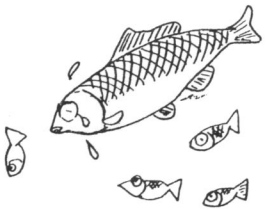


違ってきているし、瀬戸なんかの陶器をやってるとこなんかも沈殿槽みたいな溜め池を作って陶土が流れ出さないようにやってるとか、そういう点では目で見るときれいなんだけど、見えないものはまだ消え去っていないと思うんだわね。だからこの先も名古屋市の公害調査とかいろんなところで常に見張っておいてもらわないとね。昔は雨降った時に排水口を開けるみたいで汚い物が流されたことが多かったの。今もやってるかもしれないね。水分橋のところで見ててもあまり泡が立たないけど、庄内橋へ行ってえん堤の下の所を見てもらうとすごい泡が出てるの。洗剤のね。だから日曜日の昼前後が特に多いんだわね。主人も庄内川で「あゆ」がかけられるようになったらということでずっとやってるものだからね。気になるの。

●最後に、運動をやっている時の家庭の中にいろいろなトラブルがあると思うんですよ。出て行くと、家庭が大事か運動が大事かと奥さんに問いつめられて困ってらっしゃる住民運動家がみえると思うんですよね。そういう主婦の方に何か訴えたいことはありますか。

自分がやらなくちゃ

『次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会を』というのが「きれいにする会」のモットーなんだけれど、その運動に行くときや他の運動からの呼び出しがあって出てくときに、時間に遅れると私の方がハラハラするので「早く行かなくっちゃ」って今は言うようになってるんだけどね。



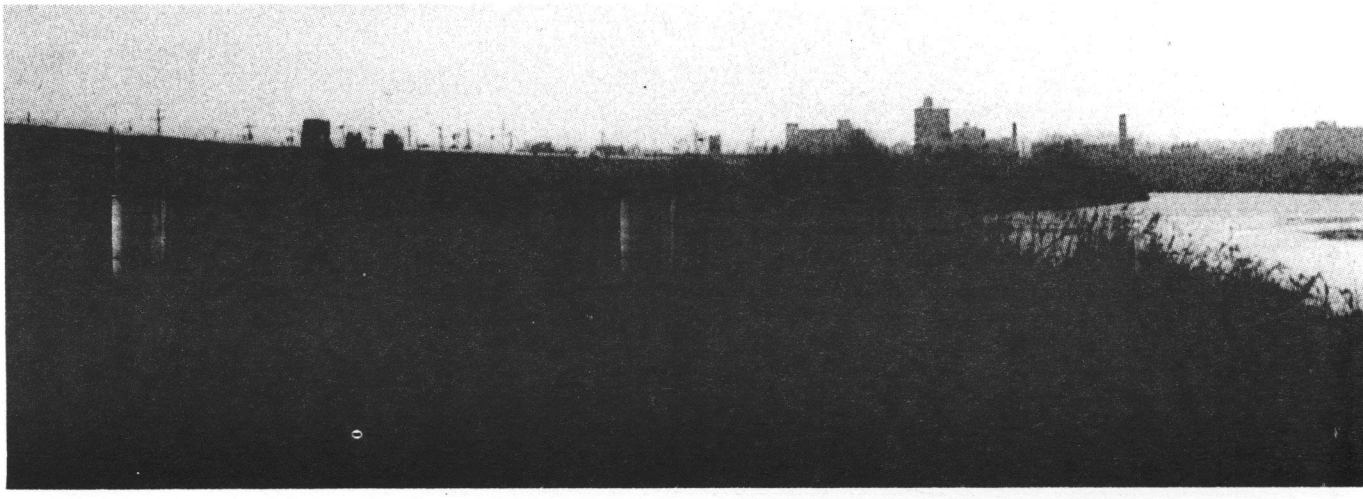
だから女の立場か言うと、奥さんに理解してもらってないというのはご主人の側にも問題があるんだろうと思うの。もうちょっと自分のやってることをわかってもらえるように、理解してもらえるように話をしなきゃいけないんだわね。「おれ行ってくるわ」だけでは、やっぱりわからないんだわね。「どうして行くの」っていうふうになっちゃうから、それを奥さんが言わなくてもいいようにだんなさんの方も説明してあげてほしいと思うの。

●たとえば「なんであんたがやらなきゃならんの。あなたがやらなければ他の人がやるんだから何もでしゃばってやらなくてもいいじゃない」というふうに思いませんでしたか。

最初の頃は思っていたね。でも自分も一緒になって運動に入っていってからは「だれかがやらなくっちゃ」じゃなくて「自分がやらなくっちゃ」と思うようになったのね。だから私は私のできる手つだいだけはしようというふうには思ってるの。主人が会合に出てくのも出ていけれるように段取りしてあげるのも私のできる事だろうしね。

●会の十三年の長い歴史の中で、名古屋市が本山革新市政から西尾市政に移ってきたわけですが、この中で高層ビルができたりで家庭排水が多くなって下水処理がおぼつかないというようなところを見て、市政の変化とこの運動の変化とはどういうふうにごらんになりますか。

本山さんは、ほんとに住民と一体になってという感じで「きれいにする会」の行事にもたびたび出てもらっているのね。だから私にしたらすっごく身近な人に感じてるの。車でみえてもお迎えにあがってテント張ってる所までいっしょに歩いて花を付けたりさせてもらったからね。去年やった「サバイバル庄内川」でボート下りの時も



元市長さんとして見えてくれたのね。そのときも本山さんの横に立させてもらって、すごく身近な人に感じてるの。また、新しい市長さんにも理解していただける運動だと思います。そして、期待しています。

●いい話をどうも。最近「矢田・庄内川」の運動をごらんになっていらっしゃってご主人に望まれることですとかがもしありましたら。

今まで事務局長できて、今度から会長ということになると大変だわね。事務局長の時は荷が重いのか軽いのかわからないんだけれど。私は今事務局長やってもらってる方ね、三宅さんっていうんだけれど、主人がやっとった時とは違ってその人ほんとに私が心配しなくてもいいのね。「ねえあれ書いた」「これやった」っていわなくてもスースーとやってくれるからね。そういう点ではすっごく楽なのね。だから今度は若い人たちで主人を追い立ててもらわなければいけないなって思ってるの。

●「矢田・庄内川」も十三年ということで、全国的にもすごく評価されているし、学者・文化人からも注目されている運動だということで、新しく会長になられていよいよ質的に高い運動の段階に入ってきて、大変だと思うんですけど、やってほしい事とか協力できる事とか、女性の目から見て、主婦もいっしょにできる事は何でしょうね。

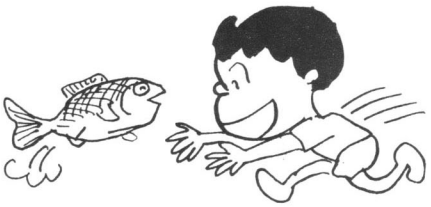
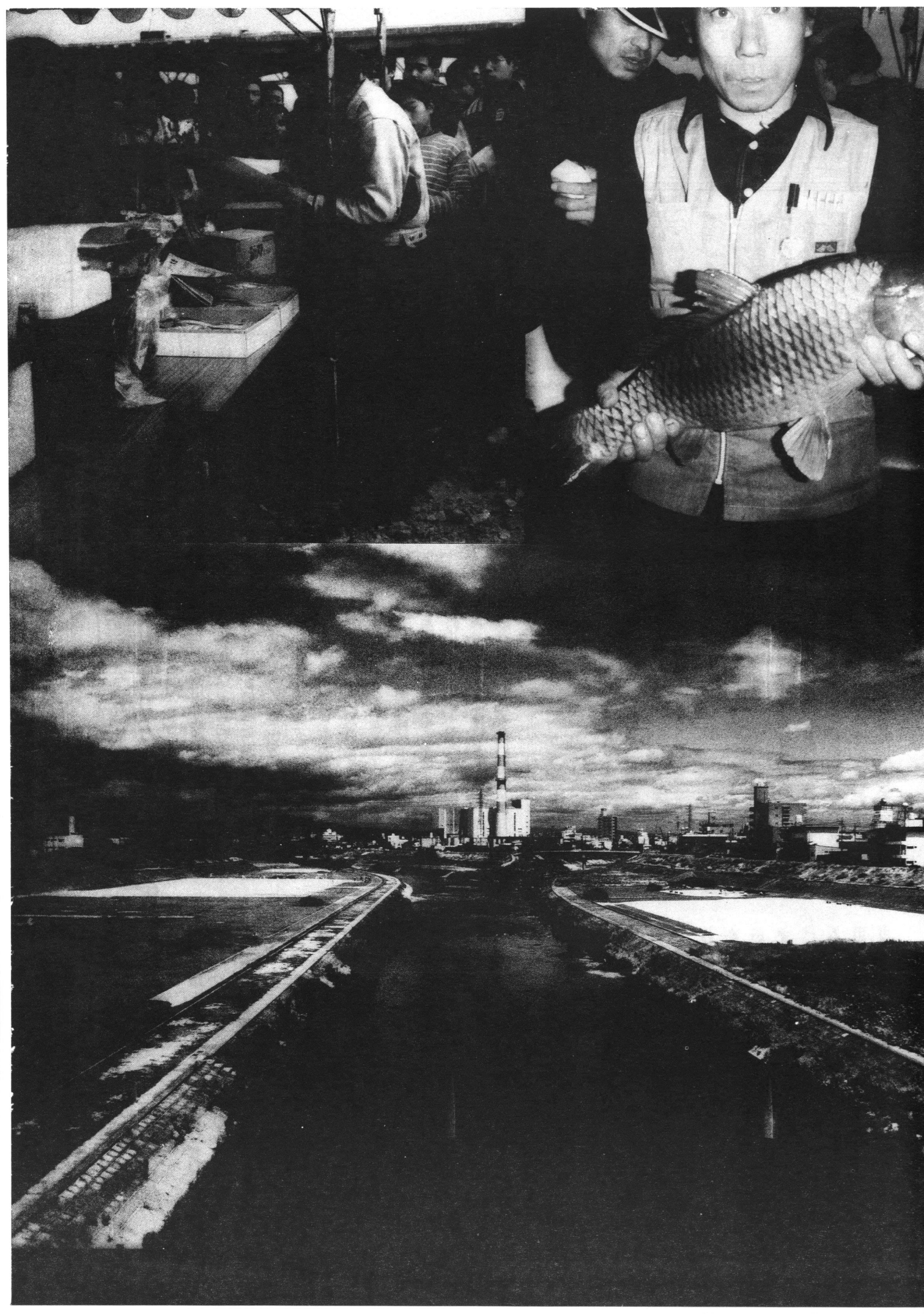
住民運動そのものは家族のトラブルをなくしてみんなの住みよい庄内川周辺や住民がしあわせになるような運動をやってるはずなんですが、現実にやってる人はいろんな葛藤をしながらやってるわけですが、何かそういう人たちに伝える事があれば。

「きれいにする会」って、川をきれいにしようと思ってやっているんだけど、いま川を汚しているのは誰かって言ったら主婦が多いのね。せっけんの粉の使いすぎだったりとかね。食器洗いとかいうものでも合成洗剤がほとんどでしょ。だからもっと主婦層に呼びかけなければいけない仕事なんだけれどもね。いま汚しているのは企業だけじゃないもんね。

●確かに最近では家庭排水が大きな問題になっていますね。以前の企業が汚すというような発想から住民も汚しているということで、そこらへんに転換点を求めていかないと、ほんとに机をたたいて悪者を一人つくってみんなで包囲するというようなせまい運動になってしまうということで、こうなれば住民運動は『しり切れとんぼ』になっていくと思いますけどね。そういう意味ではこの「矢田・庄内川」の運動というのは非常にユニークだというふうに全国から注目されているんですね。

釣り大会をやると子どもとお母さんがいっしょにみえるけどね。「お母さんが川を見て何を思ってるのかな」って思うことがあるんだわね。このお母さんたちが、自分だけでも汚さないようにって思って、洗剤を適量に使ってくれればいいんだけど、どうしても泡が出ないと落ちないんじゃないかと思ってたくさん入れたりする人が多いんじゃないのかな。

●これはご主人といろいろ相談されて新しい層に運動を広げるという重要な課題だと思いますので、二十四時間一緒ですからいろいろ検討されたらいいんじゃないでしょうか。

十三年たった現在、鮎がかろうじて生きている状態です。

これからは、私も加害者の立場で運動をしなければならないようで、非常に大変な転換期をむかえたと思っています。いま「鮎の楽園」「ホタルの里づくり」は夫の口ぐせになっていますが、私の口ぐせは、「もっと家事もてつだって」です。